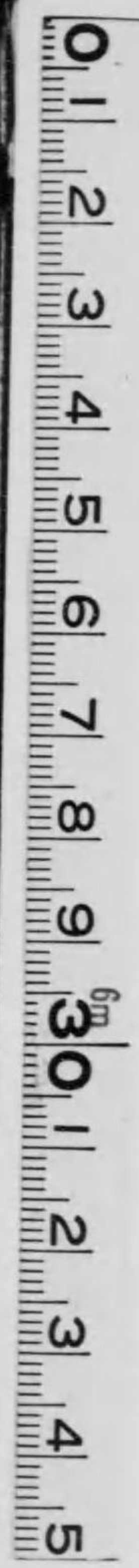


花道全書 中卷

11
3
489



始





花

道

全

書

錦鷄間祇候
正四位勳三等

櫻井勉閣下序

春秋庵薰甫著

駿々堂藏版

大正
10 9 20
内交



ものとも、或は開麗の約したるものとも云ひます。昔時は梅を指して單に花と稱へたものでありますが、村上天皇の應和三年、紫宸殿の前の梅の木を櫻に裁え替へられてより、花王の地位を梅より奪つて、單に花とさへ云へば櫻の事となつたのであります。櫻は世界中獨り我國にのみ産するもので、何國にても此の木の自生する處はなき而已ならず、之を移し植ゑても充分の生育を見ることは出来ぬさうで、古來我國の名花として尊まれるばかりでなく、今や諸外國にても、普ねく渴仰せられてゐるのであります。現今宮庭に於かせられても櫻を御愛賞遊ばさるゝこと深く、毎歲觀櫻御會を催うされて、内外の臣僚を御招きになり、御酒宴を賜はることが、御佳例となつてゐるのであります。

櫻には八重、一重があつて、或は香氣の高い句櫻といふもあり、一の谷の龜といふ意味よりして、熊谷櫻と名付けられたるは、花が皆上に向つて立つ甚だ異例のものであります。八重の姥櫻といふは花時に葉のない故に、姥の齒の無いのに懸けたる名でありまして、鹽釜櫻は花葉共一緒に出て美事なるもので、

葉まで(濱で)見るといふもじり名であります。斯様に細かに區別すれば凡そ二百種の上にも出ますが、大別すれば第一が彼岸櫻で、之は名に負ふ如く春の彼岸頃より咲き出します。第二が山櫻で、句櫻も、熊谷櫻も、淺黄櫻も、伊勢櫻も、大概これより出たる變りもので、山櫻は櫻中の原種であります。されば一口に櫻といへば、一重の山櫻に限るので、殊更これを尊び翫ぶのであります。それから第三は普通の吉野櫻で、分家だけに山櫻の面影を存してゐますが、染井吉野といふは枝が華奢で花も山櫻ほどの趣きはありませぬ。

扱上述の如く、櫻は實に花中の王として花の名を専らとしてゐますが、花道に於ては輕々しくこれを用ふるを禁じ、平生は切り溜めの花と定めて、是れを活けることを秘するのであります。もし此の花を活けたるときは、其席に他の花を置くことを堅く禁じ、余の花は必ず次の間へ下げて置かねばなりません。掛花にても置花にても、すべて櫻の挿方は麗かにして奥深く、濃艶線亂として席中に充滿たる風情を賞するので、花を澤山に遣ひて賑やかに挿すがよろしい。花少なくて閑靜なるは櫻の本意を失ふものであります。花は多く上より開くものでありますゆゑ、上に花を遣ひ下には苔を遣ふがよろしいので、止は常の花よりも少し高く入れなければなりません。一種挿しのものであります時宜によつて二種三種迄は苦しくありません。併し、決して余の花を雜へて入れることはならぬのであります。總じて三芳野の峰、初瀬の谷間を望む光景、又は大樹の影に宿りしたる意で活けるがよろしい。尙水盤に花を浮かせることや、花散る景色の活け方など口傳多くありますが、茲には詳しく述べませぬ。

一説に茶席には櫻を入れぬといひますが、これは花があまりに美し過ぎる故なので、書院等にも平素は好んで活くべきものではありませぬ。

(六) 紅葉

紅葉とは秋の末に至つて紅くなりたる木の葉の總稱で、楓、蔦、黄楊、黄蘗、白膠木、柿、錦木等種々ありますけれども、就中楓を以つて第一とし、紅葉し

たる楓を專稱するので、恰かも櫻を指して花といふが如く、紅葉とし云へば楓の事なのであります。櫻を花の王とすれば楓は紅葉の中の主で、共にこれを春

秋の司と並び稱せられてゐるのであります。楓は蛙手の略言で、葉の形が蛙の手に似てゐる處から云つたものであります。其若芽は色麗かで開けば青葉となり、霜に逢へば紅葉して殊に美しいが、中には赤味を帯びたるもあれば黄味がよりたるもあり、殊に秋の紅葉する時のごとく真紅な若芽を出すものもあります。これは赤い色素の液が葉の中に發生して葉緑粒、即ち葉の中にある緑色の元素を掩ふ故に赤くなるので、追々その液が變つて中に包まれてゐる處の葉緑が露はれると葉も又緑色に變るのださうであります。併し楓は本來が緑色のもので、それが赤い色の若芽を出すのは、畢竟人間が園藝的に種々の變種を作つたからで、自生の楓には決して赤い若葉を出すものはないのであります。葉の形にも又色々あつて、或は巾廣で切れ目の少ないのや細くして深く切れたのや、鋸り齒の大きいのや細いのや、殆ど全くな

いのや、種類は却々多く、天然自然に生じたる變種もありませうけれども、多くは矢張り人工の結果に外ならぬのであります。

閑話休題、これも又制花の一で斯道には八ヶまじきものであります。楓は始め下の方より色を染める性あるものでありますから、挿花にも下枝の照らぬものを用ひてはなりません。初紅葉の頃は下枝赤く中枝は半照で上枝は青葉がよろしく、中旬には下枝中枝ともに赤く上枝を青葉とし、盛りに至つては上中下三段ともに赤く照つたる葉を用ひる様にするのであります。即ち時分によつて差別があるので、所謂これを三体三枝の活け方といふのであります。併し照葉と云つても中には薄紅葉や青、黄味が、つた葉もあるがよろしいので、『類題集』政爲の歌に、

みかす見る心に分くる色はなし、枝の紅葉の濃きも薄きも。

とある様に、皆一様に赤いも却つて興少なく、花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは』と兼好法師が云へるも實にさることでありませう。

これも又通例より少し高く止を入れるので、一切應合ひを遣ふことを禁じます。されども春、夏の候青葉の楓には應合ひを添へるも苦しくないもので、白の躑躅、白の夏菊などを添へて挿したるは、淡泊りとして宜いものであります。水盤なぞの大活けには老木の洒れたのがよろしい。併し決して苦を用ひてはなりませぬ。床に紅葉の挿花あるとき、他の花を同席に置くを禁ずることは櫻と同意であります、尙幾多の口傳があります。

(七) 牡丹

牡丹も又草花の王と稱せられてゐるもので、世に富貴草、名取草、豊橋など、堪へられ、春の花に殿りして千嬌萬態、實に紅艶類ひなきものであります。

花は八重、一重、紅、白、紫等ありますが、總じて九品の位があるといひます。「野山草」に曰ふ、

牡丹は總體を九品に分ち見るべし、九品と云ふは一位、二形、三色、四重、

五實、六瓣、七葩、八葉、九木なり。

と。其各條に就いて説明したる中にて、三色の如きは。

三に色と云ふに二種あり、咲き出し赤みたる様なるは珠玉咲なり、青みたる様なるは碧玉咲なり、珠玉咲は艶あれども碧玉咲は艶なし、又或は之に違へるもあるべし、酔あり斑點あるは上花の外なるべし。

と。其外詳細を極めてあります。そは兎まれ種苗店などに見へる大平、神樂、七福神など、自がじ、名付けたるものを擧ぐれば數百種の上のものもありますが、大別すれば要するに普通の牡丹と寒牡丹の二つであります。

牡丹の花を活けるには、初の頃は苔を下に満開を上遣ふのでありますが、眞盛りに至つては此差別はありませぬ。尤も三才の三本で、通例の花よりも止を高く挿すこと櫻と紅葉と此の牡丹の三種に限り、他の花を同席に置くこと、應合ひを遣ふことを禁ずるも又同様であります。牡丹は書院等の花であります、茶室には向きませぬ。尤も利休は紫の牡丹を好んで活け、或る時牡丹の葉

をすつかりもぎ取つて、花許りにして入れたと云ふことであるが、これは櫻と等しく餘りに花か麗し過ぎる故であります。花器は風流なれば何にても構ひませぬが、夏なれば籠の花器に挿して最もよく移るものであります。挿方は先づ用の枝に性の強よい葉を澤山に入れるので、是を獅子隠れの葉といふのであります。此の葉の上に満開の花を入れて、夫より体の花を入れるので、体には半開を遣ふがよろしい。此の花の際に付きたる葉を下り葉とし、体の後へ花を見越して出でたる葉は上り葉とするので、是を花隠しの葉と云ふのであります。下り葉はやがて昇る勢ひありて右旋とし、上り葉は左旋にするので、是則ち陰陽和合の葉と心得るがよろしい。体用と入れてその後へ黒木を二本長短に入れるので、一本は花より二寸或は四五寸許りも高く遣ふがよろしい。此の黒木は牡丹の本性をうつしたるもので、無くて協はぬ大切なることでもあります。風流なる枝振り少く意の如くならぬものでありますから、假りに南天燭に色付して用ひても宜いのであります。色の付け方は灰墨に辨柄を混ぜて

糊にて解き、篋と枝を矯めたる後これを塗るので、或は飯の糞溢れたる汁をもつて練りて塗ればよく色を保つものであります。止には苔を入れ

第五十八圖



るので、
稍水際を
高くし、
性よき葉を澤山に遣ふの
で、則ちこれを爪隠しの葉
と唱へるのであります。總
じて葉の組方は上り下りにて陰陽
を定め、花は天地人の三才を備へ
ること第五十八圖のごとくであります。

冬牡丹は花の軸短かく、葉の莖つまつて活けるに困難なるものであります。故に冷水にて一日一夜とくと養ひ、黒木に錐もみして花を付けるので、これ冬

牡丹の傳であります。葉は花に準じて拵らへるがよろしい。開と苔と二輪遣ふときは陰陽、半開一輪のときは、天地和合の花となすを定法とするのであります。

(八) 蓮

蓮ははちすの略言ではちすは蜂窩の義なのであります。櫻は日本の花王であつて牡丹は支那の花王と云ひ、蓮は印度の花王といひます。故に此三種をもつて三國花王の傳と稱し、又河骨、水澤洞、蓮の三つは共に余花を用ひぬもので、是を三草と云ふのであります。

蓮の活け方は二葉一花、五葉二花、七葉三花等大活けには魚道を分けて入れ、尙大なる廣口の花器なれば二株も三株も入れるので、二花五葉の入方は第五十九圖のごとく、尤も二葉は水に浮かせて置くのであります。蓮には秘傳の多きもので、三世相、一花一葉、三世一瓶、三世三瓶などの挿方があり、葉には立

葉、流葉、浮葉、開葉、水切葉、水上葉、檀木葉といふて七種の區別があります。

第五十九圖



過去とし、性のよき葉を現世となし、檀木葉をもつて未來とすると云ひ、これをもつて活けるを三世の入れ方と號けるともいひますが、元來蓮は水の揚げ惡いものであります故、先以つて養ひを第一とし、其性情及び時候に應じて活け

るを肝要とするので、強いて此説に拘泥することはありませぬ。之を蓮花に象るときは、先づ開きたる花をもつて現世とし、蓮臺を過去とし、苔を未來とするので、未だ全く開かぬ一輪の花を挿したるを三世相の花と稱へ、之を卓下等に用ひることは秘中の秘事であります。

一花一葉も元より蓮は二葉に一花出生するものでありますゆゑ、一花一葉は法に非すと云ふ人もありますが、一花一葉とは云へ、實は矢張り二葉一花を入れるので、一葉は水上に立ち伸び一葉は水面に浮かせて置くのであります。白蓮なれば苔を低く、開花は立葉を打越して高く入れますが、紅蓮は葉より下に花を挿すが蓮出生の本意であります。

三世一瓶の挿し方は即ち三世の傳を一瓶に兼備して入れるので、体は過去で蓮臺を用ひて活けるか、さもなければ破れ葉又は枯れ葉を挿して、これに開き花を通例の座に入れ、用は現在で、満開もしくは半開に葉は半開を入れ、未來の止には小さき苔を遣ひて檜木葉を挿し、尙浮葉、水切葉など取り合せて按排

よく活けるのであります。

三世三瓶とは、三世を三瓶に分けて活けることで、一つの床に三瓶並べて飾るのであります。先づ未來の花は床の陽の座即ち明り口の方へ置くので、花形は眞の体、葉は巻葉許りを用ひて止に苔を入れ、随分勢強く活けるのであります。現在の花は床の中央に置き、花形は行の体にて立葉、流葉、水上葉、水切葉、開葉、檜木葉、浮葉等、此の七種の葉を組んで入れ、花は半開、満開を取り交へて賑かに挿すがよろしい。過去の花は床の陰の座即ち臺目の方へ置き、花形は草の体で枯れ葉破れ葉を多くし、蓮臺を主として之に半開の花を應合ふので、瓶中すべて寂しい景色に活けるものであります。

(九) 菊

菊は何時の頃より人に賞翫される様になつたかと云ひますると、和漢三才圖繪には、今からして一千五百餘年前、仁徳天皇の七十三年に百濟の國より青

黄、白、赤、黒の五種の菊を持ち來つたと書いてあります。又その後村上天皇の頃には、禁中に於いて「開菊」と云つて、菊の優劣を争ふ御遊びがあつたといふことでもありますから、既に其頃から愛賞せられたものゝ様に思はれます。昔時九月九日には禁中に於いて重陽の節會を行はせられました。これが俗にいふ菊の節句で、當日菊の御宴に臣下へ賜はる御酒の中には菊の花が浸されて、至つて香りの高い濃厚なるものであつたさうで、これを菊の水と稱へたのであります。而して謠曲にも「老いせぬや藥の名をもさくの水」とあるごとく、菊酒を呑めば無病息災に、延命長壽が出來ると言ひ傳へられてあります。當時も宮中に於かせられては春の觀櫻御會と同様、觀菊御會を催ふさせられて、臣下へ御酒宴を賜はるが例であります。殊に此の花は、忝なくも我が皇室の御紋章に用ひさせられてゐるので、これを十六菊とも申し、花瓣十六枚の菊花を正面より見たる形でありまして、今より一千〇八十余年前第五十一代嵯峨天皇の御宇より、御紋所に定められたと云ふことでもあります。

菊には星見草、形見草、ちぎり草、翁草など非常に多くの異名がありますが、大抵和漢の故事或は長壽の目出度い意より生じたるものゝ様であります。菊には春菊、夏菊、秋菊、冬菊とありますが、單に菊と云へば秋菊のことで、種類は澤山にありますけれども要するに大菊、中菊、伊勢菊、嵯峨菊などあります。その中にも中菊が秋菊として一番に持て囃されてゐるので、又の名を正菊とも云ひます。大菊は唯花が大輪と云ふのみで、中菊程の見榮えはありませぬ。挿花とするにも矢張り中菊が第一で、至つて花の大きいのは活け悪いといふ許りでなく趣味も少ないもので、他の花の應合ひなどに遣ふには小輪の菊に限ります。

菊を活けるには四季それ〴〵に、花葉の遣ひ方に心得があります。春菊は一種挿しにもすることがありますけれども、多くは應合ひに用ひます。夏菊は青々として盛んなるが其本性でありますから、葉の養ひに一しは意を用ひ、照葉、枯葉などがあれば取り除いて、勢ひ強く活けねばなりません。又秋菊は葉より

花に重きを置くので、随分花配りに注意するがよろしい。葉を切ることはなりませぬが、少々枯葉、虫喰葉のある位は差し支へありません。殊に寒菊には照葉が第一必要なので、時分柄多分照葉となりますから、赤くなりたる葉を賞翫するのであります。すべて大輪の菊は勢強く花の麗しいのを愛するので、餘りに數多く挿さぬが奥床しくて宜しく、小輪の菊は之に反して、花葉數多く入れて賑かなるがよろしい。夏菊は勢ひ強くして繁からず、秋菊は優しくて、派手に活けたるをよしとするのであります。小菊の類は花首揃ふて長短なく、叢立つて生ずるものでありますから、三段五段と段取にして活けるので、段取りの活け方は既に述べたる通りであります。

扱て菊花五色の傳と云ふは、陰曆九月九日、重陽の節句に活けることで、体に白菊を入れ、用に黄菊を、止には赤菊を遣ふのであります。この外青黒の色がありませぬゆゑ、葉の色は青きをと、瓶水を黒色に象つて、之を五色の挿方と稱するので、花の入れ方は第六十圖のごとくであります。之は前に述べた

様に、菊の

始めて渡來

したる時は

五色であつ

たので、尙

宮庭の重陽

の節會の故

實に依るの

であります。

菊は長生の仙花なる故に慶席壽筵に用ひ、又これある時節には病床に活けて

よろしいので、それは

今日毎に菊を薬とする人は千歳の秋を過るなりけり。

仲實

といふ歌意によるのであります。

第六十圖



(十) 松

古來松は千歳の齡を保ち、祝ひ壽く群木の長たりと尊まれ、霜雪を経るも色を變せぬ貞木と稱へられ、大禮に缺くべからざるものとして、普ねく祝儀に用ひられてゐるのであります。

松にも種々ありますけれども、主なるものは赤松と黒松で、赤松は俗に女松と呼び、黒松は男松と云ひます。併し赤松の中にも雄木と雌木とあり、黒松にも雄花と雌花の生ずるもので、異なる處は、赤松は葉が軟かで細く短かく、枝も亦柔かでありますが、黒松は葉強く又太く長くして、枝は堅く脆いものであります。五葉の松は葉が五本宛つ生ずるので、赤松に似て尙一層葉細かく柔らかなで、枝も至つて粘り氣の強いものであります。

松は縁を賞翫するものでありまして、正月元旦や婚禮の席には、縁の生ひ出た若松七本を以つて七縁の花を活けるので、是れ即ち注連の傳であります。入

れ方は第六十一圖のごとく、先づ用を入れて次に用添を入れるので、用は陽で

圖一十六第



入れるので、活け上げたるときは正面よりは見へませぬ。次に体受を入れ、体受を入れて陰陽と備へ、止と止添を入れて又陰陽と備へるので、天地人の三才各々陰陽を調へ、これに相生結びの水引を懸けるのであります。尤も三才の花矩正しく、七本の松をもつて、五躰生ずる象ちを活ける故に、則ち之を七五三の

入方とはいふのであります。松の拵らへ方は、随分長き眞直なる若松を取り揃へて、一々本の方の葉を撈り、其後を葉をもつて摺り、水にて洗へば眞に美麗になります。又布海苔を煮て水漉にてこし、葉に塗りて紋り、末の方三四寸許りを残して、紐にて巻いて養ふので、体、用止なせそれくに見繕ふて、豫じめよい程に矯めて置くがよろしい。至つて矯め悪いものでありますから、粗龜のない様氣を付けねばなりません。

枝松を生けるときは水盤、馬盃なぞの花器に、砂止又は五徳止などにするがよろしい。大木なれば多くは一本挿しで、其外二本三本迄であります。松は多く鉄を入れることを禁するので、禁忌の枝の他は、大抵自然の儘に放任するがよろしい。三才の中、止の一体は多く應合の草花にて調へるので、切株つきの松と云ひて、根元に大なる松の切株を應合ふこともあり、又枯れ枝を添へて挿すことなどもあります。夜陰に乗じ、一本松の根本へ白菊一輪を入れて、雲間の月と稱することは利休の作意に出でたのであります。

或る時、前田利家侯の館に招待あつて豊太閤入來のとき、其床に、松に紅菊を應合ひにして活けてありました。其時利休も御供をしてをりましたが、太閤利休を召して、花の結構は如何にと尋ねられたので、松は木扁に公と書く、君をして十八公に倣らへ、彌榮へ目出度き事を書きて、御禮の心と覚え候と申しましたので、太閤いと機嫌よく、夫より酒宴も終りに及び、亭君御もてなしに、利休に花仕らせ度と花を御持参ありし故、利休辭みがたく、右の花を其まゝに用ひて白菊一輪を挿し添へ、雲間の月と申し上げたので、亭君興じてとりあへず、

色更へぬ松の下枝の白菊を、夜やは雲間の月と見まがふ。

と詠まれました。これによつて太閤益々興に入られたと云ふことであります。閑話休題、庭前の花は何によらず、床の間に活けることを禁するのであります。松は何程庭に松あり、或は鉢植など置きあるとも、床に松を活けて差支へませぬ。併し縁の若芽の出たる草木を、應合ひに用ひることはならぬので、

之は前に云ふごとく、松は殊更に縁を賞美するものなる故であります。

(十一) 竹

竹も又松と其徳を等しくし、葉の繁きは君子の徳にも似て千代を壽くもので、松に次いで目出度きものと賞せられてゐるのであります。

竹には眞竹、孟宗竹、淡竹、紫竹、漢竹、鳳凰竹、篠竹などの種類があつて、多少時季を異にしますけれども、挿方に大差はありませぬ。竹は四季を通じて用ひますが、就中陰起つて陽の通する時をもつて宜しとするので、それは六、七、八月の頃であります。五六月頃、廣口の花器に砂留にして活ける時は、株分にして筒を一二本應合ひに挿すことがあります。然し筒は天を貫く形に出生するが故に、詠めよろしきものではありません。それで是を入れる時は少し横に倒し、一寸八歩離れて、稍々前にすゝめて挿すのであります。七八月に至れば此筒が成長して、青葉の青々としたる若竹を愛して活けるのであります。

竹は正月二日の花で、七月の七夕にも伐り竹を二本活けることもあります。平生にても、伐竹を花に入れる時は陰陽と二本入れるので、陰の竹は末口を平に切り、陽の竹は大斜に切るのであります。陽の竹に三節、陰の竹に二節を置き、都合五節とするので、陽の竹に二枝を置いて体用と備へ、陰の竹には一枝で留とするのであります。則ち是

圖 二 十 六 第



をもつて三才を調へるので、入方は第六十二圖のごとくであります。第六十三圖の様に、二枚竹の葉には魚尾、金魚尾、飛雁の三別があります。

圖三十六第



葉を魚尾と云ひ、三枚出たのを金魚尾といふので、飛雁と云ふは、二枚の中に芽吹葉の出でたる葉で、中の葉はこれをより葉ともいふのであります。之

に依つて葉を透す時には、体の葉には飛雁を多くして魚尾を少くし、用の枝には金魚尾を多くして飛雁をも遣ひ、止の枝は重に魚尾を置いて金魚尾、飛雁を切り透すがよろしい。

元來、竹は一節に二枝宛つ着いたものでありますからこれを陰陽と心得、兩垂とならぬ様に一枝は高く一枝は低く、体受、用添として備へるがよろしい。

一本挿しときは多く二才でありまして、應合ひの花をもつて一才を補ひ、三本のときは各々一枝宛つにて、三才を調へるのであります。小竹の類は三本、五本も挿しますが、一種挿しとしては面白くないので、美麗な草花など應合つて入れるがよろしい。但し節あるものを應合ふ事はならぬので、これ竹は節をもつて賞する故であります。又竹にて編みたる籠、或は竹筒などの花器に活けることを嫌ひますが、庭に竹あり、懸物、襖などに竹の繪あるも、その床に竹を活けること、松と同じく遠慮に及ばぬのであります。

(十二) 梅

梅は我國に於ては、最も古くより栽培されたものであります。前に述べましたる如く、往昔は花と云へば梅の事であつたので、花の名を櫻に譲つて後は之を花の兄と号けられ。風雪を冒し、百花に先んじて咲き出づるより是を武動貞操にたぐへ、清香彩色諸花に勝れて愛出度き故に、和漢共に厚く之を賞するの

であります。

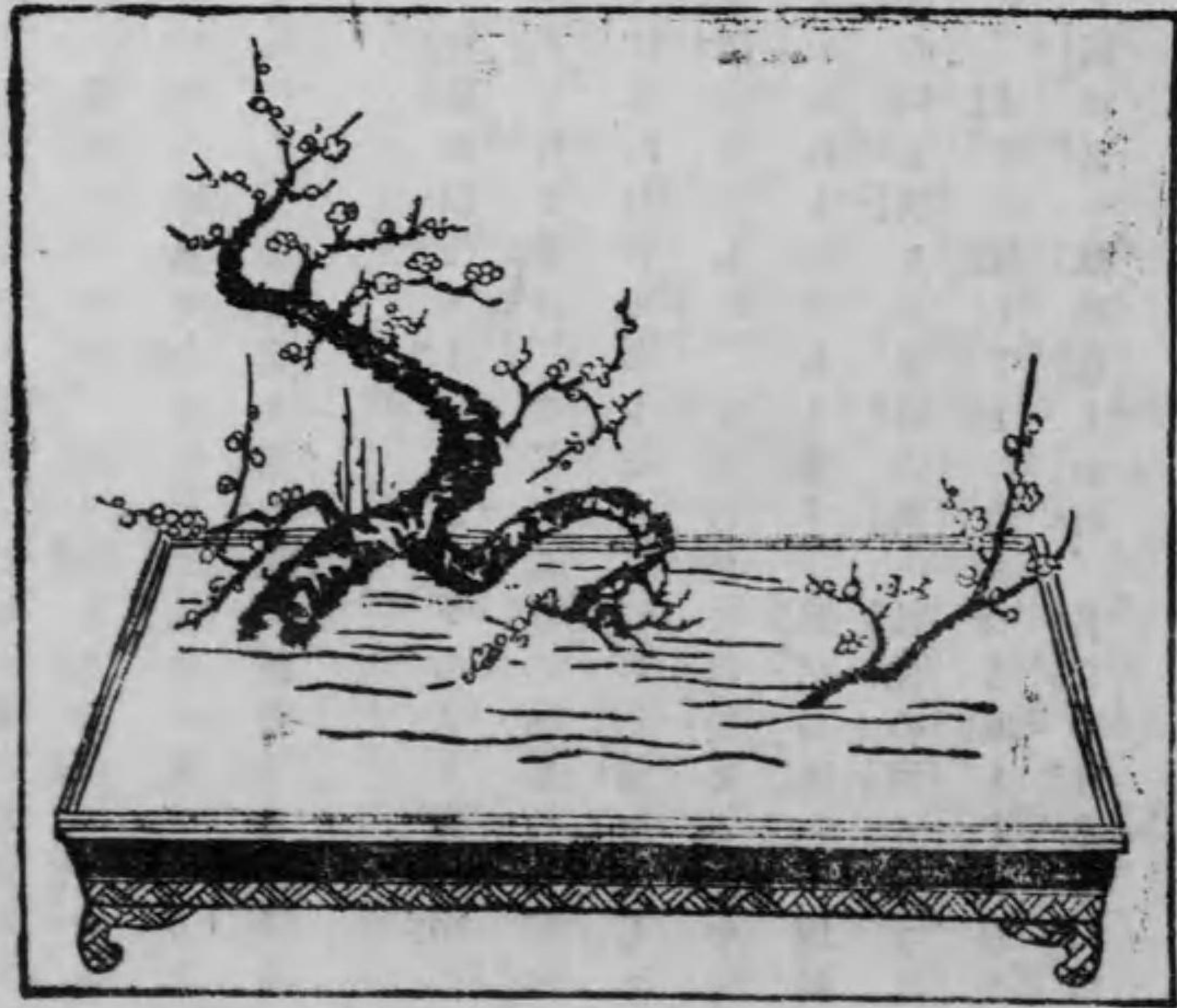
梅の種類を大別すれば野梅、寒梅、冬至梅、緋梅、紅梅、白梅、杏梅、八重、一重、斑點などで、其内にも早咲、中咲、晩咲或は大輪、中輪、小輪があります。又枝にも篠と云つて上に真直に立つのと枝垂があり、葉にも圓葉、細葉などあつて、詳しく云へば實に數へ切れない程であります。中にも一重の白梅を第一とするのであります。

梅は古瓶に活けて移りの宜しきもので、掛花にも置花にもよいものであります。白梅は軽く閑靜に入れ、紅梅は枝脈はしく澤山に挿したのがよろしく、いづれ古木を愛して入れるのであります。尤も体用は一本に備へたるがよろしく、止に女畫を備へ且又氣條（直生の義で真直に伸びたる青木）を三本、体の後か用に添へて遣ひます。則ち都合五本、これ注連の傳の活け方であります。但し女畫、氣條を用ふる事は古木活けに限り、若木には禁するので、女畫のとり様氣條の遣ひ方は第六十四圖にあらはす如くであります。

南性の梅は陽氣を司る梅なる故に、咲き滿つる所を活けるので、滿つれば散ること近く、是れを陽中の陰の梅と云ひ、花は右旋に入れて上座床、則ち陽の床に直すのであります。されば体の枝に半開を遣ひ、用の枝に滿開を用ひ、止には多く苔を入れるので、枝數多く賑やかに活けるがよろしい。尤もこれは春の初旬より活けるが順であります。

北性の梅は陰中の陽であります。

圖四十六第



まして、左旋に入れて陰即ち下座床に直すのであります。これは將に花開かんとするところを活けるので、体の枝に満開をつかひ、用の枝と止の枝に半開と苔を遣ふのであります。苔は陰にして内に陽氣を含むが故に陰中の陽であります。此の梅は随分開静に入れるがよろしく。冬分より初春迄の活け方であります。

臥龍梅は東京本所龜井戸にあり、枝流れ出で、土につき、それより根を出し又大木となりて、多くの枝土に進み下りたる勢ひ、さながら龍の臥したるが如きをもつて、水戸光國卿の斯は名づけられたのであります。この形容を寫して花に挿るには、廣口、馬盃などの花器がよろしい。尤も自然に屈曲ある枝を見立てなければ、悪しく矯めたるはよからぬものであります。臥龍は第六十四圖のごとく花矩の格より離れて、花器の向ふ隅より手前の角へ枝先の出るやうに入れるので、枝のうねり曲たる所を、水中に浸して土に着きたる象とするのであります。水を潜りて先へ出でたる所は又一瓶の花と心得、各自の作意を以つ

て存分に活けるがよろしい。氣條は長短五本根より出し、女畫は止に遣ふので、足枝の地を指すものは伐らねばなりません。この足枝といふは臥龍の幹より左右へ長短に踏み出したる枝を言ふのであります。花留は大抵砂か轡を用ひるのであります。其外のものを用ひても差支はありません。

却説白梅と紅梅を活け合す時は、白梅を体に紅梅を用留に遣ふか、白梅を体用に遣ひて紅梅を止に入れてもよろしい。他の花を應合ふときは必ず葉あるものを用ひるので、花物なれば色の差合はぬものでなければ不可ませぬ。又梅は第一其芳香を賞美するのであります故、匂ひある花を添へることは、絶対に避けねばなりません。けれども庭前に梅あり、額、掛物に梅の繪あるも差し合ひを嫌はぬので、これは松、竹、梅の三つに限ることあります。

(十三) 水仙

水仙は、六花四葉出生するが本質でありまして、嚴冬寒威を忍んでよく根株

を増し、子孫絶えざるを祝して婚姻の席に用ひ、其名に因んで新宅移徙の式なぞに活ける愛で度きものであります。初冬に於いて最も賞翫し、中冬に盛んなれども、春に至れば興うすきものであります。是に依つて花少なく幽かに活けるがよろしい。大挿の時は中冬より霜枯の葉を一二枚應合ふので、春に至つては三五枚も有るがよろしい。

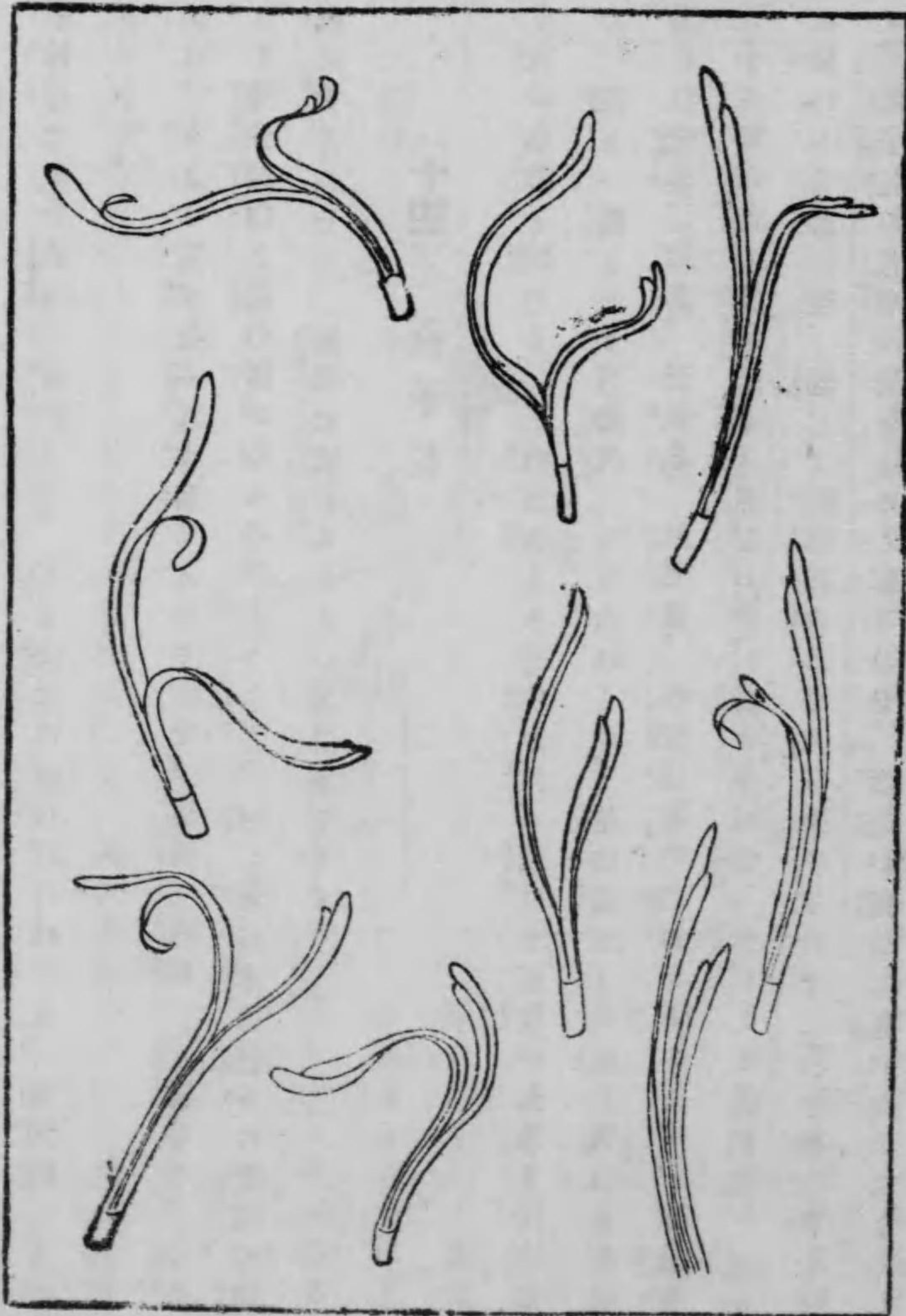
水仙は成るべく葉性強き一纏なるを撰み、花も縮れて、餘り長く伸びぬを宜しとするのであります。二纏れの葉はその次で、葉性さへ強ければよく矯め直るものであります。多く纏れて、而かも葉性の弱きものは直り難いのであります。

葉組の拵らへ様は、先づ一本宛取り上げ、白根の所を両手をもつて靜かに揉み、又は捻つて其莖根を柔らげ、先づ花を抜き取り、夫より次第に葉を抜き放すのであります。水仙は白根を愛し、これを見はして活けるので、又元の如く葉に被せなければなりません故、破れぬやうに取り置かねばなりません。板、

疊の上などに置けば風に當つてすぐはせりますから、葉を抜き取つて直ちに水に漬けて置くので、さすれば決して破れる事はありませぬ。扱抜き取りたる葉は一枚宛僻直しをするので、食指と中指、拇指の三本にて葉を摘み、本より末の方へ、葉の剛弱を見計らひて五七遍も扱き直し、長短を程よくして重ねるのであります。但し餘りに強く扱けば葉の色悪しく賤しく成りますゆゑ、艶の落ちぬ程度にしなければなりません。又外の長い葉は日表の凹なる所を、内の短い葉は日裏の凸の方を扱けば程よく重なるもので、尙口中の唾にてつくれば誠によく付くものであります。

水仙の出生は二枚宛重つて葉の出るものでありますから、何れも二枚宛亂れぬ様に重ねるので、長短の差は多く、ひ違ふのは宜しくありませぬ。これを二つ合せ、双方の間に花を挟んで以前の袴、即ち白根を根本に差し込むので、袴は外の長い葉より一葉宛つ差し込んでよろしいが、一纏にして本を斜にそぎ、糸にて巻いて差し込めばよくはまります。組上げたる葉は第六十六圖のごとく、

圖七十六第



回水
仙

二百二十七

假りに紙
捻にて亂
れぬやう
に括つて
養ひ置き、
後取り出
し、活け
上げてよ
り紙捻を
取除くのであります。葉は指先にて矯む
れば自由になります。いづれ二枚宛重ね
て離れぬやうに、第六十七圖のごとく種
々の恰好を拵らへるので、葉先を曲げて

圖五十六第



回水
仙

二百二十六

圖六十六第



振りを付けたるを曲葉と云ひます。尤も曲葉は面白げなれども、兎角賤しき好みでありませぬ。

水仙は三本より五本七本九本迄も入れるので、体流、内用、止流など、手練に任せて随分面白き花の活かるものであります。但し葉の形は色々に違ふて同じ形容の重らぬやう、風流に活けるがよいのであります。

(十四) 燕子花

燕子花は葉蘭と同じく、三枚五枚より七枚九枚、或は十五枚十九枚も挿けるもので、花も一輪より十五輪位でも入れます。花は葉よりも低く入れるもので、葉には冠葉、添葉、三枚葉、露受葉、水吸葉等の名目があります。三枚葉は第六十八圖の如く長短三才に組むので、長き葉は即ち天にして是れ陽、短き葉は地にして是れ陰、而して陰陽和合して人を生ずるのでこれを芽吹葉と云ひます。燕子花の花形は葉をもつて作るので、葉先が開ひて亂れたのはよろし

圖八十六第

圖九十六第



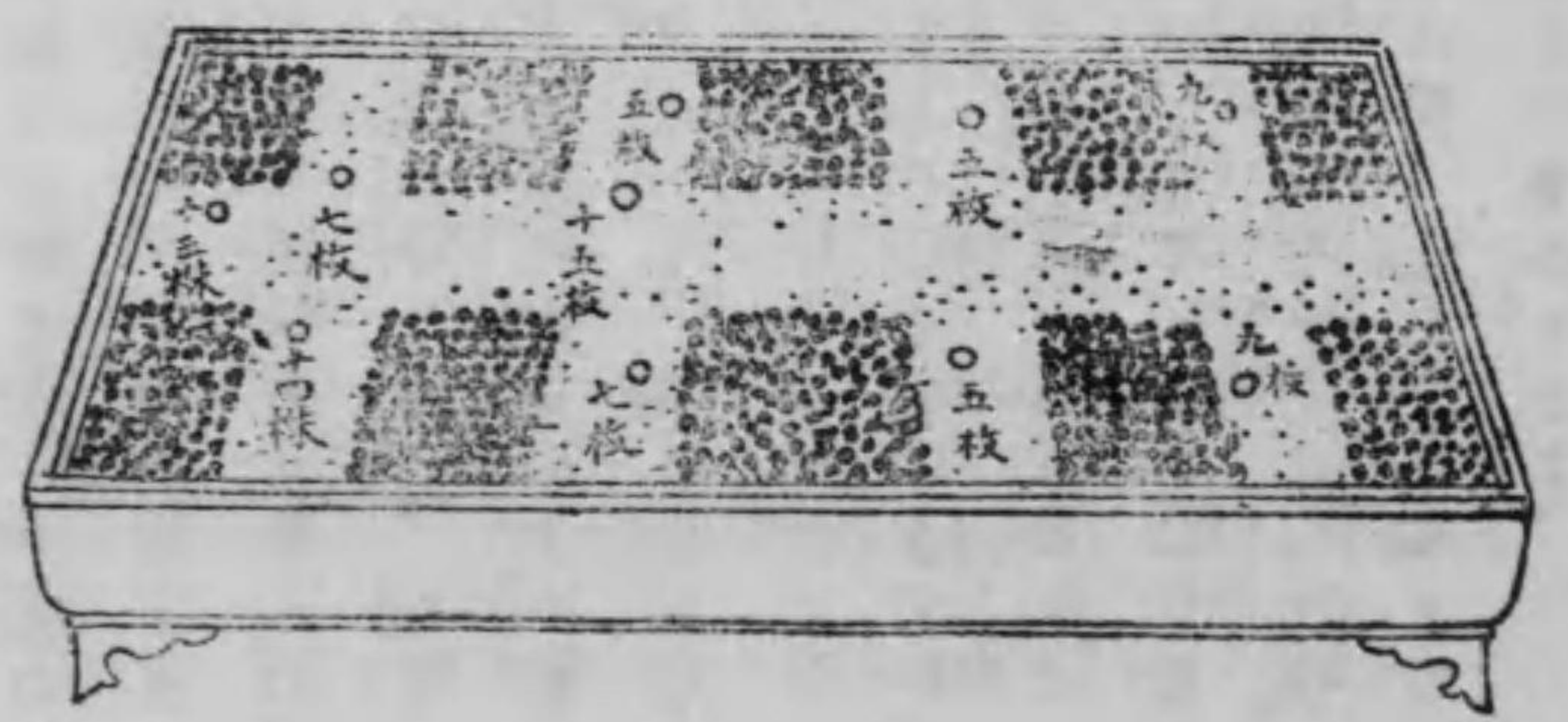
くありませぬ。さればとて自然の儘にては細りよき葉は少ないので、一枚宛つもぎ放して恰好よく長短を拵らへ、都合よき葉を撰み寄せて組合せるのであります。勿論葉は強くして僻なき直なるが遣ひよろしい。燕子花の根元を切れば粘り液汁が出ます。これをつけて葉組をすればよく着いて放れぬもので、或は水仙のごとく唾にて付けてもよろしい。

挿方は先づ用に三ツ葉を入れて稍々高く花を入れ、次に体の葉を入れるので是を冠葉と云ひます。それより少し低く後へ添葉を一枚入れて其下に荅を一本入れ、そして止と後止を入れるのでこれを露受葉、水吸葉といひます。活け上げたるところは第六十九圖のごとく、則ち花二輪葉七枚の入れ方であります。十一枚に花五輪も入れるには、始めは矢張り三枚葉を入れ、夫より用の花を入りて、其後へ花より稍高く冠葉を入れ、次に用の花よりは低く用添の花を入れて又冠葉を入れるので、次には体受の花一輪冠葉一枚、又体の花に冠葉と添葉を入れ、止に花一輪又冠葉を入れ、夫より水吸葉と露受葉を入れるのであります。兎角燕子花の入れ方は始めは三枚葉を入れ、夫より花を挿す毎に冠葉を入れ、体に添葉止には水吸葉と露受葉を遣ふので、此外入方種々ありますけれども是に準じて勘考すべく、茲には一二を出して之を略します。

燕子花は參州八ッ橋をもつて名所とするので、真中に大河あり、其兩脇に四條宛つの小川ありて柳手の如く八條に流れ、各々是に橋を掛けたるが故に八ッ

橋と云ふのであります。此の景色を寫して花に入れるを八ッ橋の挿方と稱へ、花器は大廣口を用ひるのであります。先づ真中に横へ流れの景色を取り、縦に四條柳手の象ちを作るので、黒白の石をもつて水陸を分つこと第七十圖の如くであります。入方は始め定法の据え所に花五本葉十五枚の大株の堅鱗を入れ、其の後右の方へ寄りて水潜の葉五枚花は半開一輪を用ひて横鱗の花を入れ花器の半ばに出すのであります。又右の方手に九枚花二輪の堅鱗の花を入れ、向ふの縁には五枚と九枚と二枚、但し五枚は堅鱗、九枚は横鱗にて花は各々二輪用ひ、尙九枚の下へは二枚宛つ組みたる水切葉を十四株入れます。大株の手前少し右の方へ、

圖十七第



七枚に満開苔の二輪を添へて中より外へ向けて出し、其次へ小葉五枚に半開の花一輪、鱗の格に入れ、其ほとりに八歩明けて三枚、魚道を入れるのであります。次に大株の左に少し手前へ寄せ、曲有る葉許り左へ出して横鱗の格を入れ、此の葉の下より左の方へ、芽吹葉二枚宛つ組みたるを十三株水中に入れ、尙手前へも株をわけて水中に十四株入れるのであります。尤も此活け方は多少本性に違ふ所も有れど、所謂虚實の法にして佛家の方便と云ふが如く、詠め宜しければ多く咎めぬものであります。

四季咲きの燕子花など、花有るときは何時にても活けてよろしくありますが七八月の頃よりは、三ツ葉の中葉を花萼蒲の如く長くし、水吸葉、露受葉などは赤葉を用ひるので、秋冬の頃に至れば枯れ葉を多く遣ひ、花も一輪か二三輪迄で、寂寥しく活けるがよいのであります。總じて燕子花はたをやかにして強からず、花の莖を隠して水際を清く入れるが宜しい。花は紫の色を賞するもの故、取り合せて活ける時は、白き花は會釋ひに用ふべきものであります。

(十五) 柳

柳は青柳の糸と言ふより長きためしを引き、慶席に祝ひて活けるものであります。柳にも多く種類はありますが、普通挿花に用ふるものは枝垂柳、杞柳、狗子柳などで、狗子柳は又猫柳とも猿子柳とも云ひます。活け方にも晴、雨、

圖一十七第



回柳

風、雪の柳、結柳、縮柳などの花形がありますが、多くは四季共に他の花を會釋つて活けるもので、すべて柳は大抵水邊に

生ずるものでありま
すゆゑ、下には池、
川などの有ること
感想を起さしむるや
う、其本性を寫して
入れねばなりませぬ。
猫柳を數多く挿す
ときは直なる枝を撰
りて勢強く水際正し
く活け、体の後へ二
三本圓く球の如く縮
ねて入れるので、之
を柳に手毬の入方と

圖 二 十 七 第



云ひます。

長閑なる春の景色に活ける柳は大枝垂で、掛花器か置花なれば橋杭、薄端な
どがよろしい。入れ方は第七十一圖のごとく、枝先は各々真直にすらりと垂れ
て、風もなく極く静かに長閑なる春の曙の景を現はすので、尤も枝は死活に矯
めるのであります。

風吹き柳の入方は七十二圖のごとく、これに用ひるは小枝垂の柳で、花器
は水盞、馬盃の類がよろしい。体の枝を矯め返して上にはねあげ、用の枝を手
前の方横に吹き靡かせ、止も用と同列にして枝先を上にはねあげるので、すべ
て吹き上げ吹き下しいろくに騒ぎたる有様に、枝を曲に矯めて挿すのであり
ます。

雨中の柳は讀んで字のごとく雨に打たれてゐる景色であります。枝は微風に
動いてゐるやう少々は矯めるので、數多の枝より露の落つるやう養ひ方に秘傳
があります。

雪中の柳は第七十三圖のごとく、降り積む雪に枝撓んで今にも折れそうに見えるやう、随分器用に活けるがよろしい。

圖三十七第



枝垂柳を釣り舟に活けるときは槽花に入れて、舟の底より上にて横麟の格を定め、それより下りたる枝は上り下り兩様に遣ふのであります。

其外箱柳の活け方などは、別項に詳しく記述するを以つて茲には之を省きます。

(十六) 藤

藤には白紫の二種があります。二重切などの掛花器か水盤などに活けるので、掛置共に花は喰出しの半開を賞美するのであります。夜の席には至極恰好のものであります。白居易の、

『夜深不語中庭立月照藤花影上階』

の詩も畢竟夜の藤を賞する所であります。是を木に纏ませて活けるときは松に限るので、應合ひの花には早咲きの美人草か金錢花の類ひがよろしい。藤と同性の蔓物や、芍薬などのごときは決して用ひる事はなりません。

馬盃などに入れる時は水陸を分け、石を飾つて谷の流れに添ひ、或は池の水にうつる景色に活けるので、水邊には早咲の水草を應合ふがよろしい。藤に燕子花、河骨を應合つて三種を一器に活けるには、黒白の砂をもつて水陸に分け三才の石を飾るので、天石の後には藤を入れ、夫より四寸八分を隔て、水中に河骨を地石に入れ、次に三寸六分魚道を明けて同じ水中に燕子花を人石に入れるのであります。原來藤の出生は左旋のものであります。花に活けるとき

は右旋左旋と蔓を巻き交せて用ひるがよろしい。花も満開は見事なものでありますけれども、好んで活けるものではありませぬ。苔と若葉を愛して、英のものと二三輪色を見せたる所を五房か七房ばかり遣ふので、もし花咲き揃い葉も多く出でたるときは、花は大小二房程とし、葉も大葉を透して芽吹葉を見せる様にすることがよいのであります。地石人石に入る燕子花は七葉二花を挿し、河骨は半開、角葉などを取交せて五枚か七枚を入れるので、總体の恰好は各自の鍛錬に任せて、景色よく工夫するがよろしい。

(十七) 山吹

山吹には黄と口白と、又一重と八重とあります。花葉共に麗しいので賞翫するもので、

七重八重花は咲けとも山吹の、實の一つだになきぞ悲しき。

といふ古歌にも有ることく、實のらぬ故に一名これを憂い花とも云ひ。實は

即ち子なれば、子孫のなきは不吉といふ所より之を忌みで、婚禮の席などには用ひませぬ。然し至つて美しいものであります故、若し祝儀の席に用ひんとならば、萬年青の實の數多く付いたるを應合ひに入れるが宜しい。元來萬年青は花は格別のこともありませぬが、實は誠に見事であります。殊に葉は萬年青の名あるごとく、幾年も青々として尙追々と若葉を出生し、壽命の永きものとして婚禮其他の祝儀に用ひられ、頗る高尚なるものであります。則ち、山吹に實なき故この萬年青の實をもつて補ひ、山吹の不吉を轉するのであります。併し山吹の外には、萬年青をもつて春の花に應合ふてはなりません。これは總て實物は秋冬の候に於いて賞翫する故に、冬は添花に遣ひますけれども、春は花をもつて賞するので實を用ひず、畢竟山吹は實なければ萬年青を借りて目出度するのみ、夫故に春は山吹に限つて萬年青の應合ひを用ふる事と心得るがよろしい。山吹を活けるには掛花とするが最も適當でありまして、置花としても場所と花器に應じて曲花に活ければ宜しいが、三才挿としては趣味の浅いものであり

ます。依つて多くは釣、掛花器に入れますが、置花としては高野の玉川の景色を擬して活けるが頗ぶる風情の有るもので、これは菊込とも數入れともいふのであります。

玉川の山吹の活け方は第七十四圖のごとく、花器は大廣口に蛇籠の花留を用ひ、其中に砂石を詰めて風流に飾るので、花は豎鱗と横鱗を活けるのであります。この豎鱗の鱗こそ陰陽を象るもので、豎鱗を体とし、横鱗を用として豎

第七十四圖



置花としては高野の玉川の景色

鱗の下へ、株間一寸八分或は三寸六分あけて横鱗の花を入れるので、体用の二段として、水の陰に和合あるゆゑに止の花を入る事を禁じ、又体は渦の真にし、右旋左旋と取扱ふがよろしい。元より山吹は陸木でありますけれども水邊を好むので、玉川の山吹は谷間の流れに添ふごとく、各々好みに任せて配合よく活けるが宜しい。
菊込みの活方には澤山に入れるがよろしい。尤も二株に分けなくとも苦しからず。花枝ともに半の數にして体用と挿すのであります。

(十八) 太蘭

蘭の類ひは大方大株小株と、魚道を分けて活けるものであります。又花なき時は水草の花を應合ふて入れるが宜しい。いづれ蘭物一株活けるときは會釋ひの花を遣ふべきものであります。

太蘭は段取りの活け方にするものでありまして、澤山に入れるときは、天地

人別々に花拵らへをするのであります。先づ五七本宛つ末を揃へ、それ／＼に假括りして穂先三四寸を残り、細く裂いたる木綿切れなどにて巻き始め、三段五段或は七段九段と段を取り、各々穂先少し宛つを残り、次第に寄せて巻き下し、本は一つにして巻くのであります。尤も好みに任せて少々は矯めてもよろしい。斯様にして後、末を下にして根本より水を注ぎかけ、池川か或は深き桶に水を入れてこれに生け込み、一夜露を受けさすのであります。翌日花に入れんと思ふ時に取り出し、又根本より水をかけて挿すので、活け終つて後静かに巻いたる布を取るであります。廣口に活けるときは下司板を拵らへ、これに穴を明けて竹の筒を入れ、太蘭の根を能くして入れるがよろしい。勿論板の上は砂留であります。

或は右の花に切株二株ばかり、魚道を分けて入れるも宜しい。是は二三分或は一寸ばかり、水の上に見へるやうに末口を切り揃へて入れるので、其切株の中より若芽の生え出したることく、穂先の處を四五寸に切り、ひつじ生えに混

せて入れるのであります。又水草の花を應合ひに挿すときは横鱗の格にして、景色よく入れるがよろしい。

以上の如く養ひの餘暇なく、早細工に活けんとするときは、数は何本にても長短をつけ、これを揃へて中程を紙捻にて假りに結び、根本七八寸を鬘付油にて附けるがよろしい。但し油は内側に付け、外より見えぬ様せねばなりません。尙後より遣ひ添へ度き所あれば、一二本宛つ表へ油の見えぬやうに付けて遣ふので、燈心草なども右の如く活方は同様であります。

(十九) 河 骨

浮花、沈花と云ふ事がありますが、それは何ういふ事かと云へば、浮花とは其始め『落梅浮淵水』といふ詩の心に依つて、故人が梅花を水盤の水に浮めてより起りたる事でありまして、夏日炎暑の砌りは水盤に石竹の類の、小輪にして色麗はしき花を五七輪水上に浮めて、客室の椽側などに置きますれば、瀟酒

として何となく清爽の氣を覚えしむるもので、是れを浮花と云ひます。又沈花と云ふは古歌に、

五月雨に沼の岩がき水越えて、真菰かるべき方も知られず。

とあるよりして、五月雨の頃河骨の花を沈めて活けることとあります。紫羅欄、燕子花の類、水草も多くありますけれども皆水中に入れ、ば花が損じますが、此河骨ばかりは水中にても花清く、決して損ずることはないのではありません。河骨を活けるには廣口の類で、花留は轡か觀世水其他龜、蟹など何を用ひてもよろしいが、飾石を置くことは無用であります。先づ花器の中程を深みと見立て、少し左か又は右に寄せて淺瀬の心持ちにて立鱗の花を活けるのであります。体の葉は開葉にて、用には半開止には角葉を入れ、体と用の間に開き花、又体と止の間に低く苔を入れるのであります。用の葉の下には水叩き葉と云つて小さき開葉を一枚水より五六分離して入れ、後止に又角葉を入れるので、止の角葉は都合長短二本、是即ち五葉二花の活け方であります。尤も七葉二花、

第七十五圖



九葉三花入れるも宜しい。夫より水叩き葉の下手前へ水に漬けて開花一輪に小さい卷葉を添へて入れるので、これは水底深く沈みたる景色であります。又同じく水叩き葉の横向ふに寄りたる處へ、小葉の開きと半開と角葉に苔一輪を添へて入れるので都合三株、但し大廣口ならば五株も七株も活けて宜しい。淺瀬の株の鱗の花は丈高く、すべて軸の細いものを造るので、花器の半ば即ち深みの花は軸短かく而して太きを用ひるが宜いのであります。是れ則ち五月雨に水量増れる

池沼の景色でありまして入れ方は凡そ第七十五圖のごとく、斯様に水中と水上の兩様に活けたるを浮沈の入方と稱して、陰陽自然の趣きを愛するのであります。

(二十) 萩

萩は秋の七草の一つで、七草とは言はずも知れたる秋の野に咲く七種の草花で、萬葉集に、

『秋の野に咲有る花を指折り掻き敷ふれば七種の花』

萩の花、尾花、葛花、瞿麥の花、姫部志、又藤袴、朝顔の花』

とある如く、餘程古き以前より愛翫されたるものであります。併し茲にある

朝顔の花は槿花を指して云ふたるものか、牽牛花を指したるものか、或は桔梗

を指したるものか判然しないので、現今は朝顔を除き桔梗を加へて秋の七草と

稱します。

就中萩は古來七種の筆頭に數へられてゐる灌木でありまして、葉は一極三葉、

恰かも棗の葉に似て秋の初め紅紫色或は白色の可愛い小さい花をつけます。種

類は色々ありまして其妻糸を連ねたる如き宮城野あり、枝條垂下せずして直立

する亂馬野あり、丈小さく花瓣大きくして疎に咲くいつさい萩あり、其外木萩、夏萩、嗜萩、溝萩、姫萩等ありますが、花に活けるには何れも大同小異であります。

花器は籠か薄端か或は船などにも適し、掛置共によいものであります。澤山に入れるときは用に五本か七本、体にも又五本か七本を入れ、止は切葉にして随分枝數多く遣ふがよろしい。此の止の切葉は猪の座と云ひ、猪の臥したる景色とするので別して曲枝を遣ふがよいのであります。夏の萩は澤山に入れては不可ませぬ。最も閑栖なるを賞するのであります。秋の萩は之に反して枝數多く葉の茂きを以つてよしとします。萩は少々の見切りは許しますけれども、

第七十六圖



無論見切りのない程結構なる事はありませぬ。

(二十一) 薄

一叢薄穂に出で、招くを見れば秋を知る、と云ふその薄こそ實に尾花の前身であります。此の草にも種類は多く、觸れば人の手を傷つける名も恐ろしき鬼薄、鳥渡風變りには鷹羽薄、又は箸鷹、切班のすゝき、縞薄、糸薄などあります。鬼薄は葉には何んの見所もありませぬが、尾花の美事なることは同屬中の随一であります。

薄を一種挿しにするは八月十五日に限るとも云ひますが、それは兎もあれ餘り面白からぬもので、大方は他の花を會釋ふて活けるのであります。十寸穂、眞麻穂、政穂の三種をもつて最も尊賞するので、此の三種を一瓶に入れるを三傳と稱へ、堅くこれを秘するのであります。併し別に仔細はありませぬ。多く挿すときは葉を見切ることを許しますが、成るべく見切らぬ様にしなければな

りませぬ。又葉が扇を開けたる形となるを嫌ふので、丸く一方に垂れる様に入るがよろしい。置花なれば薄端、釣瓶など、掛花なれば三日月形の花器に入れて面白いものであります。

(二十二) 女郎花

女郎花は淡黄色で、枝の尖端毎に五瓣の小さい花が咲き、其態さながら蒸したる粟のごとくに見へて、他の一輪一花の艶麗なるものとは趣き更つて、又中々に可愛らしきものであります。梅葉は花の莖より、地上稍や離れて生ずるのでありまして、小さいけれども其形が大根の葉に似てゐるので、是れを大根葉と云ひます。

女郎花は一本二本、點々まばらに生じるのが自然の性であります。故に挿花に愛する時も、餘り數多く入れることは宜しくありません。廣口等に活けるときは株を分けて二株も三株も入れ、其株間に三枚或は五枚七枚も出生の葉を組

み入れて、山野の景色を寫すのであります、若し又大根葉なきときは、薄端なとに稍々數多く三段五段と段取りにして活けるのであります、勿論出生を正しくするには、二三枚なりとも梅葉を遣はなければなりません。

(二十三) 玉簪花

玉簪花の葉組は葉蘭に準すれば宜しい。尤も紫苑、岩落なども、すべて之と同様のものであります。入方は先づ用と用添を入れ、次に花を入れて、夫より日表を出して体受を入れるので、これを鏡葉といひます。又次に体を入れて止を挿すので、其れ五葉一花の入方であります。同じく五葉に二花を入れるときは第七十七圖のごとく、用の葉を入れて次に花を入れ、鏡葉の境葉を入れて次に体受の葉を日裏を出して入れ、夫より体の花を入れて体の葉を入れ、小形の葉を一枚止に入れるのであります。三葉一花より五葉二花、七葉二花、或は三花、九葉三花迄入れますが、餘りに葉數多きは宜しからぬものであります。又

第七十七圖



花の匂には葉より伸び出でて高く遣ふのであります、未だ盛んならざる時分には、稍低く入れ、

五月の初め頃は葉よりは花を低く挿すので、時に應じて用捨しなければなりません。

花器は薄端、角端など籠、土器の類にもよく移るものであります。

(二十四) 芭蕉

芭蕉は凡そ四月の末より葉を生じ、十月に至つて凋むので、性暖地を好みま

す。稀に花が咲きますが、色は黄白の蓮の花の萼に似たる形で、大概六月頃より萼が出て、八月迄に開きます。しかし是れは陰花なる故に慶席に用ひる事はなりません。

芭蕉を活けるには大廣間の床にて、至つて廣やかでなければ、小席には移りの宜からぬものであります。花器は廣口か馬盃がよろしく、葉の餘りに大きなは不可ませぬ。随分小さい葉を愛するので、四季ともに他の花を應合ふことは見合せるが宜しい。是は七葉一花を習ひとするので、七種の役葉があります。先づその名目を述べますれば、巻葉といふは若葉のことで、折れ葉は半ばより折れたる葉、丸葉といふは折れも破れもせぬ全たき葉で、半葉は心より裂けて片羽となりたる葉、又裂葉は破れちぎれたる葉をいふので、枯葉は中程より枯れたるもの、切葉は宜き程に葉先を切りたるものであります。

葉組の仕方は第七十八圖の如く、始め用に裂葉を入れて切り葉を用添とし、枯葉を境葉にして巻葉を体受に入れ、それより丸葉を体に入れて半葉を体添とし、

し、止には折葉を遣ふのであります。而して体と受との間に一萼を用ひるので、是れ七葉一花の組方でありませぬ。尤も葉の遣ひ方はこれに定まる譯

第七十八圖



芭蕉

にてもなければ、花もなくして協はぬ事はなく、其時の宜しきに随つて臨機應變たるべしであります。葉數も七枚に限ると云ふにはあらず。茲には七葉の名目を擧げたる迄にて、或は五葉、九葉、十一葉も活け、又は二株三株も入れて、三才の飾石を遣ふもよろしい。但し花は一莖に一花としたもので、それより多く遣ふことは無いのであります。

(二十五) 蘭

蘭は芳香類ひなきものでありますが、元は支那より渡つたもので、當初は花一輪であつたと云ふことであります。其後は變化して花數多く出るやうになり、香も漸やく薄く成つたのであります。葉の出生は一根に三枚又は四枚が普通でありますが、性よき時は五枚七枚も叢生するものであります。

花入方は第七十九圖のごとく、用には皮肉骨共に備はりたる太き性強き葉を用ひ、同じく性強き直なる葉を用添に入れて、之をもつて鳳眼を備へるのであ

ります。鳳眼といふは上に丸味ありて下は直に、丁度半月の形をなすを云ふので、これ

第九十七圖



即ち蘭の本性を顯すのであります。夫より用の葉に重ね格先を向ふに出

して扣の葉を入れ、次に花を入れて体受と体の葉を入れ、次には体添の葉を入れるので、これは体の後の撓まりたる處へ直なる葉を以つて又鳳眼を備へます。其鳳眼の所に花只一輪にして見へ隠れに入れるので、之は最初渡來したる時の

古例を引いて、茲に顯はし愛するのであります。止の葉は三枚にて、性宜き葉を止、添、後止と入れ、鳳眼は無くとも宜いのであります。

蘭も葉五枚に花一本、七枚に二本、九枚に三本と次第に數を増して入れますが、花數多きは却つて雅味少なきものゆゑ、葉の割合より花は少ない方が宜いのであります。尙又花器も土器の類よりは金物の方が移り宜しきものであります。

(二十六) 萬年青

萬年青の出生は陰陽二枚の葉を生じ其中より又二枚組んで出るもので、則ちこの四枚は東西南北を象り其中より又三枚出るので都合七枚、是れ萬年青の一躰であります。故に八枚目の葉の出る頃は、最初に生じたる葉は虫が付くか感は枯れて遂には腐るので、七枚以上一株に組むときは、必ず腐葉を遣ふのであります。

萬年青の葉遣ひには風圍ひ、霜圍ひ、實圍ひ、指葉、土葉などの名稱があります。葉三枚に實を應合つて入れるときは体の葉を霜圍ひと云ひ、用の葉を風圍ひといひ、止の葉を實圍ひと云ふので、五枚組のときは体の添を霜圍ひとし、用の添を風圍ひとし、止の葉は矢張り實圍ひであります。又七枚組のときは出生をうつして、五枚組の中へ二枚指葉を入れるので、九枚を組むときは七枚組の根元に

圖 十 八 第



虫喰葉或は腐れ葉を二枚巻いて實圍ひとするのであります。

第八十圖は大小二株一根の入れ方を示したるもので、之を七五三の組方と唱へるのであります。大株は体用の二才にて始め四枚を組み、その中に長短三枚指葉をするので、小株は三才に組み、二枚指葉をして五枚に組み上げ、大株の横へ合せ入れて花形を作るのであります。實の入れところは大林と小株の間、体用の腹で小株の葉の下であります。則ち實の上にかゝるが故に其葉を霜圍ひと稱するので、然れば体にも用にも、實を覆ふ葉は皆霜圍ひであります。扱その實の前へ幅廣き朽葉を遣ひ、此の左右にも一枚宛つ添へて都合三枚にて根元を巻くので、この三枚は土葉にて實圍ひであります。都べて萬年青を活けるには廣口、馬盃など宜しく、留は砂留とするので、大形の器なれば二株三株も株分に入れて飾り石をつかふもよろしい。

(二十七) 枇杷

枇杷の葉には大小ありて、陰陽と拜み合ふたる形に出生するものであります。されば若し大小なく同じ様に出でたる葉あらば、一葉は虫喰葉にして陰陽を備へるので、陰陽備はつて始めて和合し、活物となるのであります。其花は誠にすはり悪しく、俯向いて天を守らざるものゆゑ、是は鉄にて切り取り、都合の宜きところへ細き竹串にて差して、行義よく葉の中に咲すがよろしい。枇杷の花はもちよくして三日四日程は決して凋むやうの事はありませぬ。尤もこれは自然に背いて拙なき業なりと雖も、法を守る爲めには又能むを得ず、諸人の詠めに協ふを以つて此の術を行ふので、これまた虚實の方便であります。尙一つの秘傳は横一文字と云ひ、体の後ろに大葉を一枚水平に流すので、これは枝振りを見立て足を切るとき注意して此の葉を備へ、爾余の葉をば切り透すのであります。

(二十八) 花梅

花梅と云ふは夏季柚子の花の咲く頃、その花を悉く取り拂ひ、小さき橙子程

の青き柚子を附けて活けることとあります。花体は別に定まつた事もありませぬが、三才共に随分賑やかに葉を茂らせ。其茂りたる中の枝を削つて柚の實を取り付けるのであります。若し客この事を知らず不審して尋ぬるときは、單に花柚を入れしと答ふれば宜しい。

實は前年より圍つて置くので、其圍ひやうは、十月より十一月に至り將に色付かんとする柚子を十個ばかり取つて、其中にて形狀よきものを撰んで三つ四つ除け置き、残りは全部實皮ともに細かに刻んで鹽一升に混ぜ合せ、これを壺に入れて別に除け置きたる實を此のうちに漬け、空気の通らぬやう確と目張りして置くのであります。これを花に入るときは、翌年五六月頃取り出して水に浸け、能く鹽氣を抜いて用ひるがよろしい。されば柚子の香氣は少しも失せず、色も青々として其の匂に生じたるものゝ如く、頗る興味あるものであります。併し只面白きに止まり時候不相應の所作でありますゆゑ、餘り賞賛すべき程のことでもありません。

(二十九) 一輪挿

世に投げ入れといふ事があります。これは枝葉を極く手軽に挿す意味にて云ふ事でありませうけれども、客に對して餘りに倉末なる言葉でありますから、矢張りこれは折入れと唱へる方が宜しからうと思ひます。多く卓下或は茶室や小座敷に用ひること、その時々の一枝を賞翫するものゆゑ、さのみ心を用ひずとも只無雑作に挿したるを宜しとするのであります。

一花一葉を活ける事は昔より有ることではありまするが、態と好んですべきことではありませぬ。元より草木は一花三葉が本体で、葉一枚に花一輪咲くものでもなければ、葉二枚に花一輪も又常道ではありませぬ。故に之を活けるは非常の珍花、或は他より當來のものにて、隨意に得がたくして取りあえず挿す場合は格別、さもなければ見合せにするがよろしいので、畢竟態むを得ざる時の沙汰であります。自ら切るときは別に珍しげもなきに花葉少なきを切るに及

ばす、花葉多きに殊更一枚にして挿すにも至らぬのであります。兎もあれ一花

一葉は好まじき事でありませぬゆゑ、花一輪に葉は二三枚以上遣ふが宜いのであります。



圖一十八第

大鉢一輪挿しの花は五種か七種に過ぎませぬが、何れ三体を備へなければ

ならぬので、牡丹、芍薬、芙蓉などの大輪ものは、花の瓣によつて三才を含ませるのであります。もし花が大き過ぎるか、又は花瓣の都合の悪しきときは、少し瓣をかき取つて姿を調へるので、是等は秘中の秘事として、容易くは師家の教へぬ傳であります。牡丹は葉二枚を用と止につかひ、花をもつて体の格を備へるので、椿もこれと同様であります。或は花を用に備へ、二葉をもつて体、止の格とする事もあります。燕子花は三枚葉を入れるので、長き葉を体とし短かき葉を止に矯め、而して芽吹葉のところへ花を挿すのであります。水仙

は葉二枚か四枚で花首は常よりは短かく組み、燕子花と同じやうに遣ふのであります。其他のものも大抵是等と同じく、一々挙げずとも推して知ることが出来ませう。

〔五〕花道の諸器具

(一) 花器

花器の名目を知る事は花道の第二義でありまして、斯の道を嗜む者は必ずその種別、用捨、取扱ひ方を心得てゐなければなりません。

原因を糺せば花器は、現今も神前佛前へ供へる花瓶を本式としたもので、その變則に出来たるものが則ち薄端であります。それより土器、竹器など各種の形を作り出し、廣口、馬盃或は釣瓶、船、籠など色々雑多の花器が出来たので、多くは東山時代以後の事でありませぬ。

花器を大別すれば銅器と云つて唐銅製のものと、陶器と云つて陶磁器製のものと

のと、竹器と云つて竹製のものや、其他木製、雜製（藤、蔓、貝、瓢）の五つとあります。

今一々其種類を挙げれば數百種もあつて、悉くその名稱を列記する事は出来ませぬが、其中にて重なるものを挙げて見れば、

銅器にては、細口、中口、菱口、經筒、廣口、古銅壺、薄端、角端、鐵鉢、水盤など。

陶器にては、一輪生、寸渡、角口、壺、其他數種。

竹器にては、一重切、二重切、三重切、五重切、船、油差し、香、鏡、筒、守など數十種。

木器にては、水盤、馬盥、舟、釣瓶、洒木の花器種々。雜器にては、籠、瓢、貝。

などで、尙變形特殊のものを數ふれば枚舉に遑なき程であります。

依て花体に眞行草、智仁勇の區別があると同様、花器にも又眞行草の別があ

るので、其製品又は形容に依つて眞の花器、行の花器、草の花器と分つてあります。則ち唐銅にて製らへたるものは眞の花器でありまして、陶磁器にて作つたもの及び漆器の類は行の花器、竹で作つたものや木地や編もの等は草の花器と定つてゐるので、眞の花を活けるには眞の花器、行の花を活けるには行の花器、草の花を活けるには草の花器を用ひるが法であります。又之を形容より云へば、眞の花器は口細くして直なるもの、草の花器は之に反して口の廣きものとか或は口の多く有るものとかで、行の花器は眞と草との中間を取つたものを云ふのであります。

されば同じく銅製の眞の花器にても、其形容に依つて眞行草あり、陶製の行の花器にも又眞行草あり、竹製の草の花器にも眞行草があるので、各々一二の例を挙げて見れば、細口、四角、六角、八角の銅製のものは眞の眞で、薄端、角端などは眞の行、唐船、水盤などは眞の草であります。又陶器の一輪生、寸渡などは行の眞、同じく中口、四方口などは行の行、塗り物の釣瓶などは行の

草で、竹器の寸渡切、尺八切は草の眞、一重切、二重切は草の行、三重切、五重切或は舟、馬盃などは草の草となるのであります。

春の活花に用ひる花器は薄端、寸渡切など、總じて眞の行、行の眞等の花器が宜しく。夏は行の草、草の草などで。秋は眞の草、草の行など。而して冬は草の眞、眞の眞などが最も時候に適當であります。而も時に依り、活くる花との調和をはかり、尙他の裝飾物との配合の如何に依つて、これが取捨撰擇をせねばならぬことは勿論であります。

何れもこれを取扱ふには、丁重にして兪粗のなきやうに注意し、花器の表裏をよく見定めて間違へぬ様にしなければなりません。耳附の花器なれば耳を左右にして正しく置くので、土器の類は薬の流れ工合によつて風流なる所を前とするが宜しい。模様あるものは其繪の勝れたる所を前とするので、竹の寸渡切は外の節の下りたる所を正面と定めるのであります。尤も竹の表は自ら節に勢ひありて肉厚きものでありますゆゑ、よく表裏を見定めるがよろしい。又

四角、六角の花器は角を陽とし平みなる所を陰とするので、上座床に用ゆるときは平に置き、下座床に用ゆるときは角を少し前に振り出して明りへ向けて置くのであります。

尙變形特殊の花器の扱ひ方、花活け方の心得など各々項を追て申述べませう。

(二) 竹花器

竹花器も矢張り東山時代に初めて出来たものであります。而かもその初めは花器とはせず。勝手に置いて切り溜め入れに使用してゐたので、曾て座敷に出して用ひた事はなかつたのであります。既に申しました通り、花を生ると云ふは勝手に於いて生け込み養ひ置く事をいふので、花器には挿入るといふが至當であります。それで二重筒を花器と稱し、その余の筒はすべて花生けと唱へてゐたのであります。始めて之を花器に用ひたのは茶道織部流の祖古田織部正重勝でありまして、それより諸人ともに表道具として使用する様に成つたの

であります。

豊太閤相州小田原に出陣せしとき、千利休が彼の陣所に於いて苟且の作意に竹の筒を切り、其本にて一重切を作り末の方にて寸渡切を作りましたが、此の一重切の筒に龜裂があつたゆゑに之を園城寺と云ひ、寸渡切りは鳩胸と名付けました。蓋し是れは大津三井寺の鐘に裂き有るによつて斯くと銘したので、寸渡切は節の處にて少しゆがんで鳩の胸に似て居たからであります。又此の一重切に獅子口と云ふ銘有る子細は、陣中の徒然を慰めんとて牡丹を添けて献じたに、豊公大いに賞美せられ、切口の礪梅と云ひ殊に牡丹を添けたる事面白しとて、以後此花器を獅子口と號くべしと云はれたるより始まるのであります。尤も牡丹は異名を鐘草又は名取草とも云つて、軍中には相應しき目出度きものなのであります。

借て斯の如く各家の好みに依つて色々の形を作り出し、漸次に多くの種類が出来ましたが、當時各流派によつて多少其寸法に相違があり、或は同じ花器に

して名稱の異なるものや、同名にして形の變つたものなどありますが、その形式は大同小異であります。

竹筒の花器七ツ道具とは獅子口、寸渡切、鯨、手杵、二ツ柱、橋杭、二重切、此の七種を云ふので、これより各々二つ宛つ變化の花器が出来たのであります。則ち獅子口より旅枕、登猿の二種出で、寸渡切より尺八切、一重切、鯨より真鶴、河童、手杵より壽老、天蓋、二ツ柱より雁門、二重橋切、橋杭より丸玉垣、大佛柱、二重切より三重切、五重切と都合二十一種となるので、是を三曲七種と唱へるのであります。此の余の花器も皆是等より又々變化して出来たもので、尙曲尺表裏の規矩をもつて様々に工夫するときは變化の切り方自在であります。

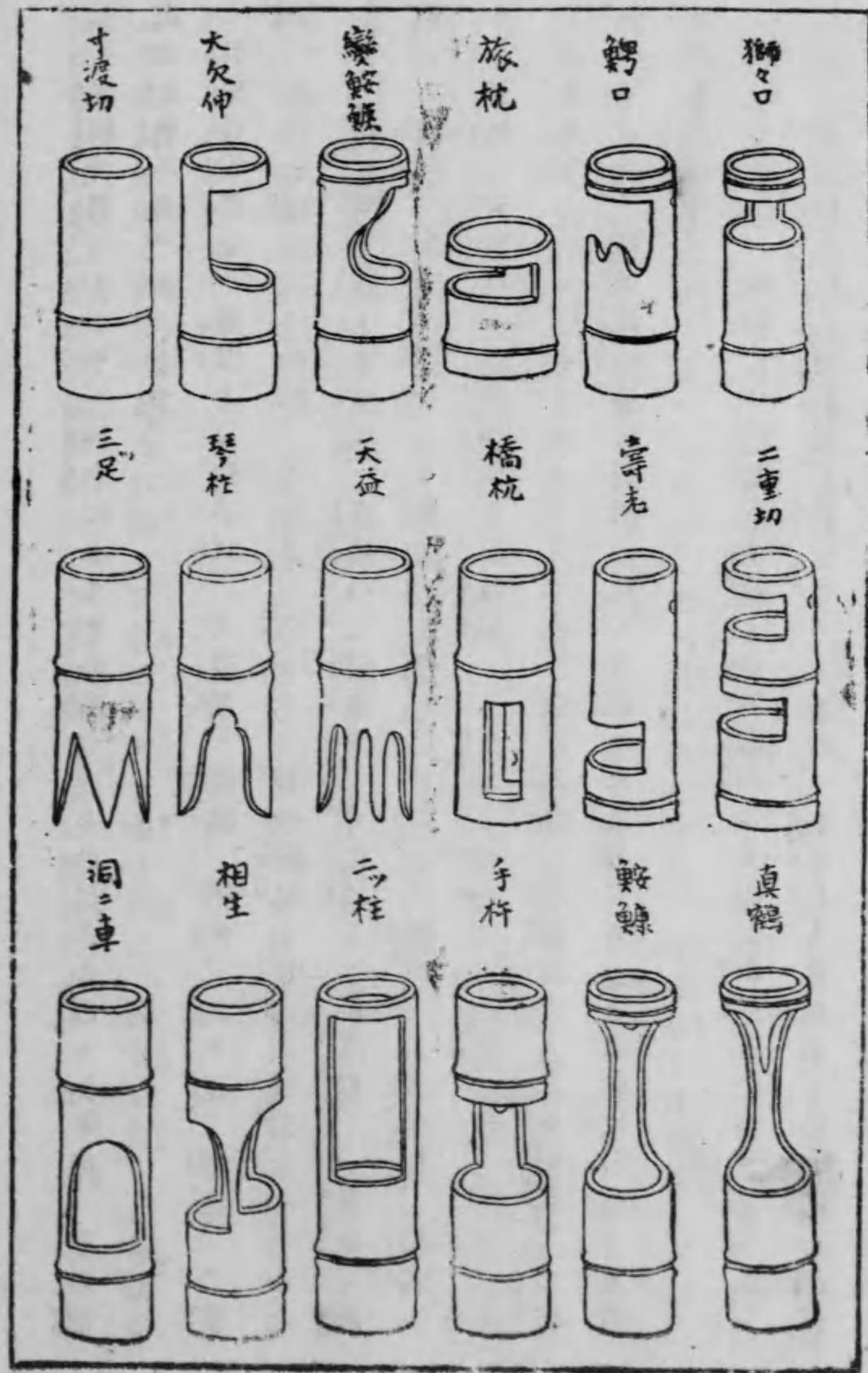
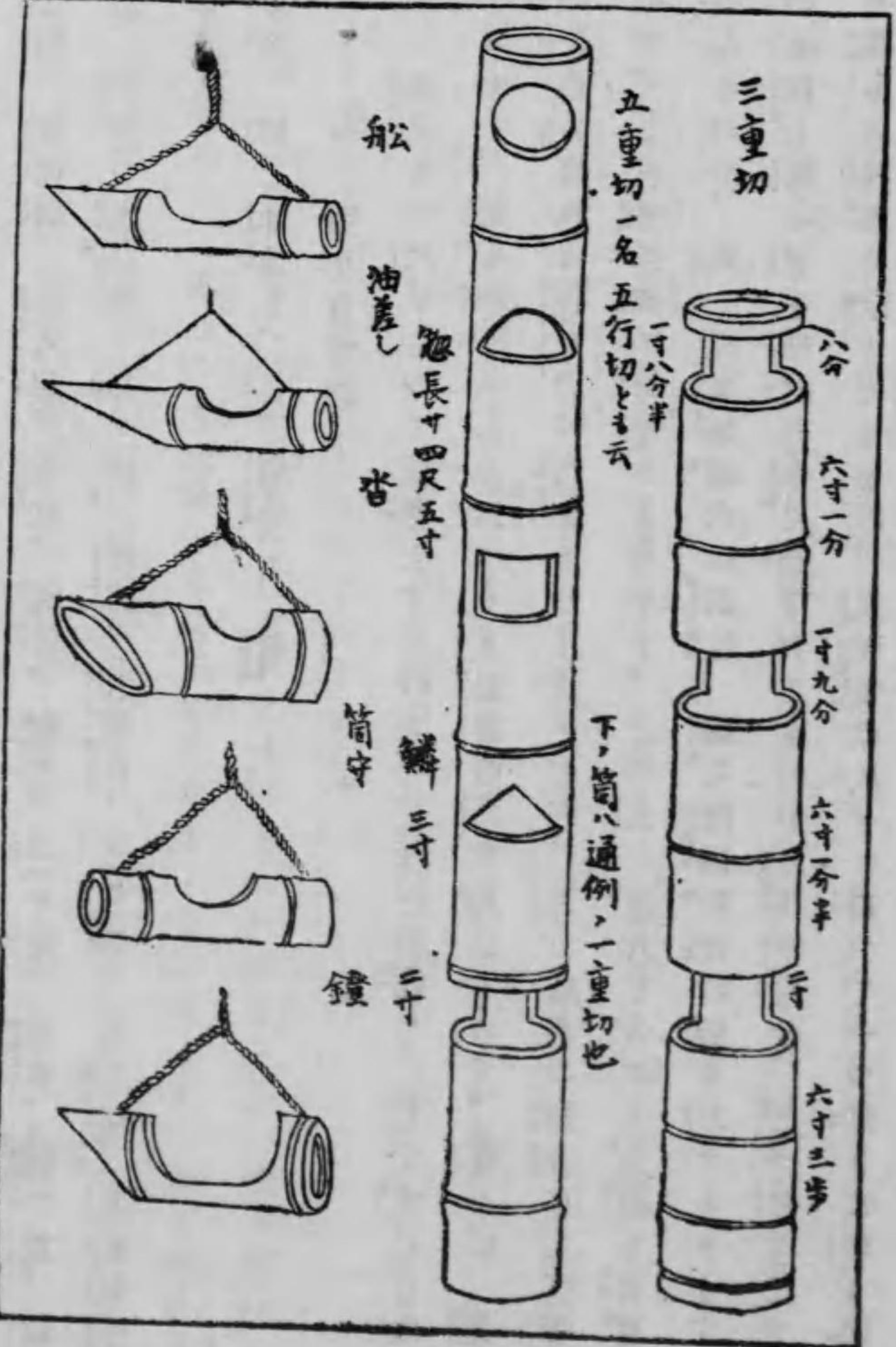
總じて竹筒の花器には置筒と掛筒と掛置兩用のものと釣筒とがありまして、其切り方は殆ど數へ切れない程であります。其中最も普通のもの而已を挙げますれば大略左の通りであります。(第八十二圖及び第八十三圖参照)

「掛筒之部」獅子口、鰐口、旅枕、登猿、二重獅子、三重獅子、變鯨、大欠伸。

回竹花器

二百七十一

圖三十八第



回竹花器 第八十二圖

二百七十

「掛置雨用之部」 鉸、真鶴、壽老、二重切、手杵。

「置筒之部」 寸渡切、尺八切、橋杭、天蓋、琴柱、三ツ足、河童、洞二重、洞

三重、相生、丸玉垣、二ツ柱、雁門、大佛柱、三重切、五重切、其他新形

數多あり。

「釣筒之部」 船、油差し、杵、筒守り、鏡。

一、切り方寸法

竹の筒は其廻りの尺をもつて標準とするので、これを胴返しにして丈けを取るのであります。尤も胴返へしと云つても表裏の尺を用ひるので、譬へば、廻り裏尺一尺の竹なれば表尺の一尺をもつて丈ヶとし、「天一地六」の割合にして節を置くので、これ寸渡切の寸法であります。この天一地六と云ふも矢張り表裏の尺を用ひるので、天一は裏矩地六は表矩、則ち陰陽和合の切り方であります。寸渡切の地即ち節の下を琴柱の形に切りたるものが所謂琴柱で、三ツ足は三ツに割つて各々三角形に削りたるもの、又天蓋は八ッに割つて一つ置きに切り除

きて四本足としたるもの、橋杭は縦凡そ三寸横一寸二三分の長方形の穴を打貫きたるもので、以上はいづれも節を真中にして、天地を振り分けとするのであります。

尺八切りの竹の節は二つか三つを普通とするので、一節切り或は五節のものもあります、初めて利休の切りたるものは節の數九つで、長さは一尺八寸五分あつたと云ふことでもあります。尤も丈けは八九寸より一尺までが適當で、根廻りは七八寸、上の小口より一寸五分下に鐵の鑢を打つて裏にて鐵の足を折り返し、内より漆をもつて塗り止めるのであります。

一重切の筒の寸法は凡そ竹の廻り一尺なれば丈けを一尺四寸とし、切り込みは惣長さの四分の一、或は二寸五分とも又三寸に切るともいひます。切り開き二寸四五分ものを獅子口と云ひ、三寸前後のものを姥口と云ひ、四寸餘になれば鉸と云ふので、是等を總稱して一重切と呼ぶのであります。

二重切は總長さ一尺二寸で、口の切り残しは廻りの三分の一を定法とし、上

の口は二寸、下の口は一寸八分、切り底の節は下より九分上に有るものと心得てよろしい。又洞二重といふは、上は寸渡切りのごとくに切り離し、下の口は洞穴の如く、高さは三寸五分に竹の廻り三分の一を切り取るので、筒の總長は一尺四寸五分であります。此外二重切には或は天地、槽二重などの切り方があります、管々しければ省きます。

三重切にも洞三重や槽三重など種々ありますが、普通三重切と稱するものは總長さ二尺五寸で、上の節の所を八分置いて一寸八分の口を切り、節を中にして六寸一分下つて又一寸九分の口を切る。次に又同じく六寸一分下つて二寸の口を切り、夫より下を六寸三分に切るのであります。節は五節七節何れとも定まりませぬが、必らず半の數にせねばなりません。一重切を真とすれば二重切は行、三重切は草で、則ちこれを竹筒の三体とも唱へるのであります。五重切は惣長さが四尺五寸で、上の小口より八分下つて縦二寸横三寸の丸穴を切り、其次の節間に高さ二寸の半月形を切り、次には縦二寸横三寸の角穴、

夫より次は三寸の三角形とし、一番下の口は常の一重切の法をもつて二寸に切るのであります。これは地、火、水、風、空を象り、一名を五行切とも唱へるので、或は惣長さを三尺とし、上三重の法をもつて三重切とすることもあります。右は何れも一尺廻りの竹より尺二寸迄の寸法にて、尺三寸より五寸迄は二歩宛つ増し、尺五寸より八寸迄は又三步増しとするので、其竹の恰好、節の模様によりては幾分の増減をせねばなりません。(船其他釣筒の寸法は後に詳しく述べます。)

二、取扱ひ方

竹筒の花器は四季共に用ひますけれども、大体春季のものであります。花を活けんとするときは、先づ始めに能く水に浸し、充分水氣を含ませて後拭き清めて用ひるがよろしい。乾きたる儘の筒に花配をすれば、よくはせることが有るからであります。それより竹花器の表裏は前にも述べました通り、節の下りたるところを正面とするので、節の真直なるものは格好よく風流なる所を前

とするがよろしい。

三ツ足の筒は一本の足を前にして据へるので、これには三ツ足の花臺を忌みて用ひませぬ。若し是非なく之を用ひる時は、花臺の足を反對に二本前にむけて据え、花もくひ違ひに葉を組み合せて挿すのであります。天蓋は前に二足並べて据えるので、橋杭、琴柱などは其切口を前に出し、穴を見通す様に置くのであります。

一重切は上部の輪を月に譬へ、口を日に象り、掛穴を星に擬らへてこれを獅子口の三つ秘事となし、常に利休の愛用したるものであります。又一説には一重切の上の輪は、もと香爐を置く爲めの場所にて、花をもつて見切るを嫌ふと云ひますが、何は然れこれには限らず、花器を見切る事は勿論宜しくありません。

二重切に花を活けるには上の一重の花を肝要として充分に活け、下の口には何にても只手軽に應合ふ位に入れるがよろしい。陽の床なれば上の花を客位に

陰の床にては主位に活けるので、勿論上の花が客位なれば下の花は主位に、又上が主位なれば下は客位に入れなければなりません。此の二重切も又利休が始めて作つたるもので、彼の再来形などいふものは、或る時宗旦が、二重切を弟子に譲り與へたる所、弟子が過つて上の輪を缺いたるゆゑ、其の欠け残りの分を切り捨て、これを宗旦が再来形と名付けたので、一名輪無し再来形とも云ひます。此の輪なしの二重切へ花を活けるときは、上には花を挿れず、水許り入れて置く事は、客を花に見る心とも云ひ、又客に花を入れさす爲とも云ひまして、四季ともに上の口には水を張り、下ばかりに花を入れるのであります。尤も花を挿けられぬといふ譯もありませぬゆゑ、時宜に隨ふが宜しい。

檜三重なども時に依つて上の一重を開けて置くことがあります。矢張り水は一杯に張つて置くので、花は二重切の挿方同様にすればよろしい。

五重切の筒は多く青竹の當座切りでありまして、小座敷には向きませぬ。是れは廣間書院飾りで、多數の客を招待する時などに用ひてよろしい。尤も丈高

き花器ゆる床の壁に立て添へて止めるので、下には片木か常の薄板を敷くのであります。往昔小堀遠江守政一は、伏見の或る大寺にて庭前の大竹を切らせ、即座に花器を作つて、折節春の事とて数々の花の有るに任せて、木と云はず草と云はず取り雑せて活けられました。又これに倣つて京の茶人某が、秋の草花ばかりを活けて御目に掛けたる處、この中に一色は花の咲かぬ木の有るべき事ぞと云はれしとか。これに依つて今もなほ五重切の下の筒には、必ず松を活けるを慣はしとするといふ事であります。

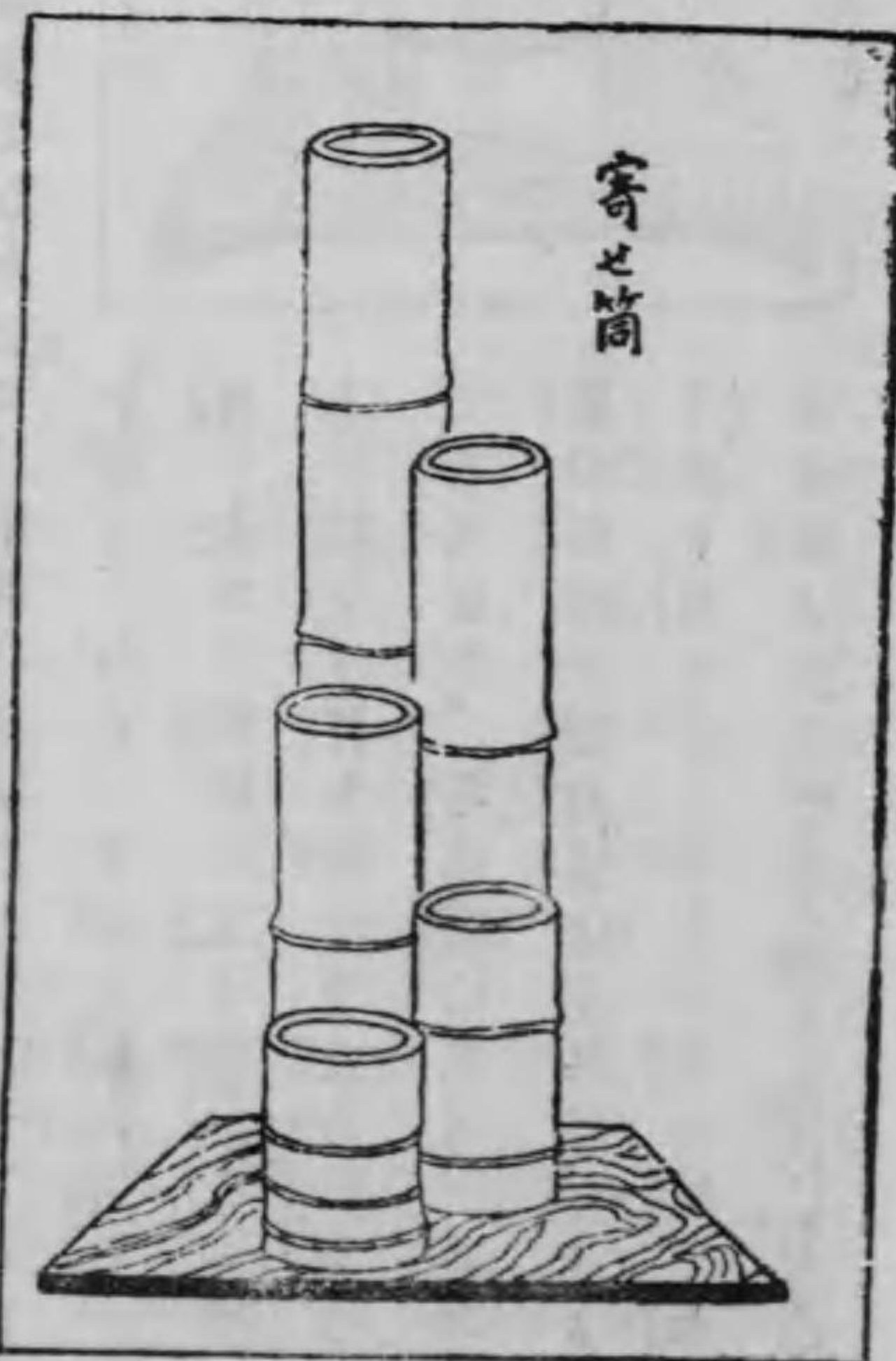
三、筒と花

寄せ筒と云ふは第八十四圖のごとく、三瓶五瓶或は七瓶九瓶も筒を寄せて花を活けるので、其本を紐又は繩にて括るもよろしい。花形は別に定まりもなければ堅鱗横鱗取り雜へて各筒に花を入れ、是等を一体として又花形を作るのであります。花入方は常の花器と更りはなけれども花器摺、色見切を堅く禁じ、花にて水際を覆さぬやう、一瓶の花の高さは上なる筒の切口迄とし、それより

上に上らぬやう、花と花の障らぬやうに氣を注げねばなりません。

延附はのべつけと讀み或は又柱隠しとも號けるので、七重又は九重に切りたる筒の事でありませぬ。是れは炎暑の時節など、天井の縁より地敷まで床の内一杯に立てたるもので、七重切なれば花は五箇所、九重切なれば花七箇所に活けて、後の二箇所は開けて置くのであります。昔し黒谷の本堂に於いて、専好の好みにて、内陣の兩柱に一對この筒をかけ、十夜の法事に南天燭を種々に活けたさうであります。然るに早くもこれを寫して本能寺の御影講に此の趣向を用ひ、造花の糸櫻を挿して、此の方が前なり黒谷は後なり

圖四十八第



りと、相争ふたる事がありました。立本寺には往昔より、箔付なる兩柱の掛筒ありて、年毎に藤の造花を挿す事となれるを、専好もそれに依つて思ひついた事であると云ふこととあります。

車僧と名付くる筒は、謠に、

浮世をば何とか巡ぐる車僧、また輪の内に有りところを見れ。

云々と。此の歌に因んで切れる筒であります。第八十五圖のごとく上下に節

圖五十八第



を置き、口は一重切と同じ所に、竹の太さと同様に丸く明けるので、上の節をも打ち抜かず止めをくのであります。花は何にても、其の窓の内に一輪行儀よく活け、夫より枝を外へ差し出して又一輪と苔みを遣ふので、「まだ輪の内に有り」

との心であります。故に一輪は必ず輪の中に置き、應合ひをつくる時は筒の中に入れるものであります。

子持筒は二つの寄せ筒の事で、根付きの大小の竹を長短に切て、根がら

みに並べて置くのであります。これは織

田有樂齋より始まりたることで、花は二

重切同様に心得へて挿せばよろしい。

律管は第八十六圖のごときものにて、

樂器の調子を合せる笛より思ひ付いて、

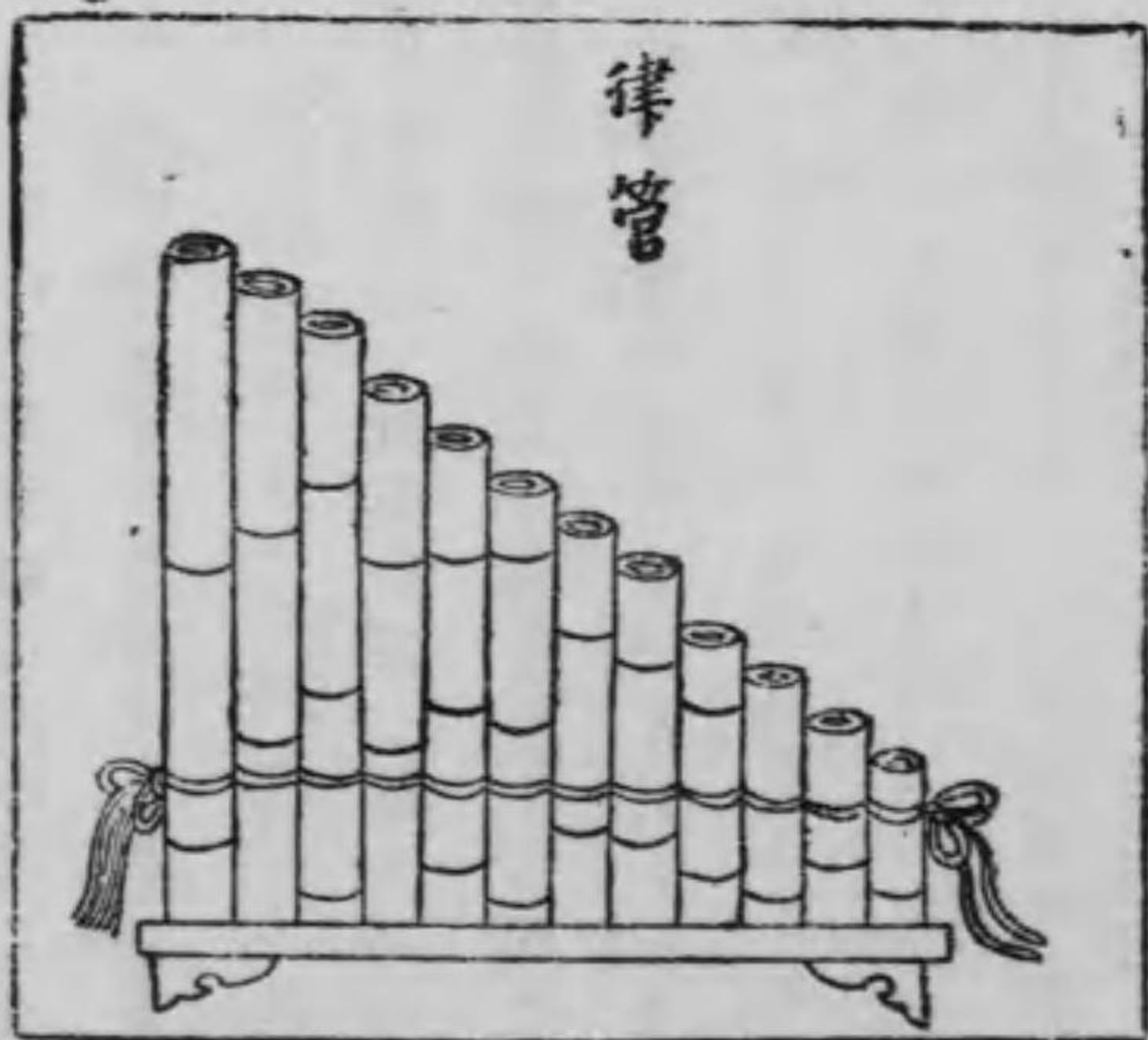
官家の御物數寄に作られたるものであり

ます。普通横に遣ふのであります。或は

豎に用ひる事もあり、豎に置く時は管の

高き方を向ふになし、前下りにして置くのであります。併し此品は切溜入れと同

圖六十八第



様にて、座敷の挿花に用ひるものではありませぬ。されど又獨樂に種々の花を取り入れ、露深く打ちたるは如何にも涼しく、暑中縁側などに飾るに格好のものであります。

客筒 ①と云ふは往昔遠州侯が、暑氣の節、客を招待して酒宴の催しありたる時、二重切の下口へ肴を詰め、上には花を活けて出されたるよりいふので、床にはをかす、勝手道具とするのであります。挿方は常のごとく花も何と定まりたる事はありませぬ。

(三) 船

船の花器は東山將軍足利義政、且つて江州琵琶湖に周遊せしとき、子供等が渚に舟をもて遊んでをりましたが、その舟の中に、幼き兒が砂を盛つて花を立て、神佛を祭る真似事をしてゐたるを見て不圖思ひ付き、小さき舟を作らせて花を活けたるが始めであります。それより茶道の宗匠松雪齋相阿彌等に仰せて、

舟の花挿方など定めさせられたので、次第に多くの種類も出来、廣く世に用ひられる様に成つたのであります。

船の尖端は是れを船先と云ひ後への方を船といふので、その中央を胴と唱へるのであります。銅製の船、或は籠、朽木の船などは船先、船を切明と分ちがたきものがあります。左様のときは釣手によつて判別するので、一筋の方を船先とし、二筋ある方を船と心得ればよろしい。釣手は鎖又は紐を用ひ、長さは双方とも船の長さ一杯にして繋ぎ、それより又一筋よき程の長さに附けるので之をたすけと云ひます。釣手の附きたるものは勿論釣船と定まつて居ります。又これを釣手の附きたるまゝ置船に遣ふこともあります。尤も假りに用ふるまでにて、定法の置船は其の切り方も別であります。

釣船は陽にて置船は陰であります。元船は床に釣つて用ゆるを常例としたもので、置船は本意にないことでもあります。何時の頃よりか始まりて當世専ら釣置兩様に用ひます。

以下船の種類より始めて其取り扱ひ方、花の挿方など漸次に申述べませう。

一、種類

「龍頭船」は第八十七圖のごとく、船首即ち船先に龍頭の形にしたる彫物をつけ、舷にも龍の尾をつけたるものであります。

第七十八圖



「鷓首船」も又第八十八圖のごとく、船先に鷓といふ水鳥を刻みてつけたるものであります。

龍頭鷓首の船と云ふは、古しへ天子の御遊に用ひられたる御座船でありまして、二隻一對、龍は能く水を涉りて溺れず、鷓は能く飛んで風浪に堪へるといふ所より、是を以つて水中の魔を恐れしめ、浪に溺れざる

意にて作られたる船で、これを象り小形に製しらへ、花器として用ひたのであります。

「龍船」は地紋に龍の彫物したる船であります。

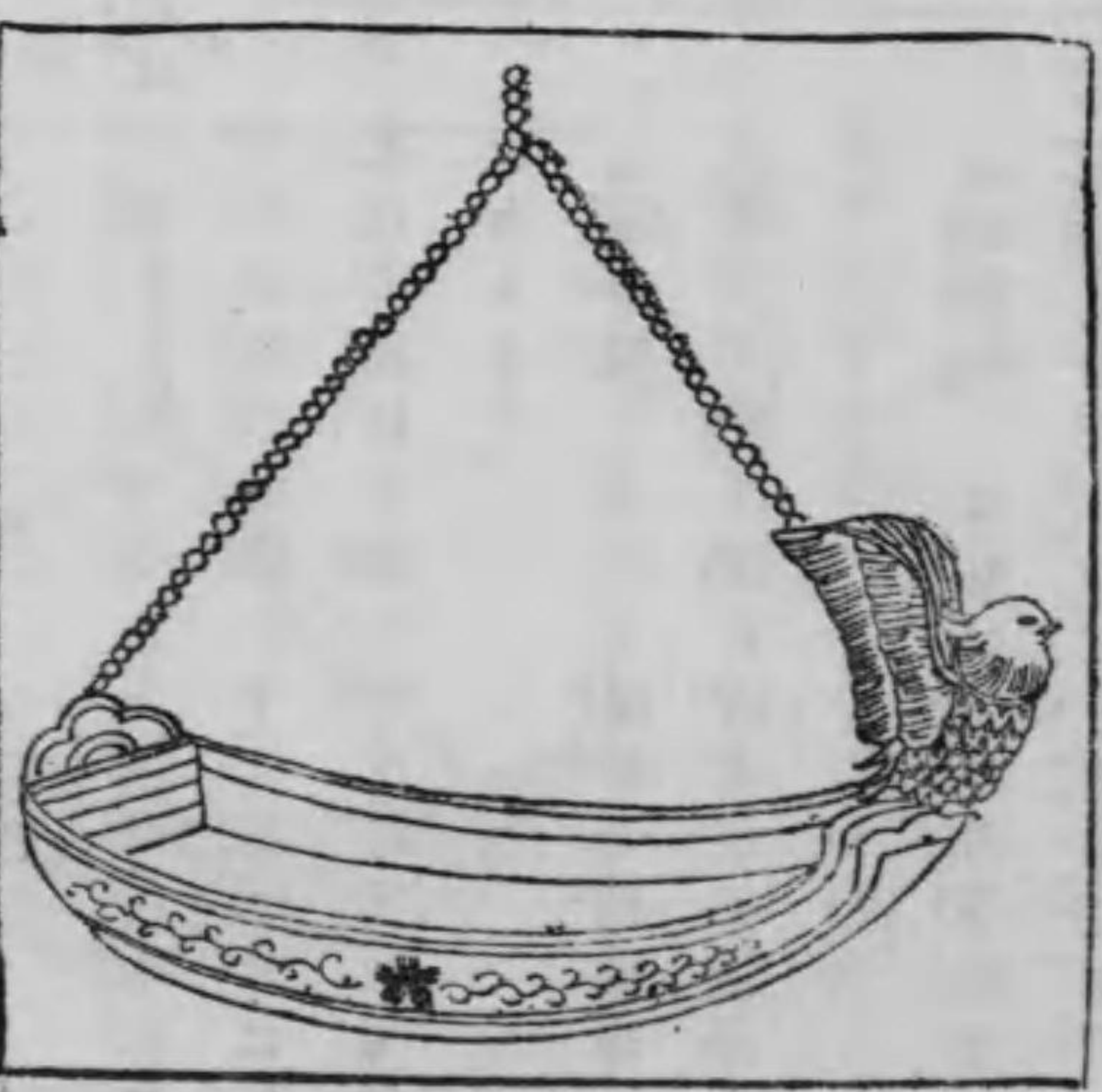
「唐鳥船」は地紋に唐鳥の亂れ模様を彫りたるものであります。

右の四種は御遊の船と唱へ、龍鳥の模様を隠さぬやう。花は小形にして幽かに麗しく活けねばならぬと云ひます。

「海士小船」は魚貝船とも云ひ、漁りする舟であります。

「藻荇船」これには海士小船と共に、草物に限り活けるのであります。

第八十八圖



「高濤船」は地に波濤の模様があります。これは花にて少し模様を隠して活けるがよろしい。殊に風雨の日には多く隠すやうにするので、尤とも入船泊船に限る事でもあります。

「雲船」これも雲形の模様があります。或は桂船とも銀河船とも云ひ、晴天の日には紋形を隠さず、曇天には挿花にて模様を隠すやうに入れるのであります。

「蓮華船」これも蓮華の模様があります。故に蓮を活けるを忌みま

す。「唐草船」は地が唐草の模様で、蔓物を活けることを嫌みます。以上十種はいづれも唐銅製で、

圖九十八第



東山將軍足利義政愛用のものであります。

「琴船」(第八十九圖)は琴を裏返して釣手を附けたる形であります。

「橋船」(第九十圖)橋は北越地方にて、冬季積雪の上を行くに用ゆる所の一種の乗物であります。それを形どつて作りたるもので、長さ

圖十九第



四尺六寸巾一尺三寸の板をそらせ、中に一尺二三寸の枠を作り末は白く本を淺黄に染めたる引

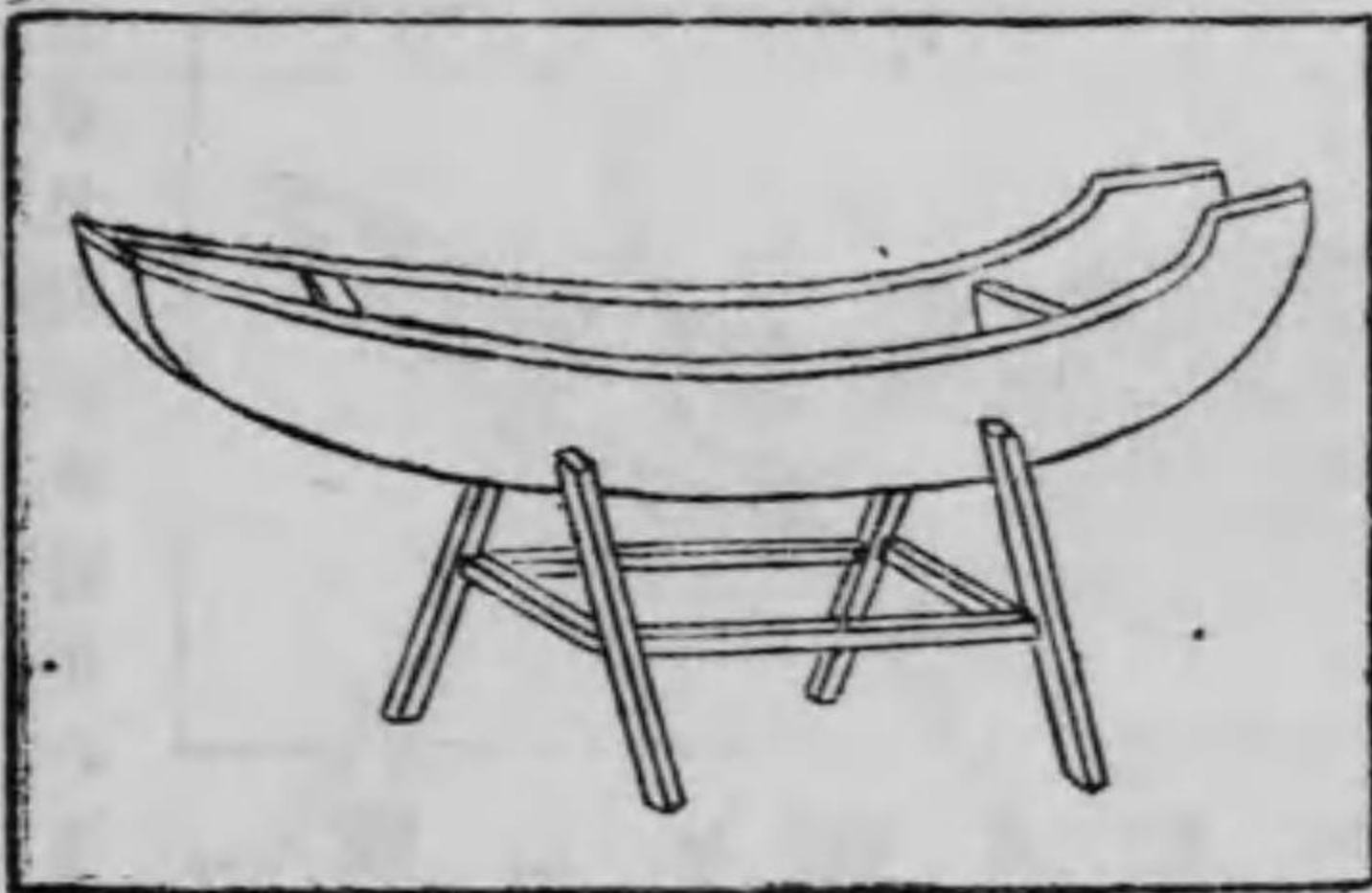
圖一十九第



緒を付けるのであります。尤も引緒は圖のごとく板の上に載せ置くので、釣るものではありませぬ。花は梓の中に籠を入れて活けるのであります。

「籃船」(第九十一圖) 舟の形にしたる編籠で、陶器の花器を入れて花を挿すのであります。

圖二十九第



「置船」(第九十二圖) は杉板をもつて作ります。長さは二尺六寸横六寸五分、臺は木の梓にて高さ一尺二寸の四ツ足であります。

「玉船」(第九十三圖) 是れは金屬製の極く小形の船で、船先に寶玉を付けたる故に斯く名付けるのであ

圖三十九第



ります。

「沓船」(油差し)「燈」(竹花器の章に圖を出す) 是等は何れも竹を切りて其形としたるもので、床に釣る事を遠慮しなければなりません。則ち床は二疊臺の形、上段の間に象るものゆる沓等の形のもの置き。これを臺目にかけて用ひるのであります。すべて舟に準じて扱へば宜しいけれども、

圖四十九第



出舟入舟の差別はなく、又櫓花を下すなど、云ふこともありません。

「唐船」(第九十四圖) は唐時代の船に擬したるもので、塗器・銅器など種々あります。

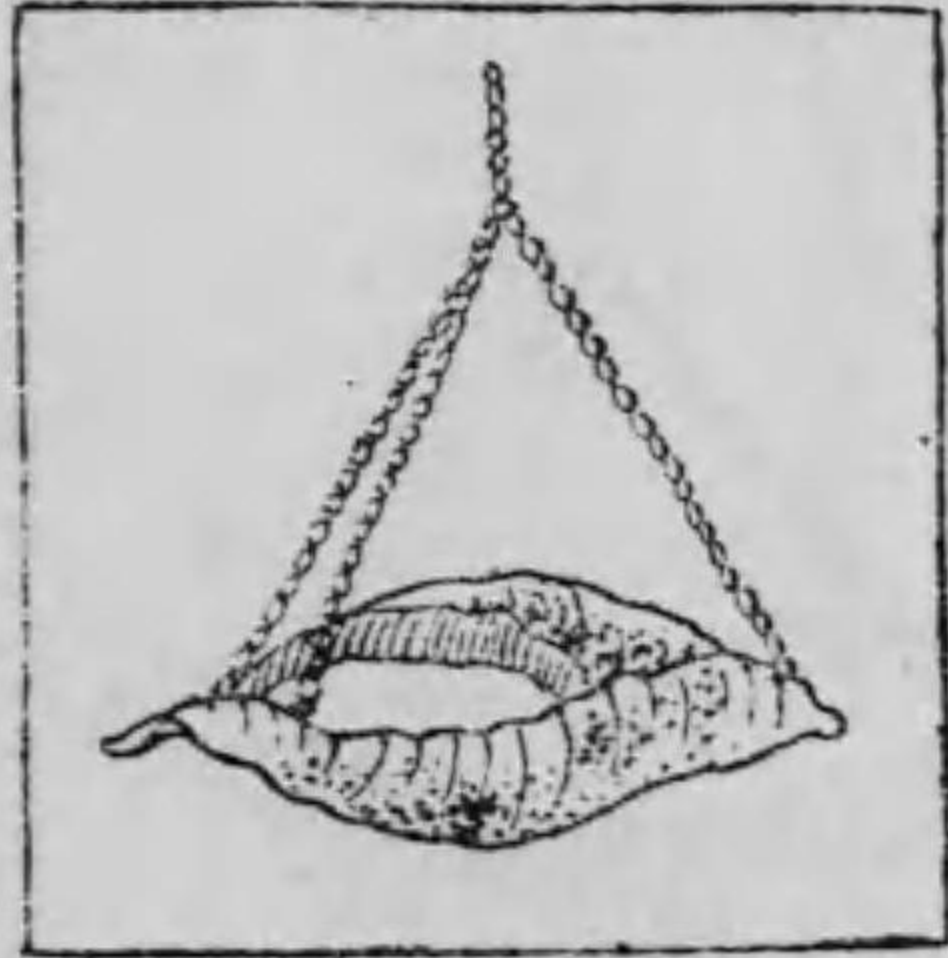
「瓢船」(第九十五圖) は

圖五十九第



瓢を横にして口を開けたるもので、元蔓物ゆゑに垂れものを活けてはなりません。

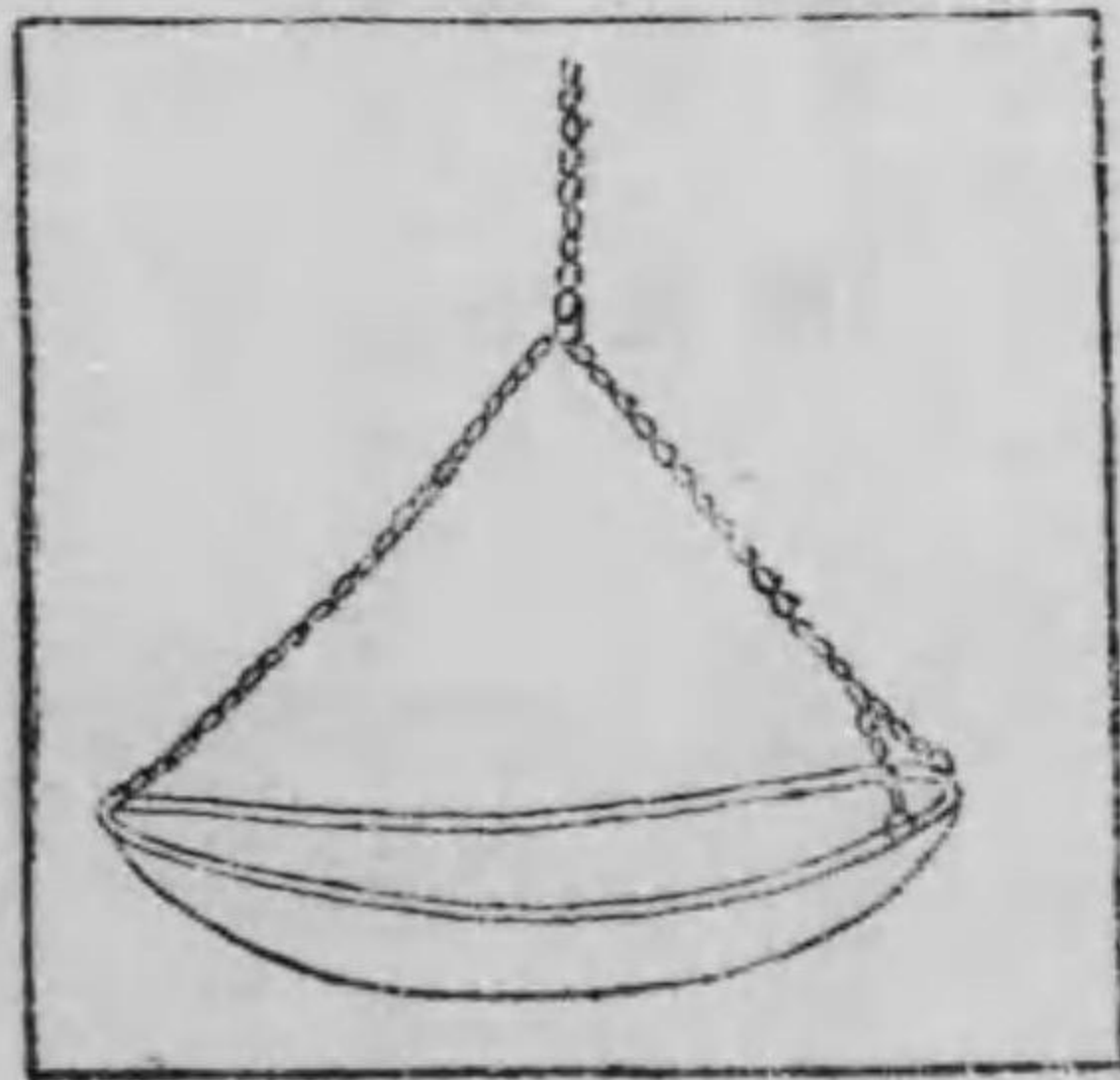
圖六十九第



「貝船」(第九十六圖)は多く寶螺貝晒れ貝などであります。

「朽木船」は面白格好の朽木に穴

圖七十九第



を彫つて、常の船の如く釣手をつけてたるものであります。

「陶器船」(第九十七圖)には種々焼方の異なるものや、又は竹筒、籠などに掘したるものが澤山にあります。

「竹船」の事は次に記述致します。

二、竹船寸法

船の花器も矢張り始めは金屬製のもの許りなりしを、後に至つて竹をもつて作り出したので、船の花器も前述のごとく多くありますけれども、現今一般に多く用ひられるものは竹の船であります。

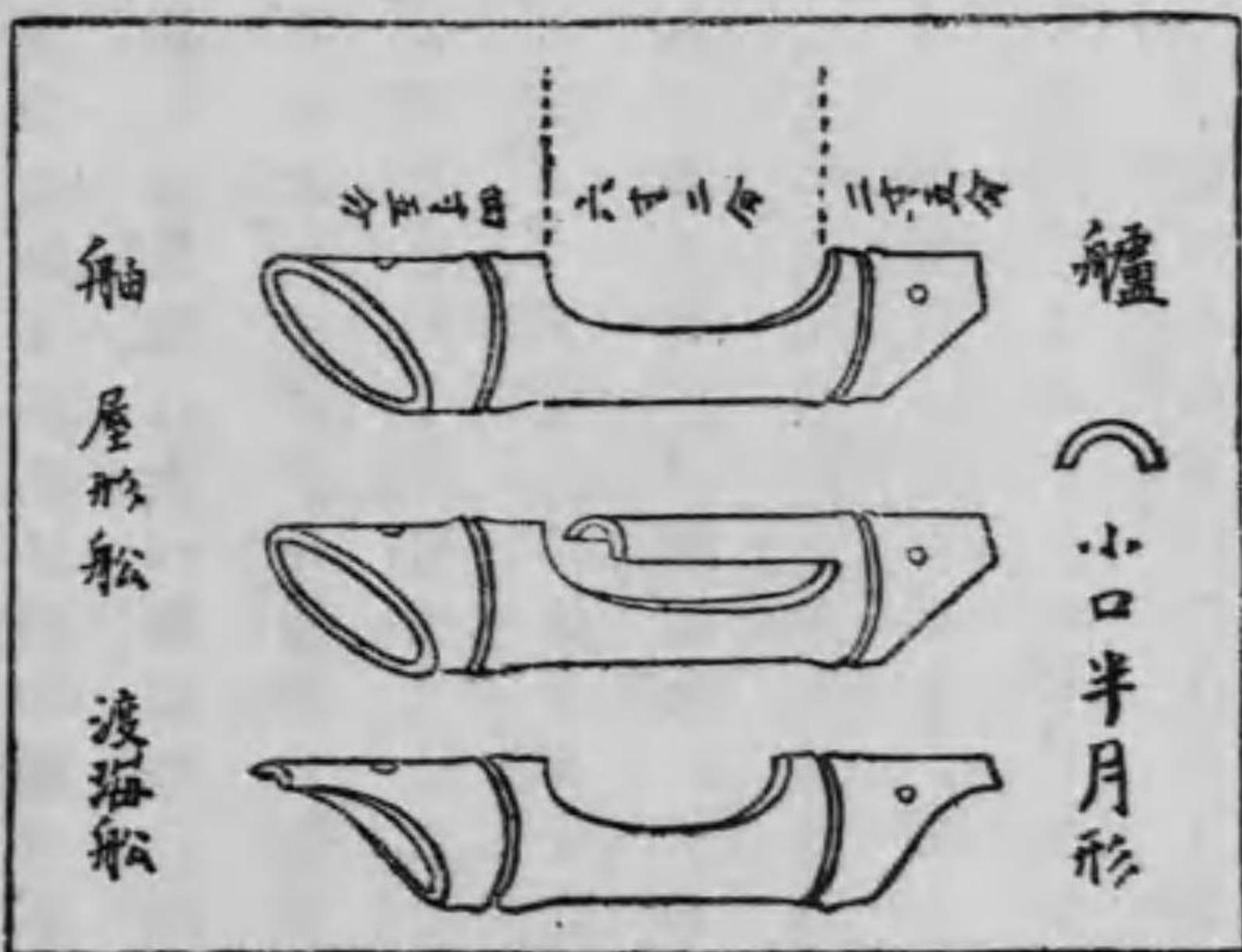
竹船にも又第九十八圖の如く屋形船、渡海船など形の更つたものがあります。その大小寸法は各流皆一様ではありませぬ。一説には、一間床には一尺以上長き程宜しく、大目床には八寸以上、此の積りを以つて二間床三間床等その分量に准ふ。又或候の釣り舟は七寶にて飾り、長さ三尺巾真中にて六寸、常に二間床に掛られしが更に大きからずして見事なりしと。時に依りて大輪の花、牡丹、紫陽花などを入れることもあれば、又柳、藤など枝垂たる花には、船小さくては危ふしとあります。成る程床の大小に依りて寸法を加減することも適當なる方法ではあります。さりとて太き竹にて短かく切り細き竹をも長く切るときは誠に不格好になります。故、一概に床に應じて寸尺を定める譯にはゆきませぬ。そのみならず何時にても細大意の如き竹を得ることも出来ねば、又

床に積量して僅かに大きければ或は少さければとて、之を用ひられぬといふも

不都合であります。さればこれも普通竹花器の割り方同様竹の廻りを標準とし、その太さに應じて長さを量るが最上の方策で、然れば何れの竹を用ゆるも長短に逼せずして格好よく、自然床にもよく調和するのであります。

通例竹舟の切り方は廻り九寸の竹を以つて定規とし、それより太ければ長くし、細ければ短かく切るので、船先は四寸五分、穴の長さは六寸二分にて穴の

圖八十九第



幅は三寸、即ち竹の廻りの三分の一切り込むのであります。いづれ竹の大小に應じ此の比例をもつて切るときは、寸尺は異れども形は變らず、至極格好よき

寸法であります。尤も船先は下に向けて斜に切り、艦も同じ斜に切つて小口を半月の形に残すのであります。圖中○印の處へ、船先に一個艦に二個銀をちて鎖を付けるので、釣手付け方は前に述べたる如くであります。

三、松の扱ひ方

すべて船の花器は草に屬し、夏向のものでありますゆゑ五月頃より十月迄とし、其余は之を用ひませぬ。

船の釣り處は、元は床の真中に釣つたものであります。それでは掛物などに差し支へるので、轉じて落し掛けに釣り出したのであります。床の長さの三ツ割一ツ分の真中、向ふと前の真中に床柱の方へ寄せて釣るので、高さは床より三尺下りて座し、目通りを据え所と見定めて、船先を明り口の方に向けてあります。船の中に下司板があれば、此の板より上に水の乗ることを禁じます。凡そ舟は其中に水の入ることを嫌ふが故に、中なる水の見えぬ程に、高く釣るを慣ひとするので、置船とても成るべく高き臺に載せて置くがよろしく、

すべて水は時候に關せず七八分目に止めて置くのであります。

釣り手の附きたる船を置船に用ゆるときは、鎖の除けやうにいろく、の説がありまして、手前より見へぬ様に向ふへ除けて置くとも云ひ、或は船の底に敷き、動かぬ様に止めに遣ふとも、又泊り舟には舳先の方へ流して置くとも云ひますが、畢竟これは船を釣るまでのものでありますゆゑ、何うなりとも隨意にすれば宜しい。但し紐が鎖なれば兎もあれ、藤蔓の釣手あるものは置船に用ひることはならぬのであります。

船に花を入れるときは先づ釣手の鎖を試して見るがよろしい。船の鎖を舳先迄當てゝ見て、もし短かければ活けたる花にて釣手を見切りても構ひませぬが、釣手が定法であれば決して見切ることはなりません。併し乍ら花の都合、花形の如何によりては夫と許りも云へませぬので、釣手を四分六分に別けて、上四分は絶對に見切るを嫌ひますが、下六分は子細ありませぬ。或は又、船は則ち水上に浮む体にして釣手は陰なれば、自然釣手の向ふへ枝葉が伸びて、釣手に

て花を見切るは悪しけれど、花を以つて釣手を見切るは差支へないとも云ひます。何れ見切りぬに勝つた事はないので、所詮一箇處は見切りても二箇處以上見切る事は遠慮せねばなりません。

總じて釣船には花を稍々小メにして行草の体に入れるがよろしく、置船は花を高く眞行の体に活けたるがよろしい。屋形船は至つて花の入れ悪きものであります。向水草類は置船には入れませんが釣船に活けるべきものではありませぬ。船の花には帆花、船花といふ事があります。帆花は立鱗、船花は横鱗で、又別に横鱗を入れず流しの枝をもつて船花とすることもあります。花は中央より少し船の方へ寄せて活けるので、帆花は帆、船花は櫓の象ちであります。櫓は細長きものなれば其心して、船花の枝の下側に小枝あれば切り去るがよろしく、帆花との間は餘り多く透かぬ様に活けるがよいのであります。或は又帆花、船花を入れず、横鱗のみ閑栖に入れる事もあります。是は櫓を上げた形な

ので、尙舟三段又は三体の法、七種の挿方など、次に詳しく申し述べます。

四、船三体

船を取扱ふには出船、入船、泊り船と法を定めて、これを三体或は三段と稱するのであります。この三体に就いては諸流其説區々でありまして、船の釣り處によつて定めるもあれば、又舳先の向け方によつて名目を分つもあり。即ち舳先を座敷の上座、明り口の方へ向けたるを出船とし、末座の方、勝手へ向けたるを入船とし、眞横に落し掛に並べたるを泊り船とすると云ひます。或は又船に方位を象りて、舳先は浮みて動く故に陽にとりて南とし、艦は沈みて動かざる故に陰にとりて北とし、舳先を手前に艦を向ふに廻して見るときは、右を東とし左を西とするので、東は日の出る方、西は日の入る方の縁りに依りて、東を前にして釣るときは出船とし、西を前として釣るときは入船とすると云ひます。一説には出船は早朝より晝後まで、入船は晝より暮時までに、泊り船は必ず夜活けるものとも云ひますが、挿花には表裏あれば時刻に應じて釣り

更へる事もならず、強ち時刻を一途に論ずる事は出来ませぬ。いづれ各々一理ある説ではありますが、朝夕に出船、入船の差別は有るまじき事で、花は上座則ち明りの方へ向けて直すが通法でありますゆゑ、舳先を明りの方へ向け客に對する様に釣らねばなりません。舟の舳先は表則ち陽にて、艦は裏にて則ち陰を客に見せる事は作法なれば、舳先を勝手の方へ向けて釣る事は宜しくありませぬ。されば出船入船は陰陽の差別によりて定めるので、陽の床、上座床にては出船とし、陰の床、下座床にては入船とするのであります。もし又上座床にて入舟に入れ、下座床にて出舟に入れんとするときは、臺目に下げて舳先を勝手の方へ向けて釣るので、何時にても舳先が見る人の右にあれば出舟、左にあれば入舟と心得ればよろしい。

出船は第九十九圖のごとく上座床の床柱の方へ寄せて釣り、花は舟の中央より少し艦の方に入れるので、帆花は客位艦花は主位であります。これは順風に帆を上げて行く象ちなれば、帆花を高く勢よき花を入れるがよろしい。艦花は

舟の際にて横櫓の格をさだめ、それより下にさがりたる枝は手弱く入れるので
舟底より下は水中なれば水に流るゝ形すな
はち自然であります。是れは旅行の饒別に
用ひてよろしい。

入船は下座床にて第百圖のごとく、帆花
は主位にて艫花は客位であります。これは
夕陽を浴びて港に歸るので、帆花は稍低く
なよやかに入れるがよろしい。壻取り嫁取
り其外萬づの祝ひ事に相應しきものであり
ます。

泊り船は上座床にても下座床にても違ふ
ので、これには沖の泊り船と港の泊り船の二体
ありまして、又掛り船とも云ひます。これには帆花

圖九十九第



出帆なりがたき故に碇泊したる体で、又掛り船とも云ひます。これには帆花

圖百第



活けるので、艫を陸につけて歩みの板を渡したる形象なれば、中には多くの荷
を積みたる氣色にもてなすがよろしい。又艫先へ花を入れる時は留船とて、川

口等流る、舟を留る意にて船先へ櫂先を出すのであります。最も花は閑静なるがよろしく、此花は船底より下にさがれば逆艦となつて船に忌む事なれば、よく注意をせねばなりません。

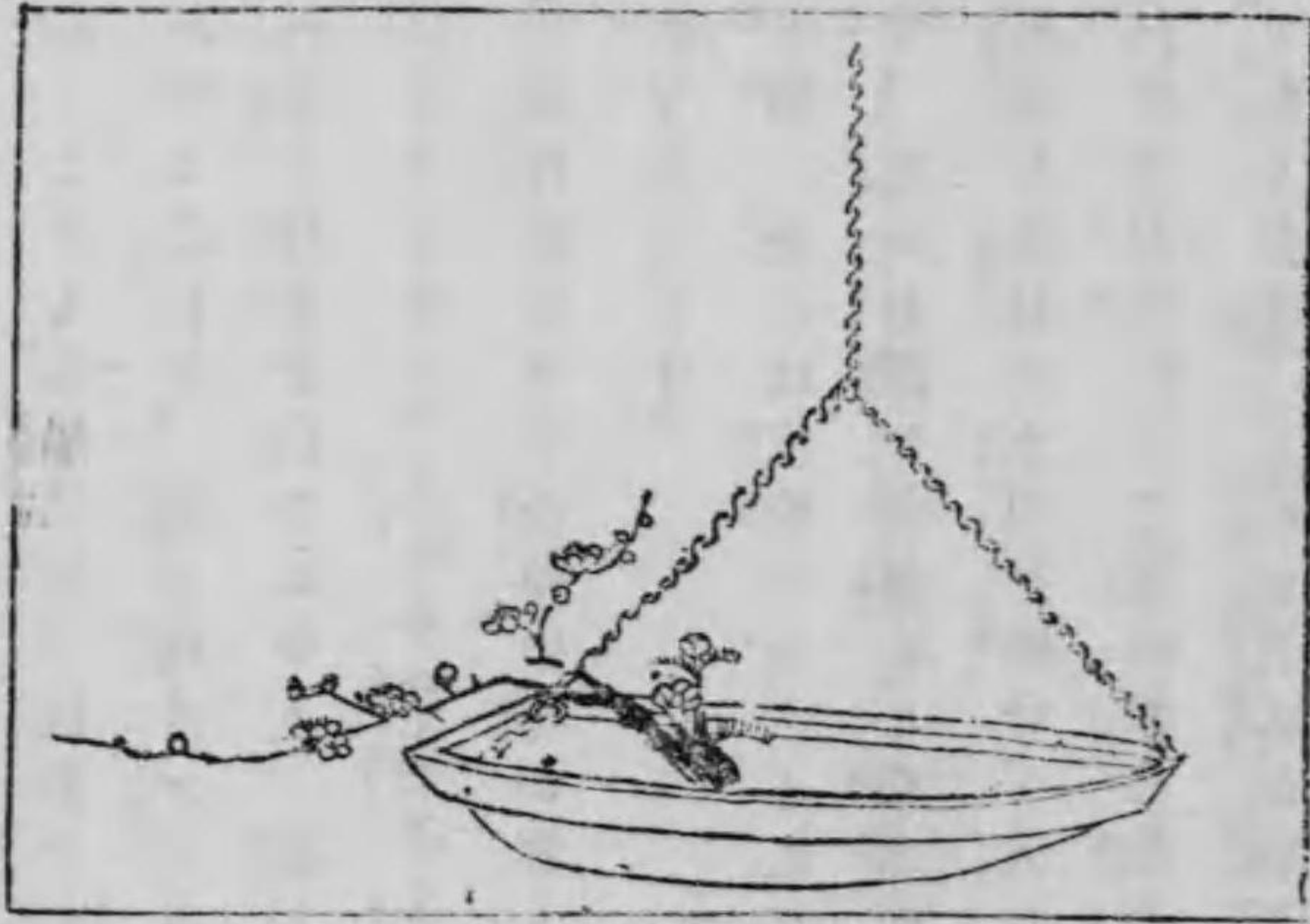
圖 一 百 第



五、七種の松

沖の船 是れは沖を往來する船の入れ方でありませす。床縁より指尺にて七ツ半か八ツ目の處に出船に釣つて帆花艦花を入れるので、花は高く花葉共に多く挿してその数が分明ならざる様、すべて遠景なれば幽かに静かなる姿に活けるのであります。

圖 二 百 第



落の船 是れは落を往來の船であります。位置は床縁より四ツ半か五ツ目に

低く釣るので、入船がよろしい。これは沖の船とは反對にて極く近景なれば、帆花艦花ともに其枝葉の明らかに見へるやう、稍低くして而かも賑やかに、兎角貨物を満載したる心持にて花を入れるので、行草の花体であります。

の心であります。畢意眼前を走る舟なれば如何にも帆に風を孕ませて走つてゐ

る様に、勢強く深く活けるがよいのであります。

柴船 これも出船入船は随意で釣り處も通例の如くであります。船中に柴を積みたる心にて、花を稍小めにし、舟の外へ多く枝葉を出さぬやう、寂しく活けねばなりません。尤も小菊・撫子・女郎花など、其外成るべく小輪の花が移りのよいものであります。

飾り船 是れは置船でありまして水を注がず、花は杉原か奉書にて根本を包んで、金銀か紅白の水引を掛け、末を艫の方に向けもたせかけて船の内に飾つて置くのであります。これは貴人の御座船で、海邊に美々しく装飾を施したるまゝ、未だ海上に浮めぬ体なれば、花も自然高尚なる麗きものを探まねばなりません。

圖三百第



圖四百第



捨船 是れも置船であります。帆花艫花などの差別なく何ともなく活けたるを云ふので、花は水草類を用ひてよろしい。尤も捨てをかけたる船なれば、足

水は十分に注いで差支へありませぬ。佛事などに用ひることで、平常にも床に飾ることはありとも、祝儀の席には決して用ひる事はなりませぬ。

繋ぎ船 是れも又置船であります。第四百圖のごとく二つの船を各々一方をはずして重ね並べ、向ふ手前

のいづれか一つの船に花を入れるので、一つは空けてをくのであります。或は

蘭物など眞の体に入れて泊り舟の帆柱に擬らへ、これに燕子花か河骨を會釋ふて、帆を下したる風に見せるも面白き活方であります。

六、五趣向

『長船』或書に長舟といふ器の事が出てをります。長さは五尺に巾一尺の檣の本地にて作りたる足付きの花器で、勿論大床に用ふるものであります。これは大徳寺の江有和尚の好みにて、秋草を色々活けられたといふことであります。花の留は處々に竹の筒を沈めて置くので、砂物の花形にならぬ様に成るべく取り亂して入れるがよろしい。木物は生けず草物に限るので、花は種々數は何程にても心に任せて活ければ宜しいが、色の差合はぬやうに氣を注げねばなりません。秋草を活け難せ或は燕子花、菊など一色様々に活け分くるも面白きもので、殊に夏の花器としては涼しく心地よきものであります。

『番下し』これは千利休の趣向で、鞍馬山より燧石を賣り出す番に二筋の綱を付けて、谷を隔て、遙かの山上より卸すを象りたるものであります。第百五圖

のごとく、床の落し掛けに青銅の船を釣り下には薄板の代りに圓莖を敷くので、花体は碗花の如く朝顔二本を入れ、一本は中程まで今一本は莖まで垂らして、下の一輪を畚の形とするのであります。

第百五圖



『楠船』これは細川幽齋の奇作でありまして、信太の森の千枝の楠樹の、風に吹き折られたる枝を拾ひ取つて釣り船に製らへ、之に第百六圖に示したることく、野菊に葛の葉を流して活けたのであります。

『七夕對舟』此の向ひ船といふは七夕の祝儀に用ひることにて、船は一對を遣ひます。七色の菊の造花をかざり、そのうちに生花一色を取り合はせて陰陽の

花形を備へ、左右共用流しに入れて星逢ひの縁をとるのであります。倍又願ひの糸といひて此の流しの枝に、一方の舟には白赤、黄、紫、蒨葱の五色の糸を

圖 六 百 第



但し此の船は七夕に限らず、夏より秋にかけて草花の多き時は、あるひは牡丹芍薬又は菊、紅葉など、雙の船に二色宛つ活け分くる事もあります。いづれ木

掛け、一方の舟には白糸ばかり二結び、都合七結びを掛けて星に向るので、七結び掛けたる舟は陰にて二結び掛けたる舟は陽であります。

に草を取り合はせて宜しく、又一方には花の咲かぬものを挿しても苦しからずと云ひます。

「晒貝の釣船」これは故人茶の會のとき（茶人紹巴なりとも云ふ）第百七

圖 七 百 第



見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮。

といふ古歌の掛物をかけ、其下に塩屋の香爐をかざりて此の貝の船を釣り、防風といふ葉ばかりの草を活けたので、その配合の面白きに客人ふかく感賞したといふことであります。

(四) 釣瓶

或る流にては、釣瓶の花器の始まりは、千利休が、庭の井戸の釣瓶に朝顔の纏ひわたるを見て思ひ付き、これを作り始めたといつて居りますが、果して如何でありませうか。それは兎まれ四季に通じて用ひますけれども、此の器は廣口ものにて草の花器なれば殊に夏日炎暑の候をもつて専らとし、花も清涼なるを旨として手繩なども露のしたる許りよく水に浸して用ひるものであります。釣瓶は角なる木地製のものも最も普通にて、或は青磁、茶色などの陶器もあれども、皆木作りと同様で取扱ひに異なることはありませぬ。敷物は花臺、薄板、車、手繩等を用ひるので、又基石、兵庫砂を蒔いて其の上に置く事もあります。對の釣瓶を用ひる事もあれば一つのみ遣ふ事もあり。掛る事もあれば置く事もあり、一瓶を掛けて一瓶は置く事もあり、或は又井筒をも添へて飾る事もあるので、すべてその取扱かひを三段に定め、七種の花入方に分ちてあります。

一、釣瓶井筒寸法と手繩

釣瓶の寸法は第百八圖に示すごとく、高さは六寸四分にて口の廣さ五寸六分

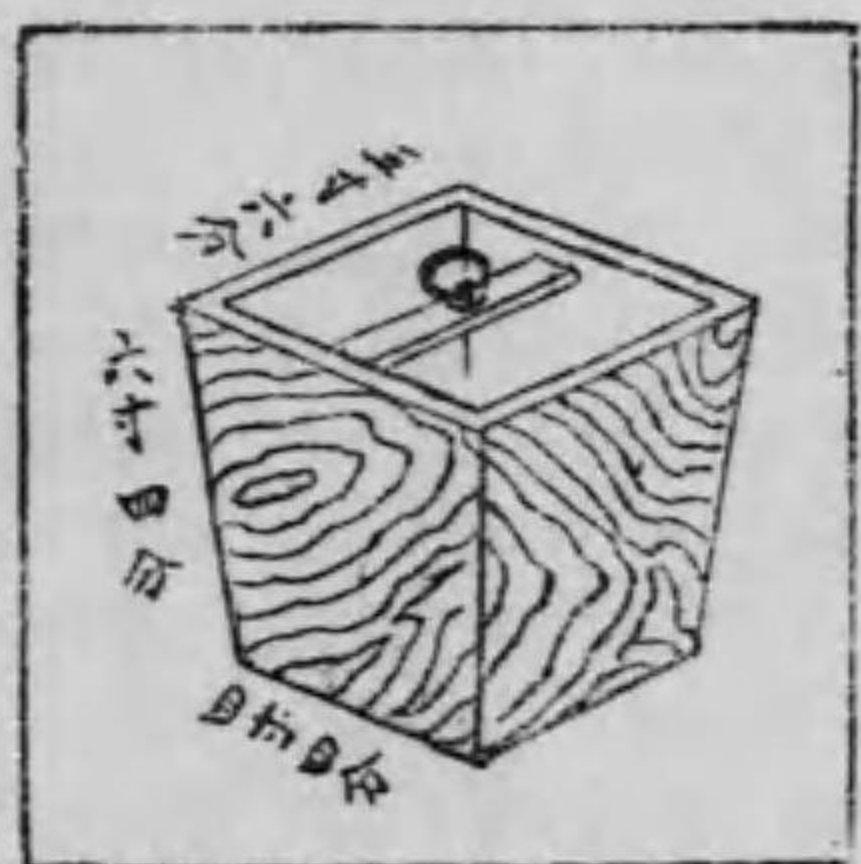
四方、底四寸四分、板厚さ四分八厘にて手の太さは八分角、口より一寸下りて貫きとほしに付け、其の真中に鑲を打つのであります。尤もこれも諸流一樣ならず、石州流には上六寸四方底四寸四方高さ五寸五分にて、板の厚さ四歩手は七歩角、ふちより四分下げて附けると云ひますが、未生流に用ひる處のものは、口の廣さ五寸七分四方底三寸九歩四方高さは六寸七分、手は口より三歩下りて貫きとほすのであります。又古昔の釣瓶の寸法は高さ六寸八歩口徑五寸八歩四方底は三寸八歩四方であつたので、多少の相違はあれど形においては變りなく、花を活けるに差し支へもなければ、いづれを用ひるも随意にするがよろしい。井筒も又其構造寸法様々でありますが、先づ定法の寸法は内の方一尺二寸四方にて高さは九寸、井筒の端は高さの三分の一即ち三寸木返しにするのであります。或る家の規矩には廣さ一尺三寸四方高さ五寸五分、井桁を組み出し下は端をいだし、或は一尺七寸四方より二尺五寸四方までに作りて席の大小に準用すると云ひ、又井筒の梓は一寸角か一寸二分半の木を用ひ、丸太をもつて作

ることも有りと云ひます。

車の柱高さは七尺二寸を定規とし風流なる丸木を遣ふので、車附けの枝は上

より一尺下に有りてよろしい。滑車は直径六寸四分

にて厚さ二寸四分のものを用ひるのであります。勿論是等も色々寸法はありますけれども、さして要な



第百八圖

ければ茲には省畧します。手繩は釣瓶によつて差別があるので、塗釣瓶を書

院に用ひるときは銀の鎖か真紅の組紐を用ひ、木地

のまゝの釣瓶には鼓の調へ苧を假りに用ひます。又朽板の釣瓶焼器の釣瓶等に

は麻繩、藤繩、椶櫚繩、鐵鎖などを用ひますが、總じて紅の丸打紐を用ひて蓋

支へはありませぬ。長さは七尺とも七尺四寸ともいひますが、釣瓶の用ひ方に

よりて事足る程に適宜にすればよろしい。この手繩を釣瓶の敷物に遣ふときは

第百九圖のごとく渦に巻くので、上座床の座敷ならば臺目にて左旋に巻き、下

座床の座敷ならば右旋に巻くのであります。

二、釣瓶の扱ひ方

釣瓶も船の如く釣置兩様に用ひるので、釣り釣

瓶は陽にて置釣瓶は陰であります。平らかに置く

ときは陰の釣瓶と云ひ、角を前に向け少し明りの

方へ振りて置きたるを陽の釣瓶と云ふので、陰の

釣瓶は手を横一文字とし、陽の釣瓶は勝手の向き

へ斜めになすのであります。床に一つ置くときは

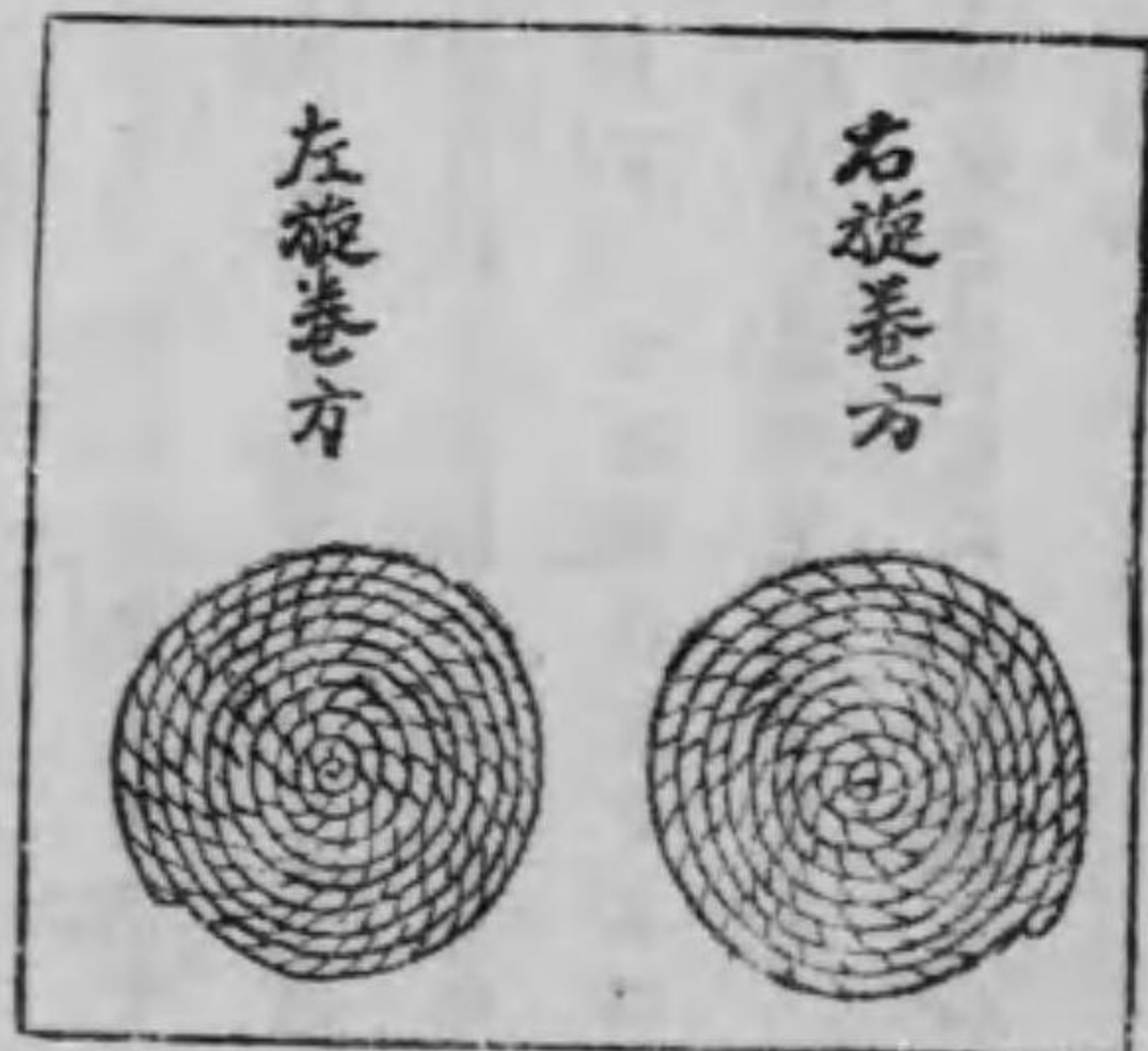
陽の釣瓶にて臺目に置くとときは陰、又一對を置くときは陰陽に飾るのでありま

す。

一つの吊釣瓶は、春夏なれば床疊より二尺三寸上げて吊り、秋冬は三尺、極

暑には尤も極暑には下に置く方がよろしい。六寸上げて吊るので、釣瓶の吊

り處は釣船の定座と同一であります。又二つの吊り釣瓶は床疊より六寸上げて



左旋巻方

右旋巻方

吊り、二つの内の其一つは床柱より九寸離れて吊るので、高さは見合せにしてよろしい。

釣瓶は口廣くして花配の仕悪きものであります。小草物の類は、手と板の間に花配をして留るのでありますが、木物など花大きくして留まり難きときは、青銅等の中に入れて花尻を留めるがよろしい。或は下司板を箝めて其四隅に大小の穴を明け、竹の筒を込めて之に花配をすれば最も便利であります。

釣瓶に花を活けるときは角を少し除けて花を入れるので、正中や角より出すものではありませぬ。(但し石州流にては釣瓶の隅より花を生け出すと云ひます。)本勝手(主位)の花なれば釣瓶の左側、逆勝手(客位)の花なれば右側に入れるので、向ふ手前のことは花の都合に任せるがよろしい。上下二つを用ひるときは常の二重の挿方にして宜しく、井筒あるときは三重の挿方と同意であります。花と花が相接觸するは言はずもがな、花にて釣瓶や手繩を見切らぬ様注意せねばなりません。

飾釣瓶 と云ふは床へ一對を飾るのであります。陽の釣瓶は角を少し前に向けて明り口の方へ置き、陰の釣瓶は平らにして床柱の方へ置くので、手は両方とも横一文字であります。敷物は花臺か薄板にて、花は主位客位を活けるのであります。

組釣瓶 は一對重ねて置くので、敷物は手繩か車又は薄板も用ひます。尤も手繩を遣ふときは床を禁じて臺目に置くので、板床ならば車、薄板も宜しくありませぬ。組方は第一百十圖に示したる如く、陰の釣瓶を下に平らに据ゑ、其上に陽の釣瓶を角違ひに重ねるので、陰の釣瓶の手は横一文字、陽の釣瓶の手は斜に勝つての方へ引くのであります。上の釣瓶の花大きければ下の釣瓶の花を小ぶりに、下の花大きくば上の花を小ぶりに入るので、上下共に花を入れますが、炎暑の初りは何れか一瓶のみ花を活け、一瓶は水許り入れ置くがよろしい。尙花にも釣瓶敷物にも露を持たせて置くのであります。

井筒附の釣瓶 は一瓶を置き一瓶は吊り下げるので、第一百十一圖のごとく下

禁する ゆるに 極く少 量に注 ぐがよ ろしい。 尤も雫 の垂る る様な るを賞 翫する ものな れば、

第百一十圖



回釣瓶

第百十圖



回釣瓶

物などにて横鱗を入れ、下には小草水草の類ひを堅鱗に入れるので、陰の釣瓶は四季時候に順じて足水を注げばよろしけれども、陽の釣瓶は水の見える事を

三百十四
に井筒を飾り上に
車を懸けるのであ
ります。井筒の上
に置きたるは陰の
釣瓶、上に引き上
げたるは陽の釣瓶
にて、陽の釣瓶を
明り口の方とし、
陰の釣瓶を臺目の
方へ置くのであり
ます。花は上に藁

釣瓶にはよく露をうち、手繩も水に濡して遣ふがよいのであります。

三、七種の傳

「苔清水の釣瓶」

苔のむす山陰清水底清み、下には夏も通はざりけり。

これは床落し掛の定座に一瓶を釣り、一瓶は床の中央に置くので、下には美しき小石か或は黒白の基石などを嶋形に敷いて、其上に据えるのであります。

これは置釣瓶を賞花とするが故に、置釣瓶を陽に吊釣瓶を陰に飾るので、手繩つけ方花入方等、すべて第百十二圖のごとくであります。

「朝露の釣瓶」

色々に薄くも濃くも置きわくる、花と露との中ぞ床しき。

是は二つ置き組釣瓶にて、臺は編竹の筏形を敷きますが又小石を敷きてもよろしい。組方は既に述べたる如く、尤も銀付の手は豎にするのであります。

花の挿方は二重切に同じく上下一鉢に見立て、上の釣瓶の花は和らかに、下

第百二十圖



の釣瓶の花は強く競ひて活けるものであります。
「軒端の釣瓶」

結び置く露の光りの顯はれて、軒の忍に宿る月影。

これは一つの吊釣瓶でありまして、第百十三圖の如く細き真直なる竹を三尺五寸に切り、一端の節には釣瓶の銀を掛くる爲めに枝を少し残し、上の端には



圖三十百第

藤蔓などに輪を付けて床に吊るのであります。竹の女

竹の類ひよろしく、節は何程にても半の數にせねばなりません。花にて吊竹を見切る事はなりません。或は蔓物など活けるときは特に此の竹に纏はすこともあります。

「板井の釣瓶」

道遠み板井の清水掬ひ上げ、今日は扇もさしぞ置かるよ。

是は床壁の真中なる折れ釘に一瓶を掛け、一瓶は床の陰座(臺目の方)へ寄せ置くので、臺は何を用ひても差し障りはありません。これは上の掛釣瓶を賞するの、時の正花を入れるがよろしい。尤も上の釣瓶は陰にて下の釣瓶は陽であります。又折釘のなき床なれば垂撥を用ひて掛けても宜しい。

「宇治橋の釣瓶」

風吹けば川邊涼しく寄る浪の、立ち返るべき心地こそせね。

是は第百十四圖のごとく一つの置釣瓶であります。手繩を銀の結び目より僅かばかり離れて切り残し、陽に飾るので、臺は青石か兵庫砂を蒔くか、或は朽板の風流なるを敷くのであります。花は随分高く入れるがよろしい。此作意は昔宇治の通圓、宇治橋にて水を汲み居たる折ふし、利休來りて訪問するに出で逢ひ、それより打連れて菴に歸り、早速にその釣瓶の繩を切りて水指に用ひた

ので、利休大いに其風流を賞したと云ふ事でありませぬ。是によつて其趣向を移して花を入れ、則ち宇治橋の釣瓶とは號けたのであります。

圖 四 十 百 第



「垂髮子の釣瓶」

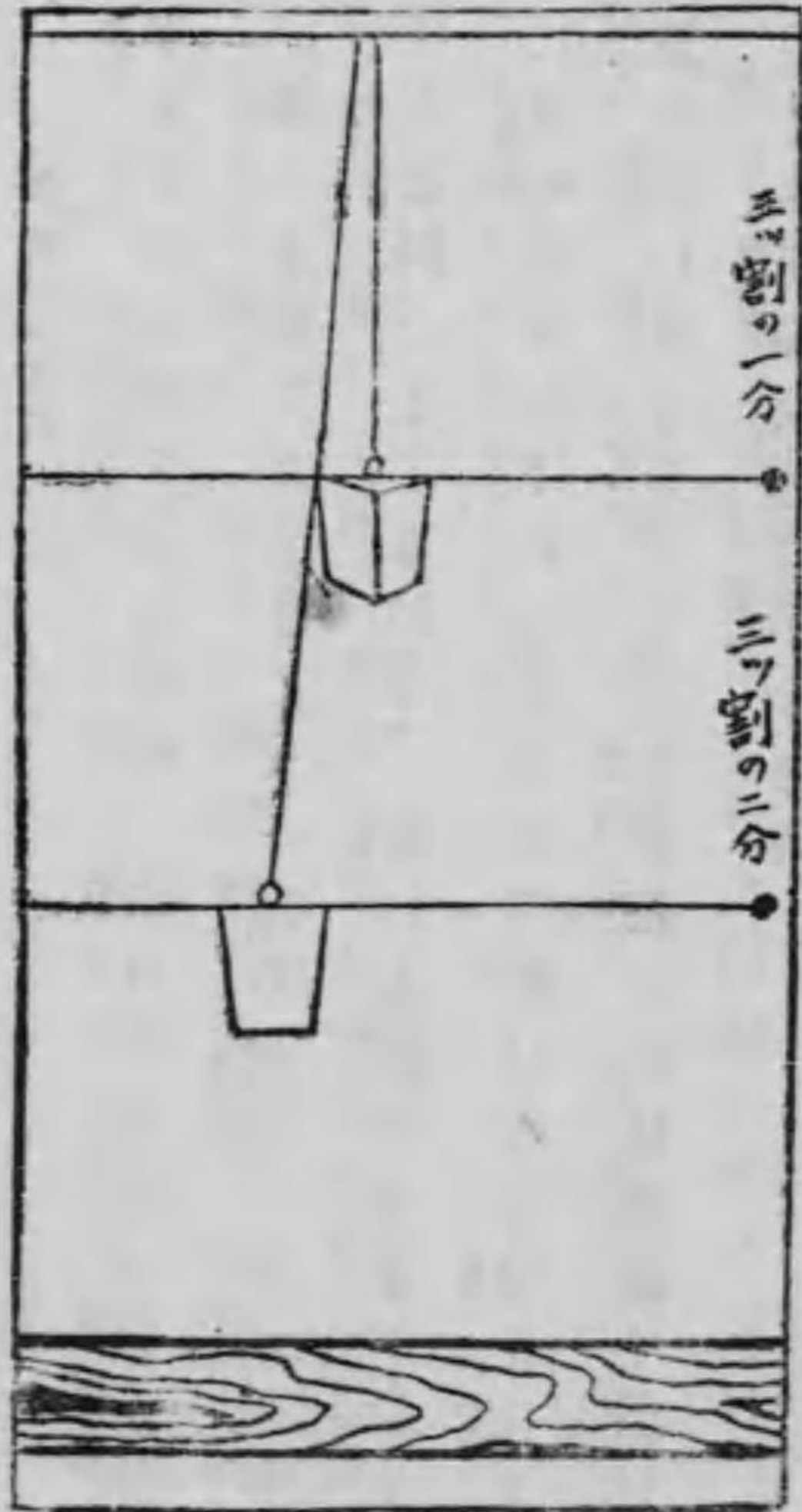
筒井筒井筒に掛けしまろがたけ、老にけらしな妹見ざる間に。是も又組釣瓶にて飾り方は朝露の釣瓶と同様であります。夏日大暑の砌り暑氣を凌ぐために水を充分に注ぎ、美しき小草の花を二種取り合せて上の瓶釣に涼しく活け、下の釣瓶は水ばかりにして、上の花の水にうつる趣向とするので、板床ならば地板にも露を持たせるがよろしい。或は歌意に因みて井筒を飾

り、其の隅に釣瓶を重ね載せ、又は籬の子を渡してその上に置きたるも風雅なるものであります。

「競馬の釣瓶」

若駒と今日に逢ひ来る菖蒲草、生ひ遅るゝや負くるなるべし。是は對の瓶釣を二つながら第百十五圖の如く釣るので、雙つとも掛ると云ふ心より、競べ馬とは稱けるのであります。釣り處は床の落し掛けにて、其の

圖 五 十 百 第



下の端より床縁の上端迄の間を三割にして、其の一つ分と二つ分とに釣瓶の口の當たるやうに吊るを定例とするので、陽の釣瓶は高く陰の釣瓶は下に吊るのであります。

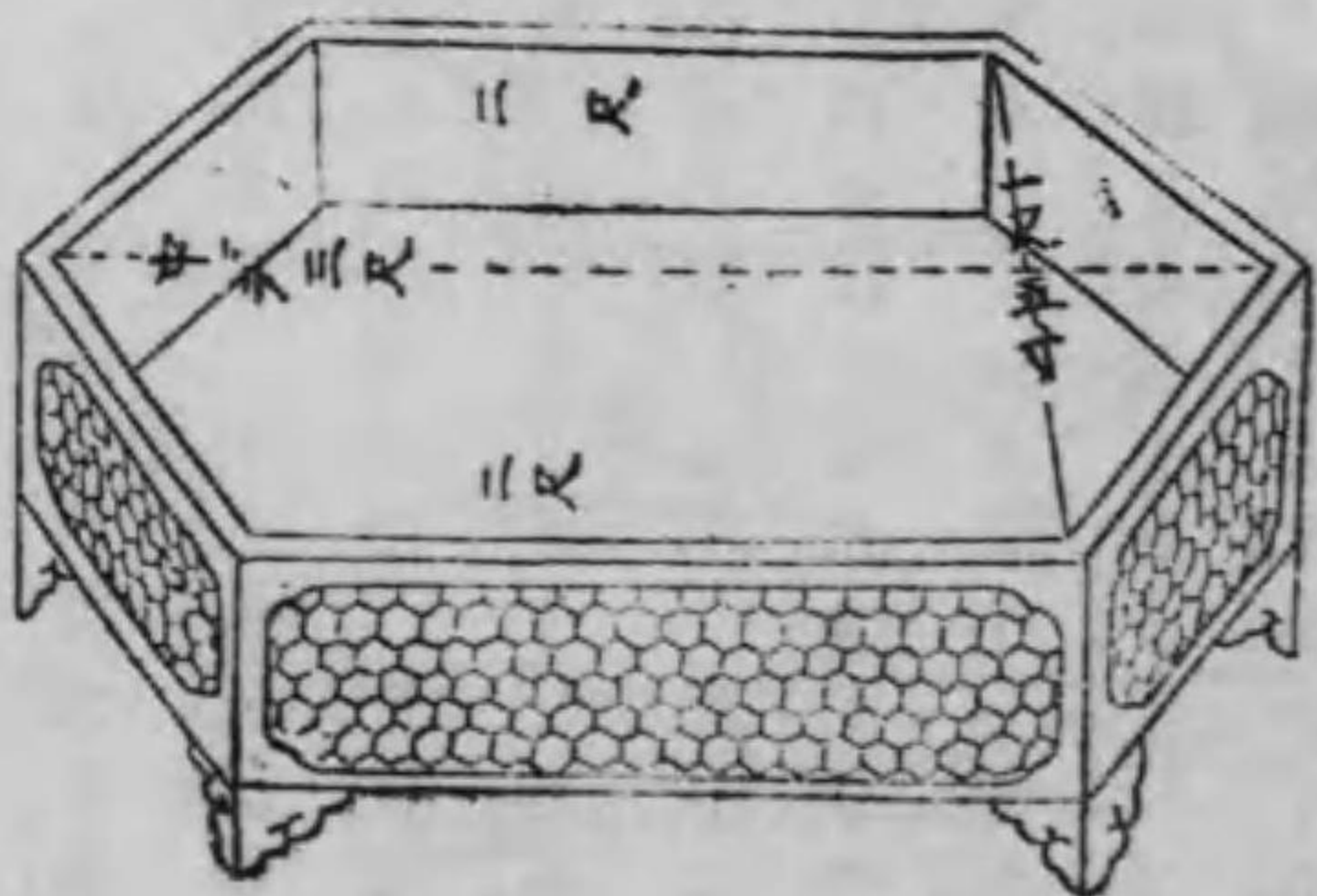
併し乍ら花の恰好によりては、少々の高低は按排すればよろしい。本来これは端午に用ひる事でありまして、前の證歌に依れば、花菖蒲を二種又は一種にても活けるを例ひとするので、常にも用ひますが挿方に心得があります。常は凡そ上に蔓物を入れ下には少し立ち伸びたる物を挿るのでありますが、端午には下の瓶の花は丈短かく、上の瓶の花は丈高く活けるを趣向とするので、常法の規矩とは無論反對であります。

(五) 廣口と馬盃

廣口、馬盃、砂鉢の類其余种々、いづれも往古の盆花砂盆の餘風であります。随分古くより用ひ來りたるものであります。青銅製のものもあり、木地製のものもあり、其形も又様々であります。六龜の砂鉢といふは第一百十六圖のごとき龜甲形にて、惣高さ七寸五分内足一寸、長さは中にて三尺向ふ手前とにも二尺、幅一尺五寸にて惣地紋五歩の龜甲刻みであります。

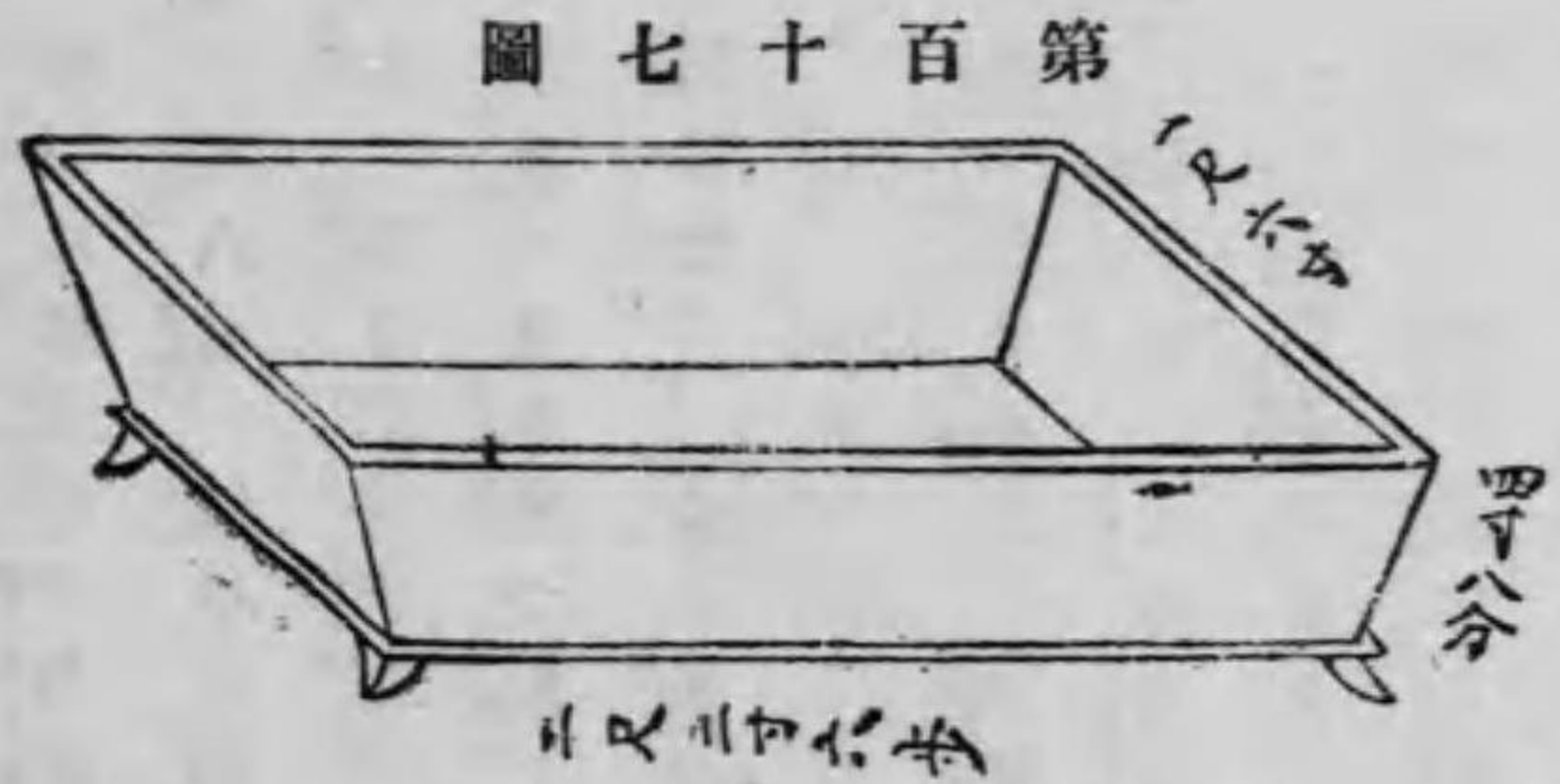
廣口にも大中小各種ありますが先づ普通のもの、寸法は、長さ二尺二寸六歩巾一尺六寸、深さは四寸八分にて足の高さは一寸八分、厚さ六分四厘の板をもつて作るので、底板は四方へ五歩宛つ出して丸面とし、すべて第一百十七圖の如く、臺に載せたる様に見ゆるのであります。尤も右は内底の寸法にて、上にては四方へ五歩宛つ開きます。又指船もこれと同様の作り方にて、長さは一尺五寸巾七寸、底長さ一尺四寸高さ足ともに五寸であります。

圖六十百第



廣口は臺に載せて床に置きますが馬盃の類は床へ置くことを禁じ、臺目か違棚の下に置くので、花臺を用ひず薄板を敷くのであります。すべて是等の花器は船と同じく四五月頃より十月迄のもので、その余に用ひるときは砂石を蒔きて足水の見へぬ程にして置かねばなりません。水

草を活けるときは池澤の有様とし、陸草を活けるときは山野庭園の景色を寫す



圖七十百第

がよろしい。

ので、陸物水草を取り合はせて入れるときは第百十八圖のごとく、石をもつて水陸の隔となし、水邊の景色を象るのであります。陸物にても水草にても、大なる花器には多く三才の石を飾つて景色をととのへるので、花はこの飾石の後ろより出るやうに入れるのであります。砂石を造ふときは、白きは陽にして花有る處に遣ひ、黒きは陰にして花無き處に遣ふので、これを以つて水陸を分つには、白きを陸とし黒きは水とするのであります。池沼の景色は器の中央を深淵とし、周圍を淺瀬と見做すので、淺瀬の花は丈高く勢ひ猛く入れ、深みの花は丈短かく柔らかにして、漸くに水上に生ひ出でたる心持ちに入れる

陸草を分け
て入れるを株
分といひ、水
草なれば魚道
と云ひ、木物
なれば根本の
間を谷間と云
ふので、株分
魚道と二種活
けの時には、
一つは用の下
へ横鱗にして
入れるがよろ

圖八十百第



しい。されど景色面白からぬときは大株の花を見切らぬ様にして逆に遣ふ事もありませぬ。又三種入れには大株を一種中程に入れ、その余は主位なれば左に、客位なれば右の方に入れて、片方はあけて置くがよろしい。兎角花器の中心を見定めて、夫より主位客位と其花に應じて一方のみ入れるので、尤も時宜によりては此うばかりとも限らぬ事もあります。大体以上の通りであります。株分の間隔は花の格好に依つて多少加減せねばなりません。大凡大株の花の高さの十分の一として活けるが定法であります。

花留は石を用ひるが本意なれど、石ばかりにては留り難ければ、或は蟹・龜・五徳などをも用ひるので、砂留には下司板を拵らへ、宜き程の處へ穴を明けて竹の筒を込み入れ、之に花配をして花を活け、根本の穴を笹板か葉蘭などにて覆ひ、其上に砂石を置くのであります。

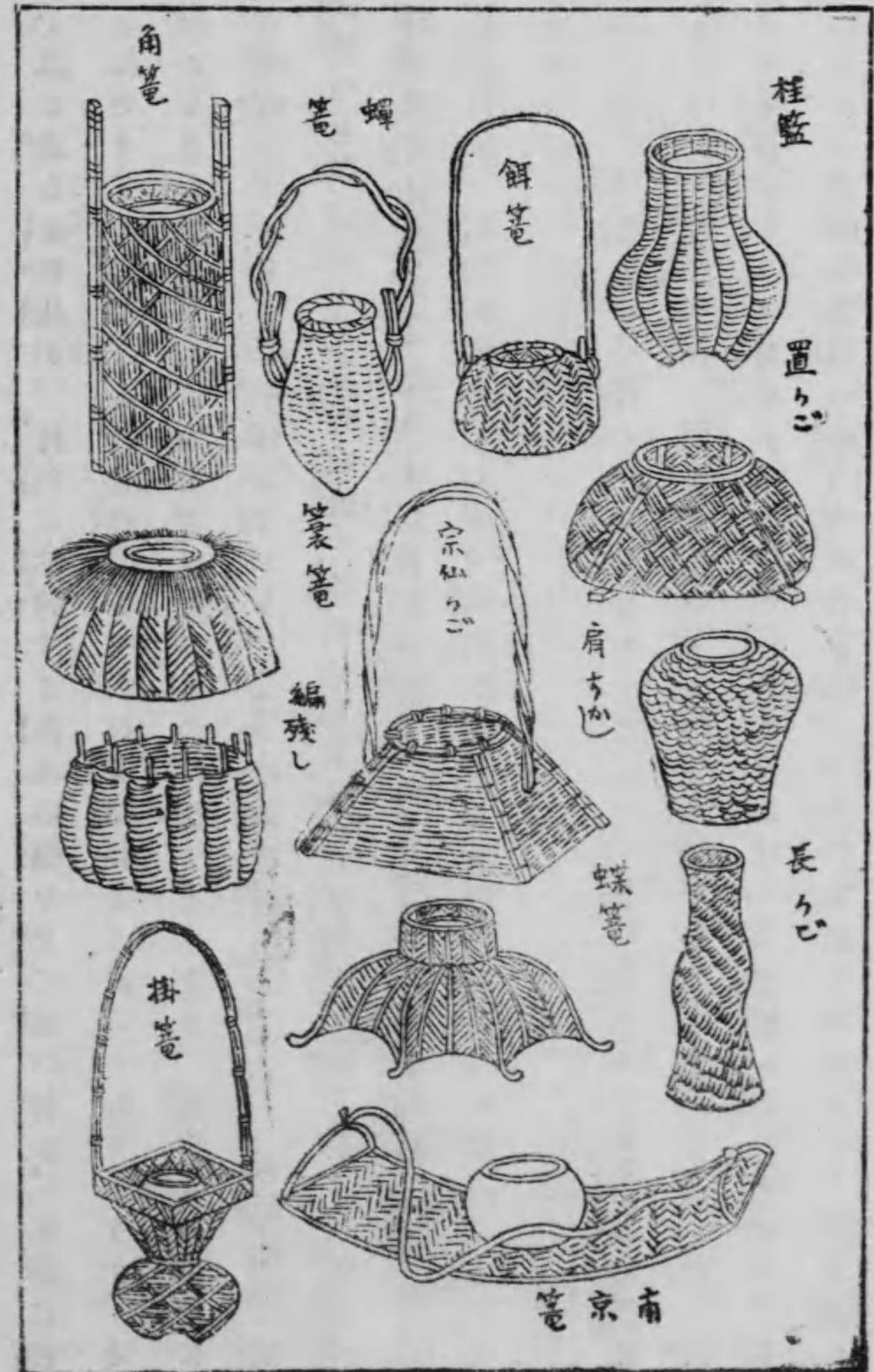
(六) 籠

籠花器は或る時利休が、桂川に鮎狩する漁夫の籠を見て思ひ付き、花器に作りしを始めとするので、これを桂籠とも云ひ又鮎籠とも云ふとありますが、その以前よりして花器として用ひられたるもの、様であります。籠花器の種類には掛置兩様ありまして、利休の作なりと云ふ桂籠・置籠・肩すかし、長籠・餌籠・蟬籠・掛籠の七種を始め、其外宗仙の始めたる宗仙籠・遠州侯の肩すかし、釣花生けの南京籠・有馬籠・丸籠・角籠・蝶籠・角籠・掛籠・青籠・大黒籠・養籠・頭布籠・編殘してんべつ・蛇籠など、尙許多ありますが、其中の重なるものは第百十九圖のごとくであります。

籠花器は三月頃より十月迄のものでありまして、十一月より二三月迄の間はこれを用ひず、畢竟木物を活けてうつりよからぬ故であります。これを床に置くときは花臺を用ひず薄板を敷くので、板床なれば一切敷物を用ひませぬ。花を入れるには金物か焼器か或は竹の筒を込んで之に花配をするので、釣り籠は一枚の竹の組物なれば、中央に陶器の壺を載せて水を持たせるので、故人是れ

に棟の花を入れしに殊更佗びて風流なりし由であります。花は葉物花物に限る

圖九十百第



ので、就中置籠には牡丹・芍薬・百合・芥子・玉簪花・菊・紫苑・岩菫など、掛籠には鐵線朝顔・葛紅葉の如く花車なる蔓物を入れて、うつりのよきものであります。籠の花は随分派手に賑やかに入れるを本意とするので、花葉少なきは寂しくて移り宜からぬものであります。手の付きたる籠は花にて手を見切らぬ様にせねばなりません。花大きくば能むを得ず一箇所は見切を許すとすも、決して二三箇所も見切る事はならぬので、殊に上真中を見切る事は大いに禁するのであります。往昔小堀遠江守の此手籠に朝顔を活けたるは、蔓を手に纏はせて自然の儘に入れたるよし、時にとりて誠に風流なる所作であります。

第百二十圖のごとく手籠に美人草を挿て靈照女と名付る事は諸書に見へます。が、初心傳に「籠花器に美人草を生るを靈照女といふ……。」又一書には「籠花器に手を着ることは靈照女より始まる云々。」されば手着きの籠花器に美人草を入れて、昔唐土の靈照女の風情に見立てしより、後世その籠の名をも靈照女と呼ばひ慣はしたのであります。尤も此の靈照女の説は諸流區々にて、誤傳多

きやうであります。或る生花の傳書に、靈照女は唐土蓬居士の女にして十五歳

より花を愛し、千草萬木を挿入て翫て遊んでゐたので、

これよりして此籠の名としたとあり

ります。又さる家にては、東山時代に龐居士と云ふ翁ありて、浮世を捨て、深山に引き籠り、籠を作るを生業として居たるが、或時花器を作りて將軍に献じたるに大いに賞美され、床の間に据え置かれたる故、賤しきものなればとて床の間へ置く事を遠慮したので、さらば花臺を用ひて座敷に置かんとあるを重

圖 十 二 百 第



ねて、花臺は床の間を意味したるものにて、取りも直さず床の間に置きたるも同一なればとて、それをも固辞したと云ふことで、今に至るも籠花器には花臺薄板を用ひすとあり、此の翁に靈照女とて容色好き娘ありて、父の手扶けに同じく籠を作りゐたるが、其娘の製へたる籠は弦の有るものにて翁の製へたるものは弦のなきものなりしによりて、弦の無き籠を龐居士といひ、弦有る籠を靈照女と稱ふと云ひます。一應は尤もらしく思はれるけれども是等は皆似て非なるもので、まこと靈照女と云ふは唐國襄州の人、龐居士通稱道玄の娘であります。稀世の美人にして孝心厚く、平素に竹をもつて篋を製し、是を市に鬻いで米鹽にかへ、清貧に甘んじて草蘆に閑居する父を勞つて、朝夕に供して居たと云ふことであります。されば靈照女は我が國にはあらず唐の女にて、また花を愛翫したといふ譯にてもありません。按ずるに此の靈照女の事を聞き傳へ、その姿を繪に寫して我が國に渡れるを見て挿花に思ひ寄り、手有る籠に美人草を活けて、可憐なる少女の風情をとりし趣向なるを、後々誤り傳えて種々の妄説

を生じたので、勿論籃の名にも有らず、手籠に美人草を活けたる所をしも斯くいふのであります。則ち靈照女の繪像といふは唐土の少女の、手ある籃を携へたる姿にて、彼の佛像に見へたる魚籃觀音に彷彿たる容であると云ひます。

因に述べますが『觀音冥應集』には、魚籃觀音と云ふは本説なく、疑ふらくは靈照女の像の手籠を持てるを誤まつて、魚籃觀音と号くるものか、或は馬郎婦と魚籃とは一つにてはなきか、水月、馬郎婦、魚籃はみな大唐に於いて畫き出したるものにて、佛説ではないと記してあります。

(七) 瓠瓜

瓠瓜の花器は攝州住吉の濱邊に、一人の旅僧松の根がたに腰うちかけて、瓠瓜の酒を呑みつゝ、休らひ居たるを、千利休通り掛りてこれを所望し、花器に作りしより始まるのであります。其形は一樣ではなく、圓きものもあれば平たきものもあり、細長きもあれば太く短かきもあり、或は眞直なるもの歪んだるも

のなど、種々の恰好があります、今遠州流の所傳なりとて或書に出せる七種の瓠を示せば、第二百一十一圖のごとくであります。

瓠の花器は、秋の末より翌年の春二三月頃まで用ひるので、夏季には相應しからぬものであります。大体圓きものなれば床の正面に掛けて宜しく、柱などに掛くる

第百二十一圖



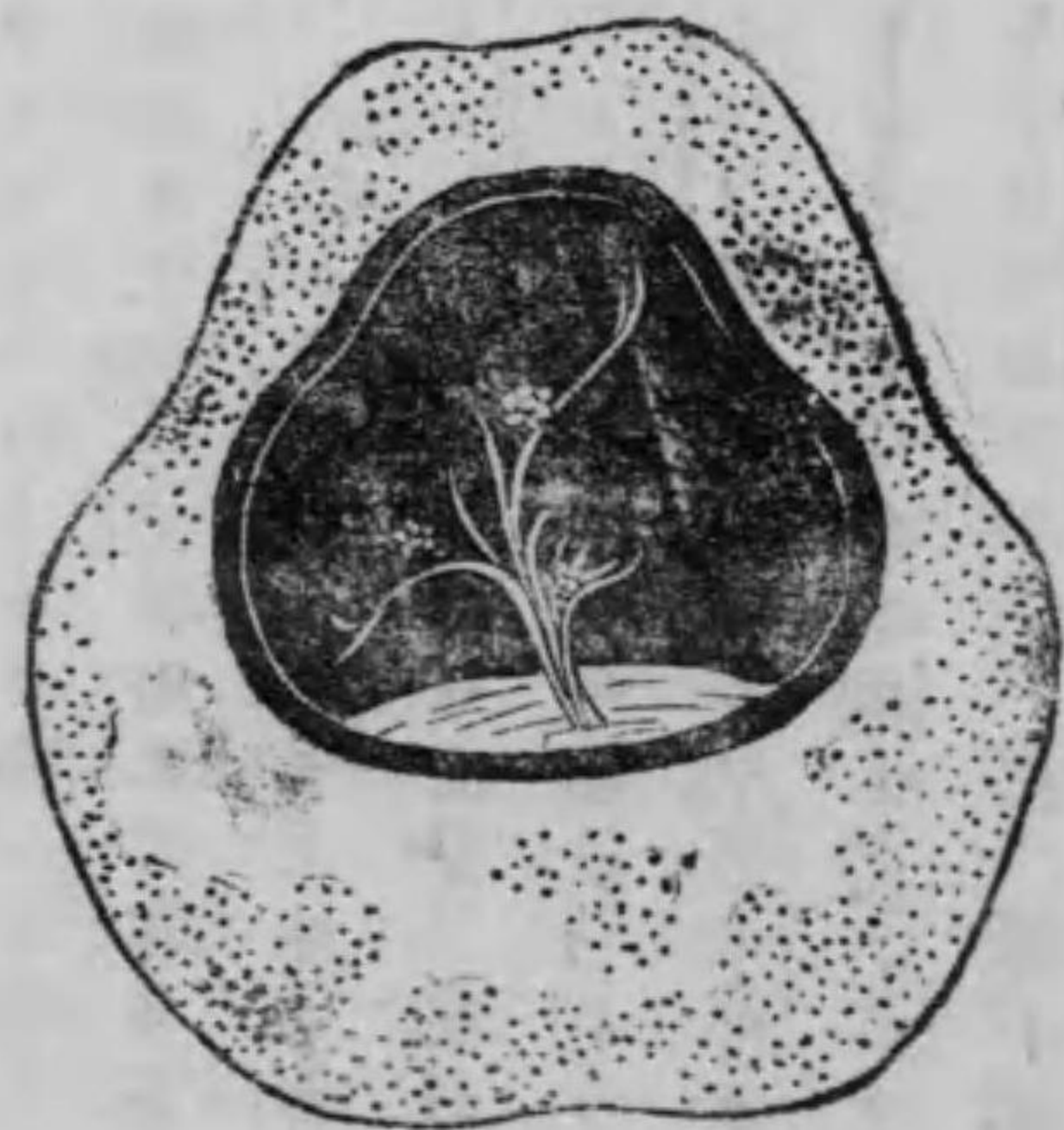
桂に掛ける事も至たく無いではありませぬが、大抵大きく圓きものなれば、たとへ正面たりとも床なき室の柱などに掛けてはならぬので、是は突き出したる

様にて見ぐるしき故であります。又これを置生けとしては面白からぬものであります。置花に用ひるときは中の込み筒が見えてむさぐるしいので、昔は絶体に用ひなかつたのでありますが、然し内に美麗なる鉢などを入れて活けなば如何でありませうか、尤も近來は内を黒塗などにして美しく作つてありますゆゑ、その心配には及びませぬ、只花を奥深く生るを専らとします。

花入れ方は、それ／＼器の形に應じて、花形を見立てなければなりません。全体此の花器に花を入れたるは萬年青をもつて最初とするので、冬季寒氣の節、洞中の冬籠りの体を象つて活けたのであります。すべて圓く洞深きものには、寒中などは水仙、萬年青の類ひを洞籠りに擬して活けるに適してゐるので、器大きければ別してよろしい。則ち第二百二十二圖のごとく、寒氣を凌ぐ洞籠りの体なれば花葉を少しも外へは出さず、大きければ花据らす姿もよろしからねば小さくゆたかに活け、座して全体の見ゆる程を適度とするのであります。長手のものならば勿論、通常のものにては懐ろ狭く此の種の活け方に適せぬゆる、

然るときは春暖に赴きて洞中より頭はるゝ体に入れるので、則ち花葉を内に取り込まず、外に這ひ出でたる格好に生るのであります。牡丹などの和らかなる大輪ものならば、葉の青々としたる景色がよろしい。又至つて細きものには東菊、福壽草の如き小草が適當でありまして、これには夏に至りても石竹、撫子などの小草ものを活けて用ひるもよろしい。

圖 二 十 二 百 第



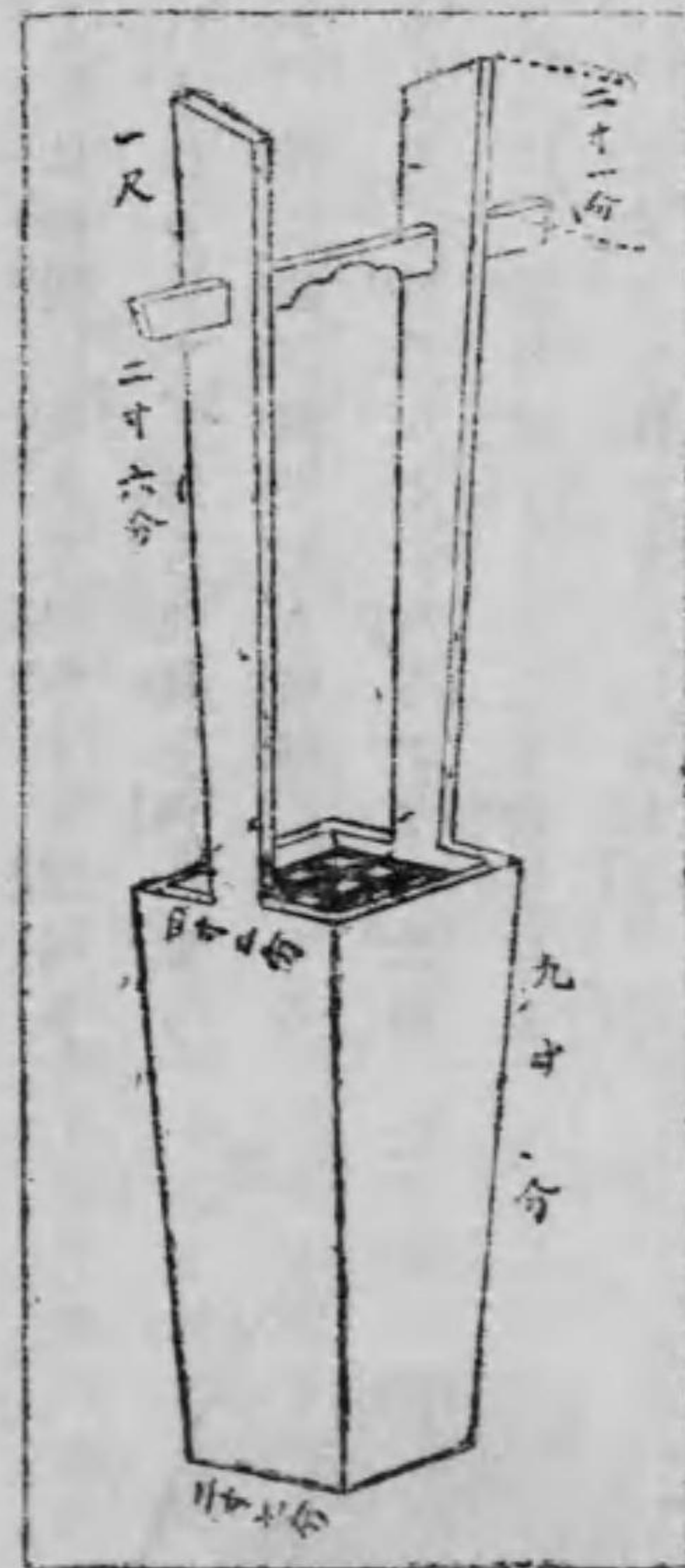
總じて花葉が少々花器の小口に掛ゝる位なれば宜しいけれども、四方にもたれる事は悪しく、或は瓠の額を見切り、止の葉花にて其口を覆ふことを禁じます。もと此器は蔓ものなれば蔓草を入れることを忌みますが、故人是に夕顔を活けて、大いに名譽を博したる事ありとも云へば、いづれを取るべきや、各自

の意見に任すより致し方はありませぬ。

(八) 花手桶

花手桶は原花器にてはなく、花を人に贈るに用ひる器であります。當世は之をも花器に使用するやうになつたのであります。木を組み立て作るもあり竹にて作れるもあり、或は編籠に木にて手を付けたるもあり、板にて箱に指したるものは第百二十三圖のごとく、寸法は惣高さ二尺一寸八分にて箱の高

第百二十三圖



さは九寸二分、口徑四寸二分、底の徑二寸七分、手の長さ一尺二寸六分、手の幅は上にて一寸強し、頭は兩

方違ひ片削ぎにて、尖端より二寸一分下に横手を貫き通すので、箱の内に、九厘の如き穴をくりたる簀を、小口より一寸程下に入れるのであります。尤も大小寸法並に其製法は、各々好みに任すれば宜しいけれども、余りに細工過ぎたるは却つて宜しからず、すべて桶箱ともに手軽く作りたるがよろしい。

花を贈るに、束ねて括りなどすれば傷みややすく、見榮せぬ故にこれに入れて贈るので、花の莖は短かく切らず葉も落さず、只切り取つたる儘がよいのであります。しかし一塊りにしては花桶、花筐の詮もなければ、莖の長き花を主として向ふに入れ、それより段々に短かき花を手前の穴に挿し入れて、景色よく賑やかにするので、此の場合には上の横手を見切つても構ひませぬ。或は桶の底に竹の簀を入れて上下を自由にすれば、花を配るに至つて都合が宜しい。花筐花文庫なども又凡そこれに准するのであります。

此手桶に花を活ける時は掛置兩用とするので、編籠の手桶、或は第百二十四圖の如き青葉附竹の手桶などは、自在鉤をもつてこれを吊れば最も妙であります。

す。尤も草の器なれば、釣瓶な
ど、同様に取り扱へばよろしい。
一箇所は見切りても宜しけれど
も、二箇所以上見切ることは悪
しく、横手は絶体に見切るを禁
ずるのであります。

圖四十二百第

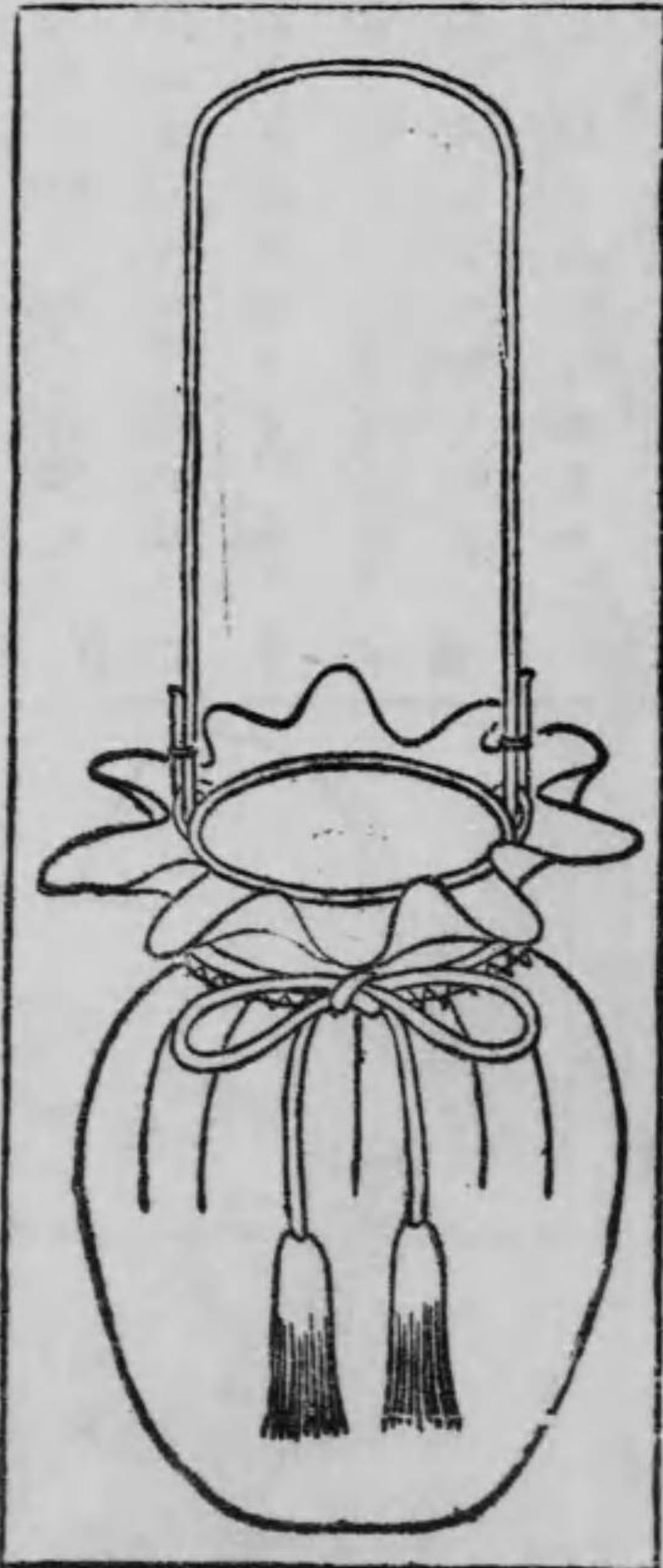


(九) 特異の花器

以上花器の種類、取扱ひ方など、大方は申し述べましたが、尙世にありふれぬ珍器少なからず、古人の奇作、名人の趣好を尋ねるもあながち無益とのみは思はれませぬゆゑ、参考までに普く世に喧傳さるゝもののみ、數種左に掲げて見ませう。

一、茶黄袋形の花器

茶黄とは九月節句のことでありまして、茶黄袋に又茶黄袋とも云ひます。是は重陽に用ひるもので、黄白の菊と茶黄を活けるのであります。則ち第二百二十五圖のごとく、中に入れる花器は錫を以て作り、袋は赤地の錦にして結びの紐、



釣り糸などは五色に表して紫を用ひるので、結び方は兩わな和合の法であります。尤も雲上には俗紐ともに緋なるよし、茶黄袋の故事は奥に記せば茲には略します。

圖五十二百第

二、井筒

茶人千宗且、或時和州在原寺の井筒の朽ちたるを、和尚に乞ひ得て茶器に作り、第百二十六圖の如く唐桐に芒を挿けましたが、是れは少し心含み過ぎたりと、自らも云つたそうであります。兎角花は何にても有りのまゝにて、態とらしく拵らへぬを宜しとするのであります。

圖 六 十 二 百 第



三、潮汲車

汐汲車は第百二十七圖のごとく、車に汐汲桶を載せて、冬の柳に汐風菊を生

圖 七 十 二 百 第



けたので、長さ一尺八寸、巾一尺一寸の車を用ひると云ひます。

四、二段棚

是れは花器ではなく、寧ろ花臺であります。足利義政の好みにて、置花器に蔓物を活けん爲めに作りたるものであります。高さは三尺一寸、横二尺四寸にて、棚は上下とも一尺二寸四方、杉の木地に銅金具を打つのであります。二段共花を入れるので、二つのうち一つは金物一つは土器を用ひ、もし上の段に陶器を

置くとすれば、下の段には竹筒の寸渡切など取合はすのであります。第二百二十八圖のごとく、上の段には蔓物を、下の段の反対の側へ流して入れ、下の段には何にても其折節の草木を入れるので、これは低く閑静なるを宜しとし、上の段の花は床臺との間八寸迄は、蔓を下しても宜いのであります。

五、逆傘

此花器は、往昔より大和の法隆寺に有りし唐物であります。然るに何の用に

圖 八十二百第

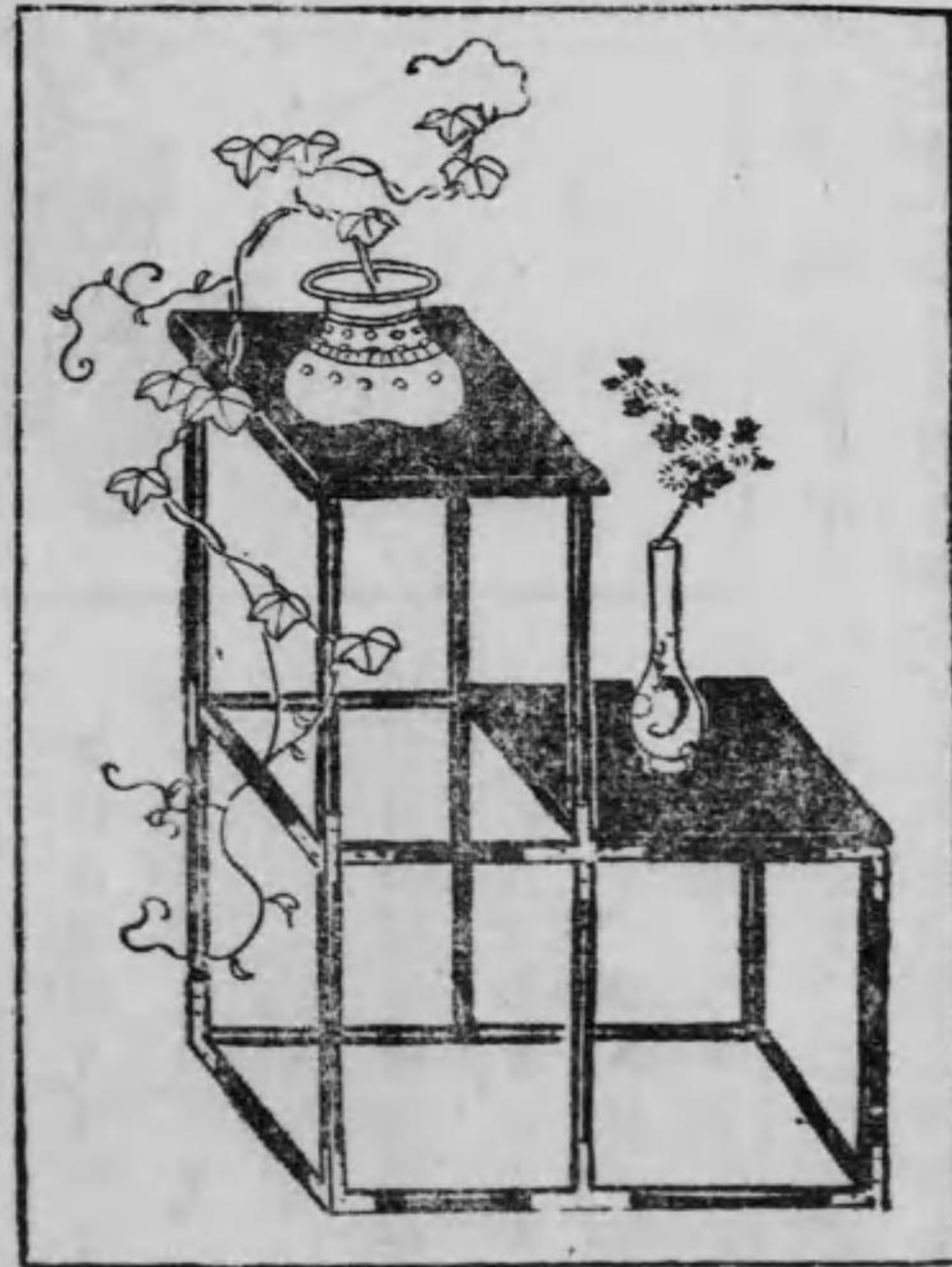
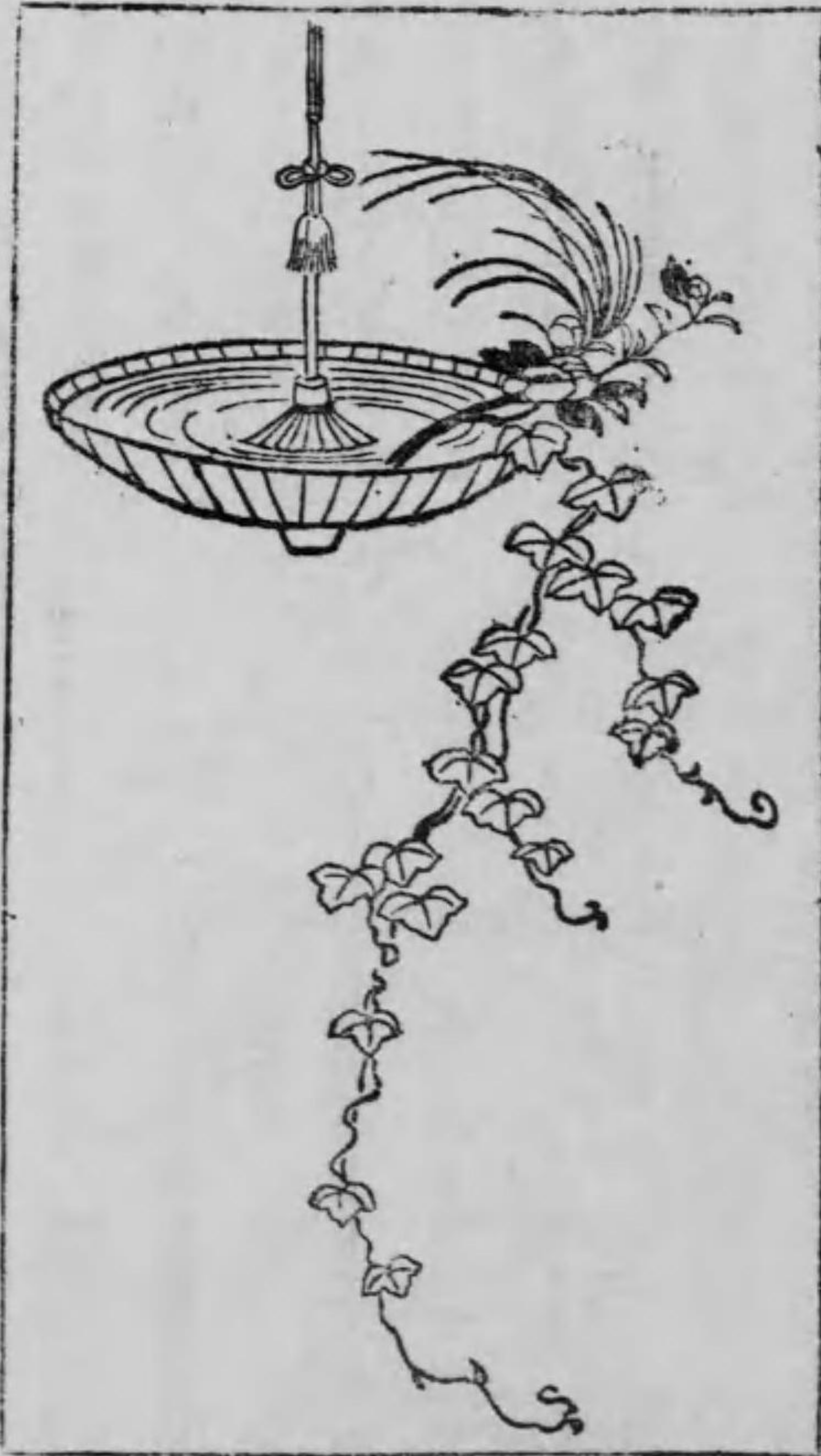


圖 九十二百第



もたゝずして、年久しく藏したるを、片桐石見守の思ひ付きにて吊り花器とし、第二百二十九圖のごとく傘を逆にして紐にて柄を吊るし、折節冬の頃なりしかば、

枯葉の薄に山茶花と唐薦の細かなる葉末の、僅かにうす／＼と色付きたる蔓を流して入れ

たるに、其風情いと潮らしかりしとぞ。是よりして世々に此花器を寫し用ひ出

したのであります。

六、金龍寺形水鉢

水鉢は夏の花器として、一見爽快なるものであります。蔓物を活ける事は至難なるものであります。是は攝津國の金龍寺の老僧の好みにて、第百三十圖の如く水鉢の上に四本の柱の枠を作り、これを客殿に据えて、水鉢の中に陶器の花器を入れ

圖 十 三 百 第

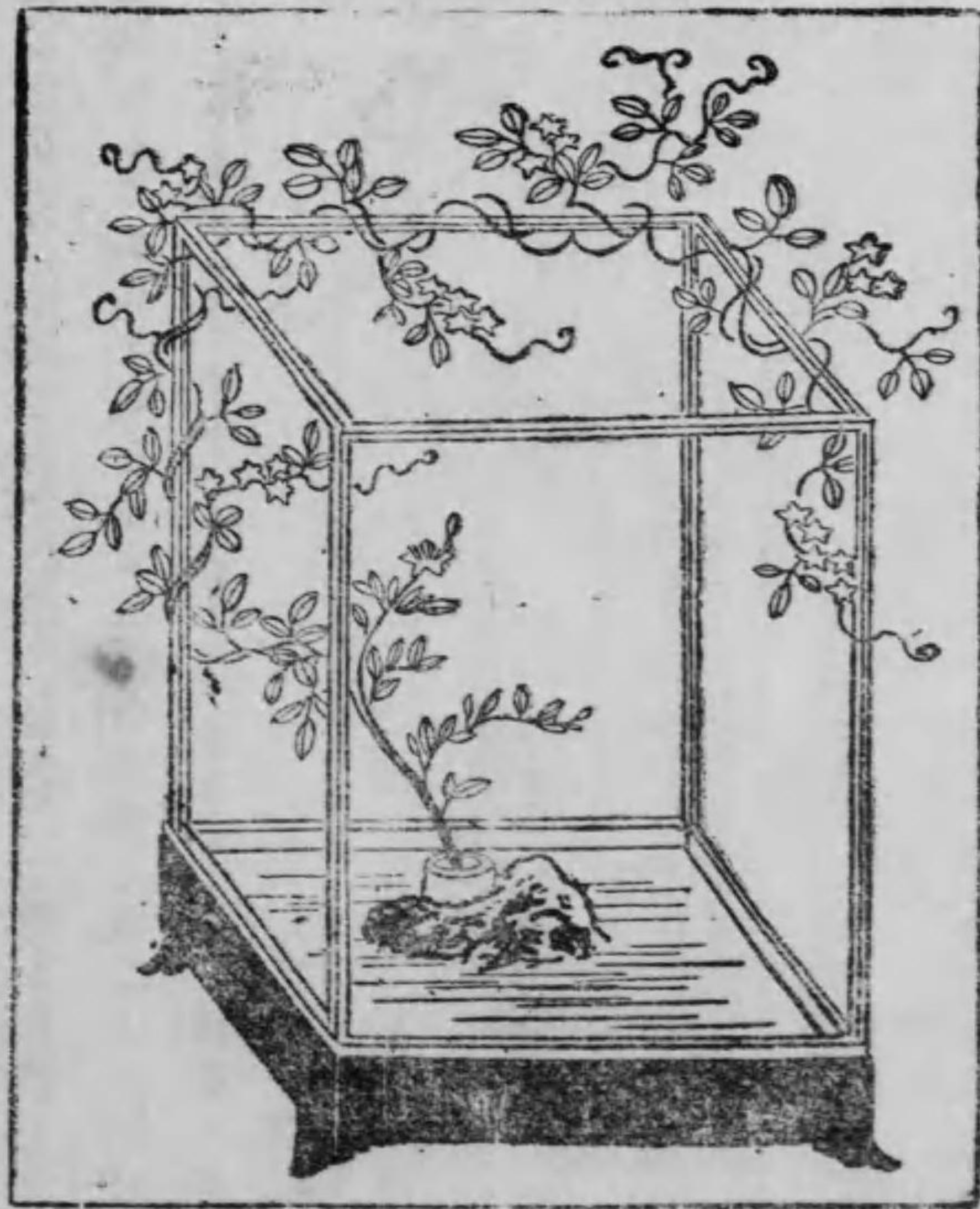


圖 一 十 三 百 第



前に青石を二つ並べ、美容柳に忍冬の花葛を取り合せて、蔓を四本の柱につたはせて活けたるところ、薫りよく、見るからに涼しくて、格別の奇作なりと時の人大いに持て囃したと云ふことであります。此老僧花道に志深く風流でありました。境内名木の櫻の盛りの頃は、床に掛籠、又は釣船等を飾り置きて花を更に生ず、折節松花堂参詣し、此のさまを見てしばし感心したと云ひます。

七、網籠

是は第百三十一圖のごとく底を杉の丸板にして、縷糸を以つて下より次第に末廣がりに網をすきかけ、口に竹の輪を付けて緒にて釣るのであります。花は此の中に紫銅の小さい花器を据え、是れに定家蔓を活けて蔓を内より匍はせて

縁へ出し、夫より蔓に勢を保たせて下に垂れるので、網より見え透きたる光景の面白き事は、又他に類ひありません。此花器は或數寄者の傳へられしとして、京都島原の遊女、吉野といふがこれを用ひたりとか、實に女には似つかしく艶しき好みなりと或書に見えました。

八、櫻欄手



此花器は南京の陶器で第三百三十二圖のごとく、長さは凡そ二尺五寸餘

圖二十三第

もあり、下は洋燈の臺のごとく上の口は喇叭の様に開いて、中に丸く節を付けたるものであります。昔八幡山の瀧本松花堂は、茶の口切りに、折ふし早咲きの山茶花に水仙を應合ふて生けたそうであります。

九、逆風鈴

是は堂塔の簷に掛けたる寶鐸を逆さまにして、鐵の鎖をもつて釣るのであります。昔

圖三十三第



に纏はせて生けられたといふことであります。藤は殊に夜陰をもつて賞翫する

大徳寺の玉舟和尚は第三百十三圖のごとく、白藤を松

もので、松に纏はすに限るのでありますが、松はなるべく葉の寂しきを用ひるがよろしい。

松風に花の匂ひも打出で、

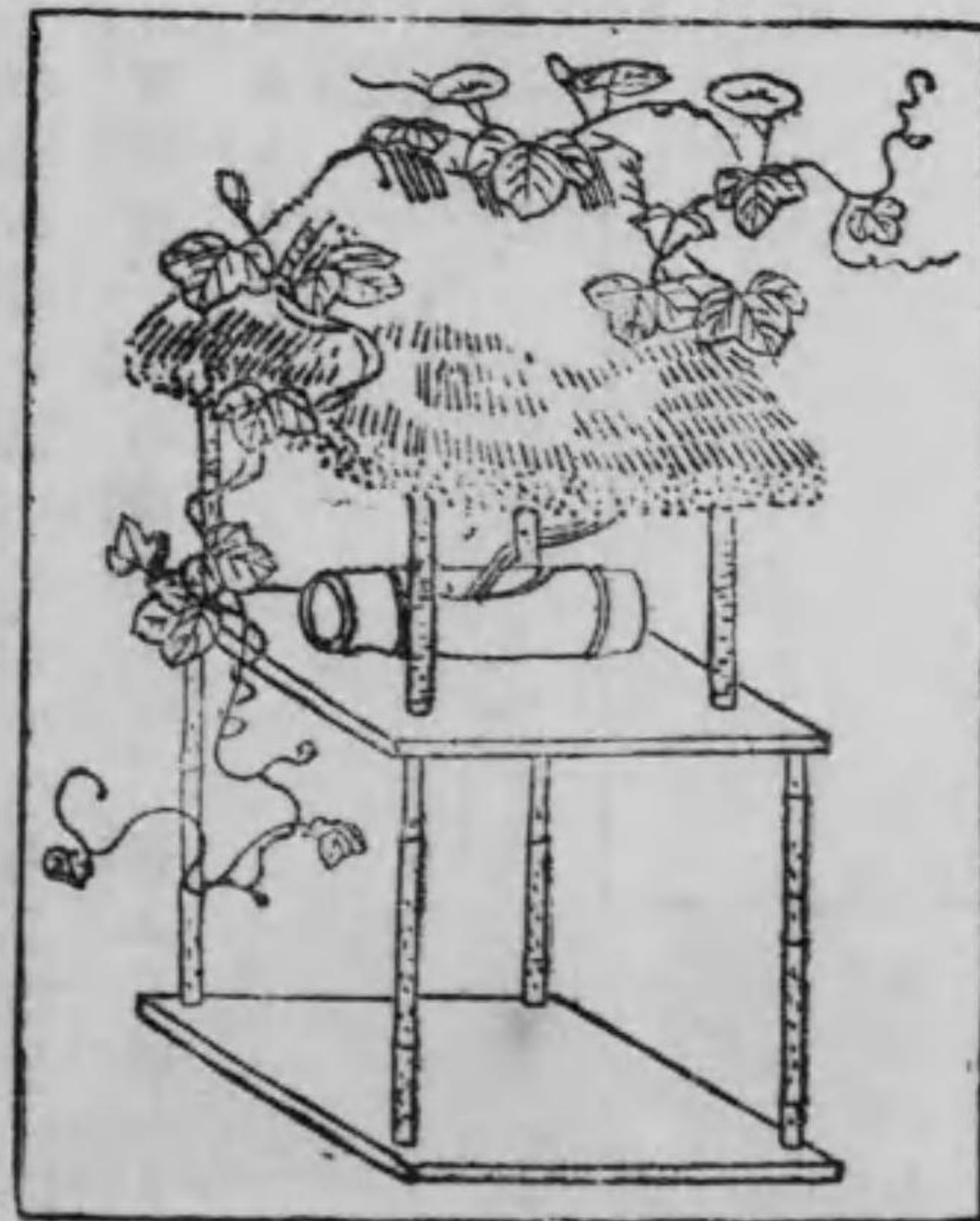
木梢の藤のあかぬ夕榮へ。

後柏原院御製

十、草屋形の青筒

是は第三百三十四圖のごとく、四本柱に萱葺の四阿屋を作りて組臺に載せるので、花筒は青竹にて筒守りとし、四阿屋の中に置くのであります。挿方は竹筒より柱をつたひて屋根に這はせ、夫より蔓先を下に垂れて勢ひをもたすのであります。夕顔は夕景より夜分の客に出すものなりと云

圖 四 十三 百 第



ひます。

十一、三日月形の花器

圖 五 十三 百 第



回 特異の花器

是は第三百三十五圖のごとき釣花器にて、奥州伊達政宗の考案になりたるものと云ひます。丸の差し渡しは三尺五寸にて一面に浮雲の鑄模様あり、花挿方は船と同様にて、尤も天を見切ることを嚴禁するのであります。

十二、花 筏

これは石州候の物好より始まつたので、薄板を細ものにして掛籠を其上に置き、則ち第三百三十六圖の如く珍らしき櫻を挿し入れ、枝先が筏の上まで生ひ出るやうにして筏にもたせ、充分筏に露を注いで、吉野川の眺めを利かせるのであります。木の長さは二尺七寸を始め次第に長短あり、数は六本、木は杉にて一寸六分角を用ひ、細き藤蔓をもつて二箇所組むので、頗る風流なる具であります。又角筏として長さ二尺七寸、長短なく切口を揃へたるものもあり、昔は矢張り木にて作りしを、今は多く煤竹を用ひるやうであります。

十三、花 車

圖 六 十 三 百 第

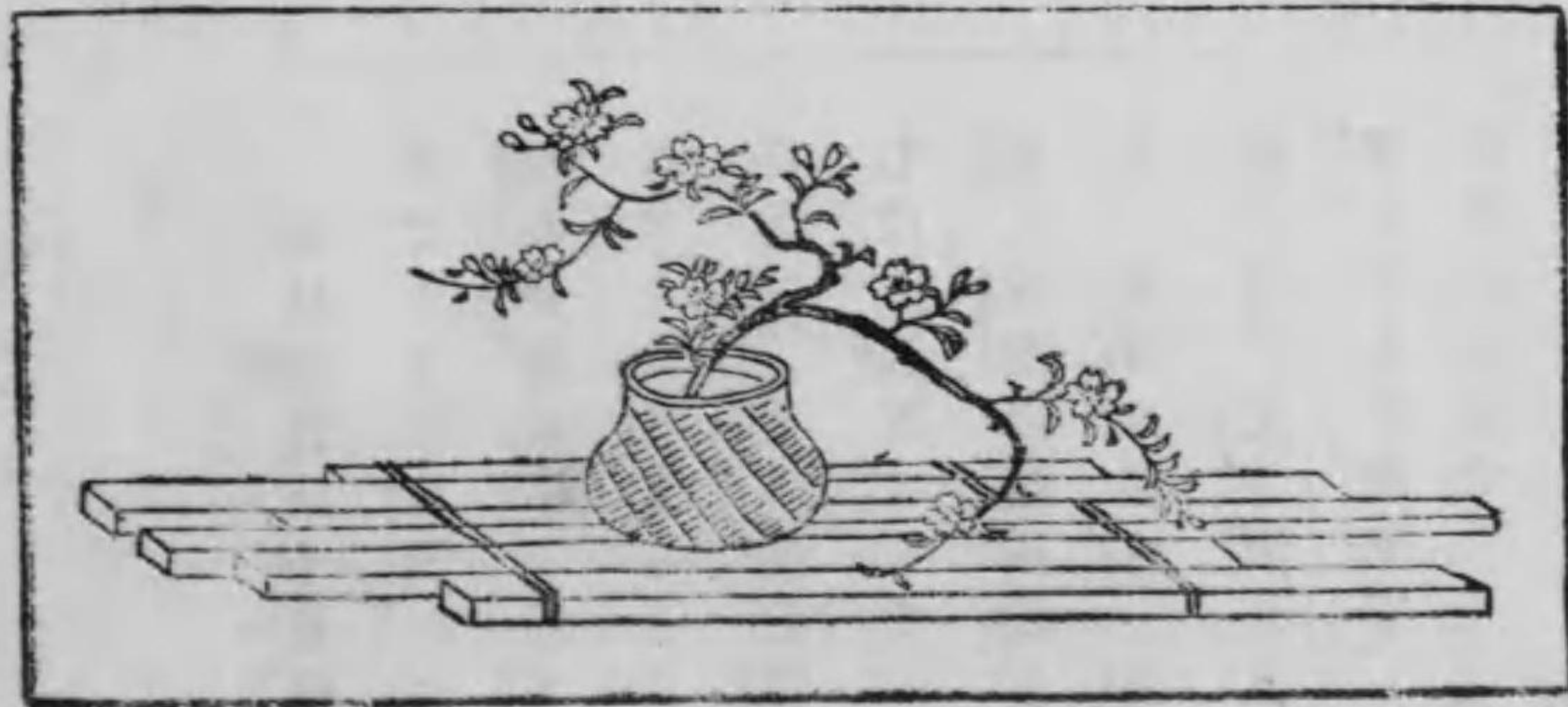


圖 七 十 三 百 第



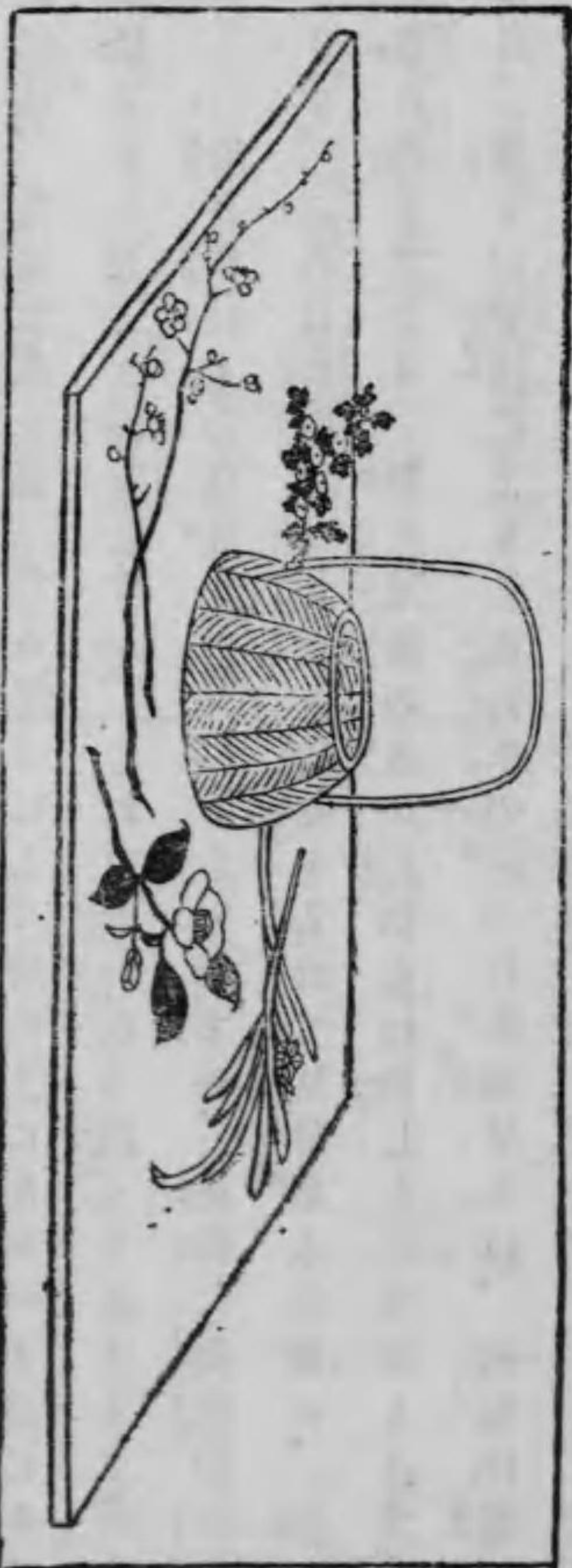
是れは
鳥丸光廣
卿の御好
みにて、
五間の大
床に十寸
穂薄、龍
膽、梅も
とき、女
郎花、萩、
以上五種
を生けら
れたるよ

し、車は第百三十七圖のごとく、轆の長さ四尺五寸、車差し徑し一尺六寸、總黒塗銀金具打にて紐は眞紅、花桶高さ一尺三寸、口開きにて同じ塗であります。尤もこの寸法は或る諸候方にて作られたるを模すので、全く一様ではありませんぬ。これは色どりさわやかなるを賞するので、春の花は殊更に麗しくしてよろしい。併し花の姿葉の形等同じく相似たるものはあしく、悉く容姿の更りたる花を活けねばならぬのであります。

十四、花の壺

千利休、或る時堺の禪寺に至りしに、折しも冬の頃なりしが、時の花どもあらまし調へて住持の僧挿花を所望したので、床の掛筒には唐桶を何んの子細もなく挿入れをき、次の間の窓の下に第百三十八圖のごとく長板をしき、其上に塵籠を置きて梅、椿、水仙、寒菊などを取合せ、花の壺にしてしほらしく捨て置きました。が怒ひ挿たるよりは一風變つて面白く、衆人皆感心しました。是等は名人の作意なればとて、各々其圖を寫し止めたといふことであります。

圖八十三 花壺



(十) 花臺と薄板

抑も卓はもと神佛を祭るに用ひる具にて、花臺薄板は此卓より出来たるものであります。卓の足より上を取り除いて花臺とし、此花臺の足を去つて薄板としたので、卓を飾り其下に花を入れるは、掛花を略して卓下の火筋立に挿したるが元で、後に香臺の卓を去り簡略にして、卓の下板のみをもつて花臺と稱け、置花を載せて床の正面に直す事となつたのであります。扱又此花臺を略して薄

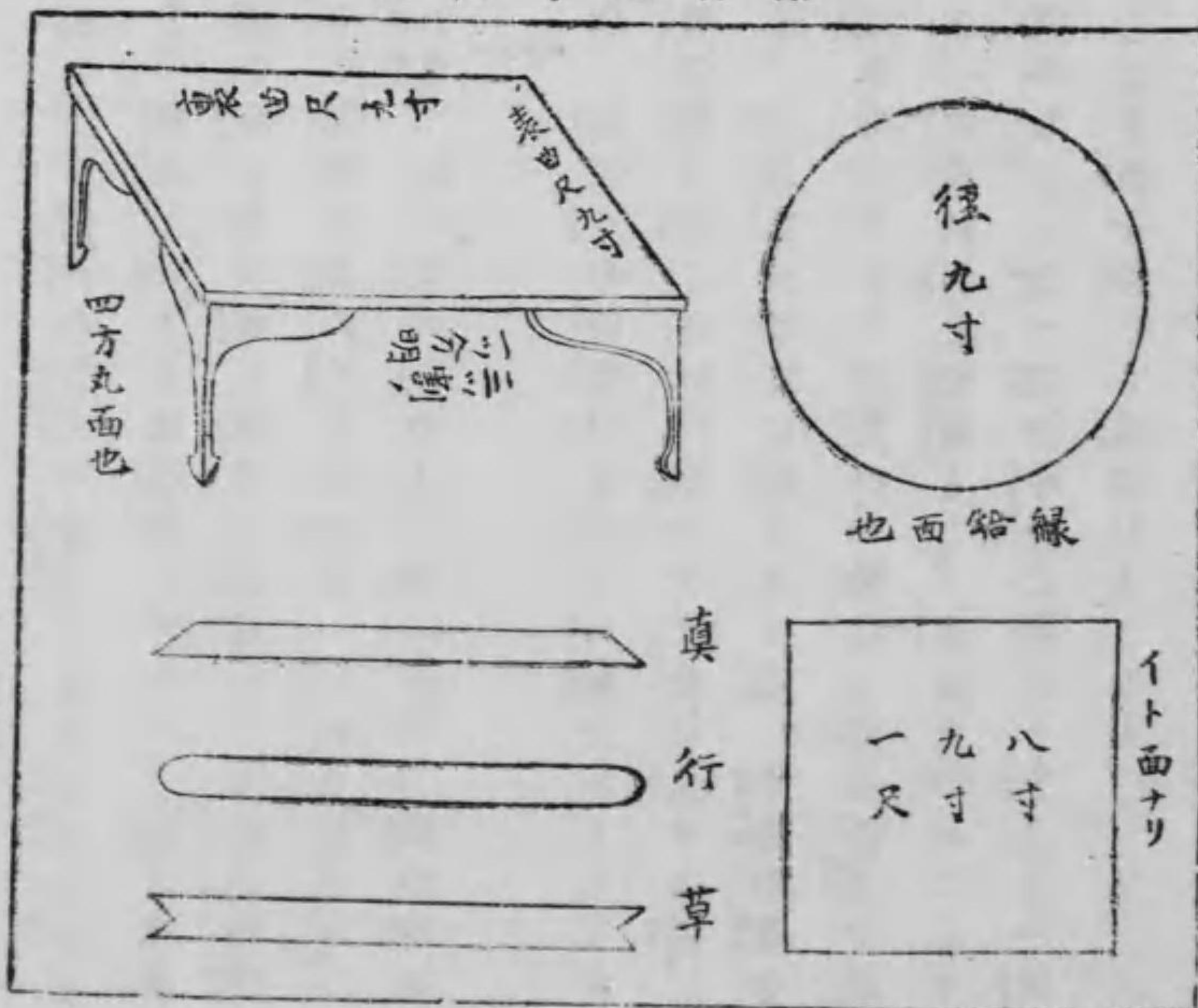
板とする事は、床の掛物長くして、花臺の上に花を置けば掛物の一文字を隠して見苦しと云ふ所より、少し花臺を下る心にて、足を取り去つて薄板を用ひるのであります。夫故に掛物の短き時は花臺を用ひ、横物など掛けたる時には多く卓を用うべきものにして、畢竟床の間の裝飾は掛物を主とし、是に随つて恰好宜しき様に飾るを定例とすれば、この原則に應ずる必要上製出せられたるものが、則ち花臺薄板であります。

一説には、花臺は床を象りたる道具にして床の上に用ゆべき品にあらず、昔は皆薄板であつたとも云ひますが、これは大なる誤りであります。尤も脚は总体低く、餘り高いものは無かつたのであります。花器に盃形の薄端を拵へ出してより、これは口開き、丈低き故花を入れて格好悪しき爲め、高き臺に載せて風雅に飾りてより、世に足高の臺が用ひられ出したのであります。

花臺は、高さの寸法によりて眞行草の三つに區別せられ、薄板は圓角、長方形の三種ありて、長方形のものは又其周圍の面の切り方によりて眞行草に分

つので、此外尙流義によりては六角、八角、扇の地紙形などの花臺薄板を用ふるもあり、小口の切り方脚の附方なども様々であります。要するに最も普通のもの右の數種で、其形は第三百十九圖に示す如くであります。眞の花臺の高さは七寸二步にて、行は三寸六步、草は一丈八步、板の廣さはいづれも陰陽表裏の曲尺を用ひて各々九寸で、板の厚さは三寸六厘、四方圓面とす

第三百十九圖



るのであります。脚の附方は板の長さ三つ割一つ分宛の寸法にして中一つ分を明け、下は猫足にくるのであります。薄板も大きさは花臺と同じく、長さは裏尺の九寸にて幅は表尺の九寸、周囲の面は圖の如く眞は一方落しにて行は始落し、草は矢筈落しであります。角形の薄板は方八寸と九寸と一尺のものあり、四方は糸面にて圓形の薄板は直徑九寸、面は貝の口の様に削るので、板の厚さは何れも二歩八厘であります。

扱眞の花臺薄板は眞の時候に用ひ、草は草の時候行は行の時候であります。これは四季に通じ用ひて宜しく、暑氣強き時は花器の水中を充分に見せる様、寒氣強き時は花器の水を見せぬ様に、又春秋は暑寒に偏らざる故に中分の臺を遣ふのであります。薄板は、花器圓き時は角なるを用ひ、角なる時は圓形を遣ふので、薄板も花器も共に角なれば、花器は角を正面とし、薄板は平みにして陰陽に飾るのであります。花臺薄板の敷方は先づ床の中央に据え、夫より一寸奥の方へ寄せて敷くので、板床ならば薄板を用ひる事はなりません。

板床といふは疊を省いて板を敷くを云ふので、當今にては差別なく板敷の床を設けたるを見受けませんが、元來此床は陽の床にて次の間などに用ふる事で、陰の床には板敷はならぬのであります。陰の床は本式ゆゑ、疊を省く事はならぬが本意であります。遮莫。此板敷の床に置花を活ける時は薄板を用ひず、直かに置くべきものであるとの説もありますが、是れ實は誤りであります。板に板を重ねる時は取り合せ悪しく、間に空なければ和合に非らず、故にこれを忌むと云ふまでの事にて、直かに置くと云ふ法はなく、必らず花臺に載せなければなりません。花器を其儘直に置くは、假へば神佛の供物を膳に載せず直に置くと同様、禮に非ずして裝飾の本意に背くものであります。薄板は花臺を略したるものといふ其起因を辨へず、たゞ水氣の疊に移らぬ様に敷くものと曲解して板疊、(板敷は疊を省しもの故板疊と云ふ)は此の憂ひなければ直に置きてよしと言ひ、其上床の置花は薄板を敷くを本法と心得れども、是大ひなる了簡違ひであります。本式の飾りに用ひるものは花臺に限り、薄板は掛物に依り、或

は花器や花の模様によつて花臺を略して敷くのみ、これを用ひぬ時、花臺を遣

第四百十四圖



ふことは當
然でありま
す。尙因に
床の中央に
卓を置くは
眞の飾りに
て、板床に
は中央の卓
を飾るもの
ではありま
せぬ。併し
萬一卓を飾

る時には見立卓を飾るが宜しく、卓下の花は勝手次第であります。

床の正面に花を置く時は、如何にするも掛物に花の障るものであります。尤も神佛などの像なれば、其顔面にさへ障らねば苦しうありませぬが、掛物が至つて名人の筆か、又は高貴の人の筆になりたる書畫を掛けたる時は、花を少し傍らに寄せて置かねばなりません。則ち第四百十圖のごとく、掛物の縁と花臺の縁とを眞直にし横に並べて据えるので、是を軸附敷方と云ひます。床の内に五箇所の釣合せありとも云へど、左右にて事足る譯にて、明り口の方を軸先と云ひ、臺目の方を軸留といふので、或は正中を軸本又は軸前と云ひ、明りを受けたる方を軸先と云ひ、勝手の方を軸脇と云ふもあります。上座床にて軸先に敷く時は花は客位にて、軸留に敷く時は主位であります。下座床にては丁度この反對となるので、すべて掛物の繪と挿花と對ひあふ如く取り合せよく、花臺薄板の取扱ひに注意せねばなりません。

(十一) 花留具

花に親しむ者は先づ四季の草木、諸種の花器の事を知ると同時に、又花の留具の事をも辨へておなければなりません。

すべて花を活けるには、通常の花器なれば花配を用ひるのでありますが、水盤、指船、馬盃などの如き口の廣きものには花留なるものを用ひるので、既に花器の條にて述べました通り、廣口物には美石をもつて留るが本旨なれども、花留り難き故に、別に製らへたる花留を遣ふのであります。

花留の種類は極めて數多くありますが、平常よく用ふる所のは渦、觀世水、五徳、海老、蟹、碗、蛸、眠龍、緊ぎ七寶、二匹鯉、蛇籠、轡などにて、其中の重なるものを圖に示せば第四百四十一圖のごとく、尤も銅、唐銅或は磁器にて作りたるものなど色々あります。今是等取扱ひ方の概略を述べれば左の如くであります。

渦 は水草を活ける時にのみ用ひるものであります。

觀世水 は陸物にも水草にも用ひますが、陸物を活けるに遣ふときは、必ず花の根本より花器の縁にかけて蟹の花留を遣ふ事が、通例となつてゐるのであります。

蟹 は唐銅製にて大小種々ありますが、水陸共に用ひ又單に一個用ひる事もあり、二個用ひる事もあります。二個遣ふときは上り下りと陰陽を定めるので、花器の縁に掛けたるは上り蟹にて是れ陽、水中に入れたるは下り蟹にて是れ陰であります。又足を左右にして平みに置きたるは陰にて、足を手前に出し少し角を正面としたる

第四百一十四圖



は陽、而して一疋ならばこれに準じ、座敷の模様に応じて遣ふのであります。但し、花と花留と陰陽になるやうにせねばなりません。尤も花留の蟹は海の蟹に非ずして陸の蟹と心得てよろしい。

五徳 は大中小の三種あります。脚を花器のふちに掛け又は組み合せて用ひる事もあり、大なる花を入れるには至極都合よきものであります。元來が火道具に屬するを以つて、流派によりては忌みて用ふる事を禁ずるものあります。

龜 は蟹と同じく水陸兩用にて、陰陽扱ひ方の差別も又略同意であります。甲の六角の穴に花を入れるので、草物なれば何にても活かります。

海老 蛸 などの花留は、水草を活ける時に限り用ひるものであります。

礎 は船に許り用ひる所のものにて、或は又置船の臺に使用する事などあります。重に出入り往來の船に用ひるので、泊り船には決して遣ふてはなりません。

龍 は水陸兩様に遣ひます。

二匹鯉 は水草に用ひるので、陸物には禁じます。

蟹を應合ふのであります。

蛇籠 には大小があります。大は直径三寸六分、長さ九寸にて、小は直径二寸四分、長さ七寸二分であります。尙流によりては長さ五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、夫より一尺、一尺二寸迄も遣ふのであります。是れは水草にも用ひますが、多分陸物を水邊の景色に擬して活けるに遣ふので、中には砂石を入れ、傍らにも石を應合ふて趣きを添へ、或は大なる花器には三個も五個も並べて遣ふ事などあります。

轡 は種々の形に組立て、遣ふので、水草陸草共に用ひますが或はこれを用ひざる流義もあり、詳しくは別項に譲ります。

(十二) 曲留

花を留めるに又曲留と云ふがあります。凡そ曲留に用ひる具は鉄、文鎮、鎖、

小柄、筭、簀、砂利、扇、切り炭などでありますが、皆これ正式の留具ではありませぬゆゑ、賓客請待の席に用うべきものではありません。獨樂か、又は座興に任せて遣ふことはありますけれども、さりとてもつい手近に他の花留あれば、強いてこれを用ふるには及ばず、不意の場合、留具の有り合せぬ時などに早速に代用するまでのものと心得るがよろしい。されば好んで用ふべき事ではありませぬが、一應は心得ておなければなりません。

小柄生の始原は、或る時古田織部正重勝、千利休方へ茶會に參り、會果て、後、庭前に見事なる太蘭あるを見て賞翫したりければ、利休取敢へず其太蘭を切り來りて花を所望し、花器には會席、太鼓飯次を差出しました。然るに織部正は早速太蘭の元を箱ね、小柄を抜き出してこれに差し置き、鋒を少し出して飯次の底へ差し込んで生けられたといふ事でありませぬ。又利休の小刀活けといふも是に同じく、花切りの小刀を以つて差し留めたので、是小刀挿けの濫觴なりと云ひます。

圖 二 十 四 百 第



一説に、小柄筭どめは織部正が小堀遠州の館に參會せしとき、會後遠江守政一尋ねけるは、床に生け候ふ梅小柄留にして然るべきやと有りしに、織部宜しからんと答へたるより、その後政一椽側にありし

黒塗の鹽に、第百四十二圖のごとく小柄にて梅を差し貫き、小刀の先を鹽へさし込み、その押へに筭を置いたので、これを小柄筭留の始めと云ひます。

それは兎も角、太蘭などの様に長く軟かなるものは、第百四十三圖のごとく箱ね結びて、小刀筭尺のたぐひにて重しとし、又は差し貫きて底につきこみて留める

第百四十四圖



ので、木にても草にても莖の硬きものは、第百四十四圖のごとく根を三つにも四つにも割りて分け、これを開きて重しを置くのであります。

又鉄留は凡そ第百四十五圖のごとく手の穴へ花を挿すので、鎖留は第百四十六圖のごとく根を鎖りにて幾重にも纏ひて留め、砂利留は第百四

第百四十三圖



第百四十六圖



十七圖の如く小砂利を高く盛り、石どめは花相應なる中石を見立て、五つ六つ寄せて其根を留るのであります。扇留は第百四十八圖の如く花器の縁に扇を掛けて、骨の間に花を入れるので二種活ける事は出来ませぬ。一種にて二本入れるがよろしい。三本に成れば水際に平身付きて悪しく、尤も扇

に地紙の花器へ掛らぬやうにせねばなりませぬ。

第百四十五圖



第百四十七圖



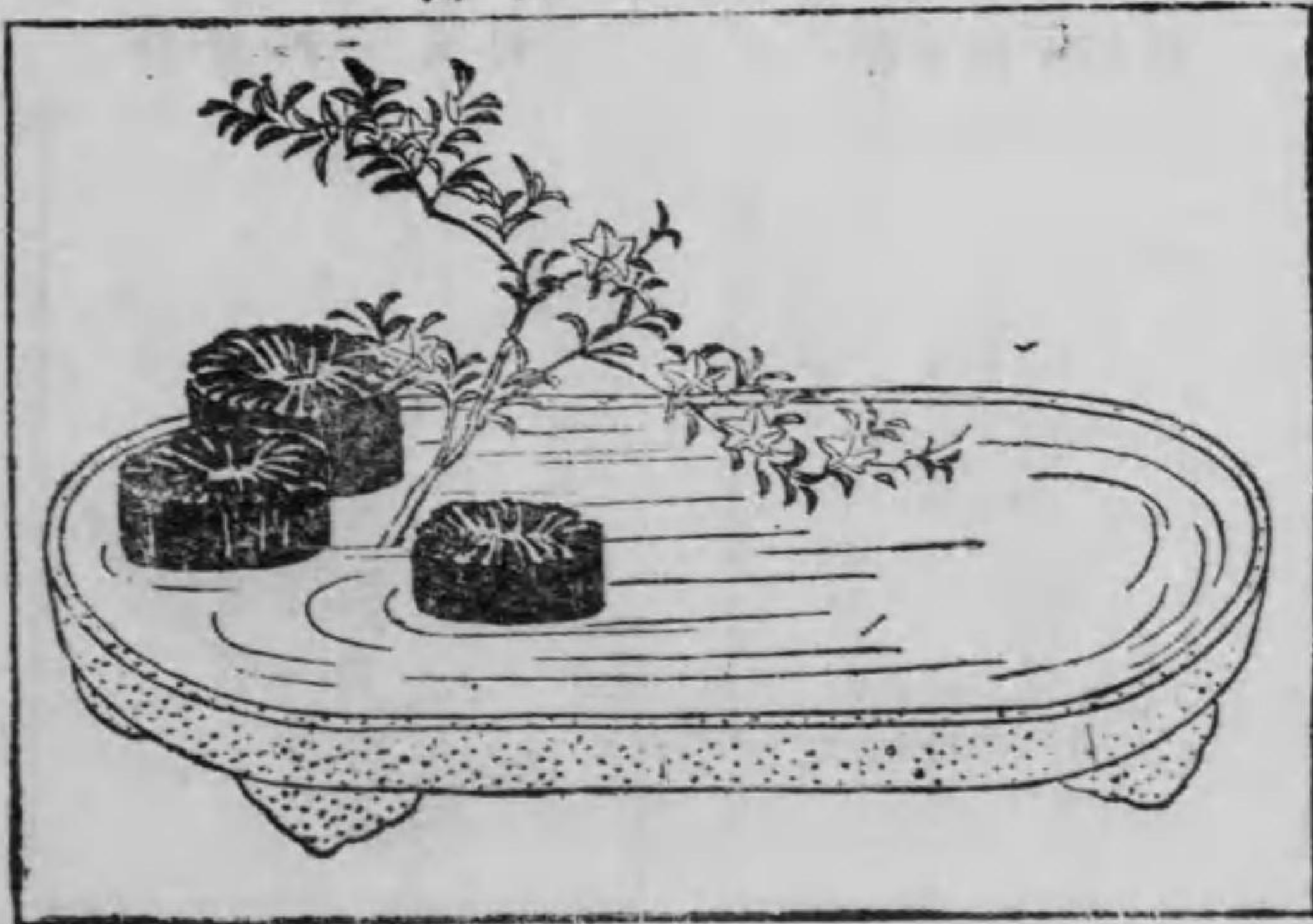
炭を留に遺ふ事は極く稀でありまして、これは花留と言ふよりは寧ろ花の應合ひに用ひるのであります。堅炭は一本遺は

圖八十四百第



す二三本がよろしく、すべて池田の皮付を用ひ、皮の無きは禁するのであります。小口は直

圖九十四百第



に切り、大小長短宜き程に見計ふて遺ふので、其景色は第百四十九圖の如く、總じて石に准うて飾るのであります。

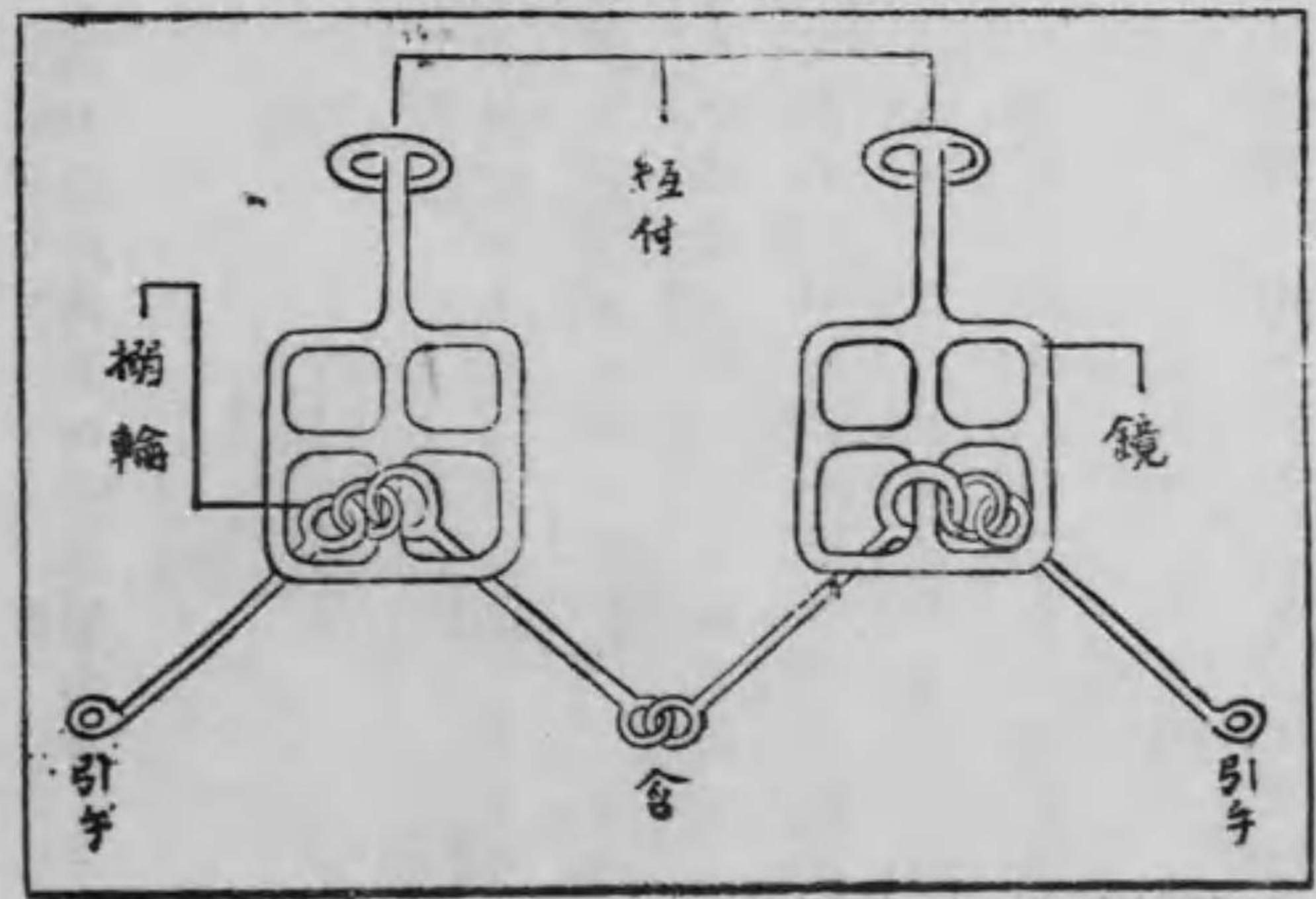
(十三) 轡

轡とは口輪の義にて、馬の口に含ませて手綱を付けるもの、或は又これを銜とも云ひ、一箇を一掛又一口とも唱へます。其形は第百五十圖のごとく、主要なる部分を鏡と云ひ、夫より出て輪のつきたる所を紐付又は鮪頭と云ふので、此の輪の向ふたる方が鏡の表なのであります。又此の二つの鏡を繋ぎたる所は含と唱へ、銜、組違へとも稱へるので、双方に一本宛つ別に付けたるものを引手、手綱懸など、云ひ、其の先の輪にしたる所を蛇口と云ひ、尙含と引手を聯ねたる輪を撥輪と稱するのであります。

轡を花留に用ひることは、東山茲照院義政會て鷹野に出でたるとき、千葉行種が取替への轡をとり寄せて花留とし、馬盟に、杜若の一花三葉を活けたるが

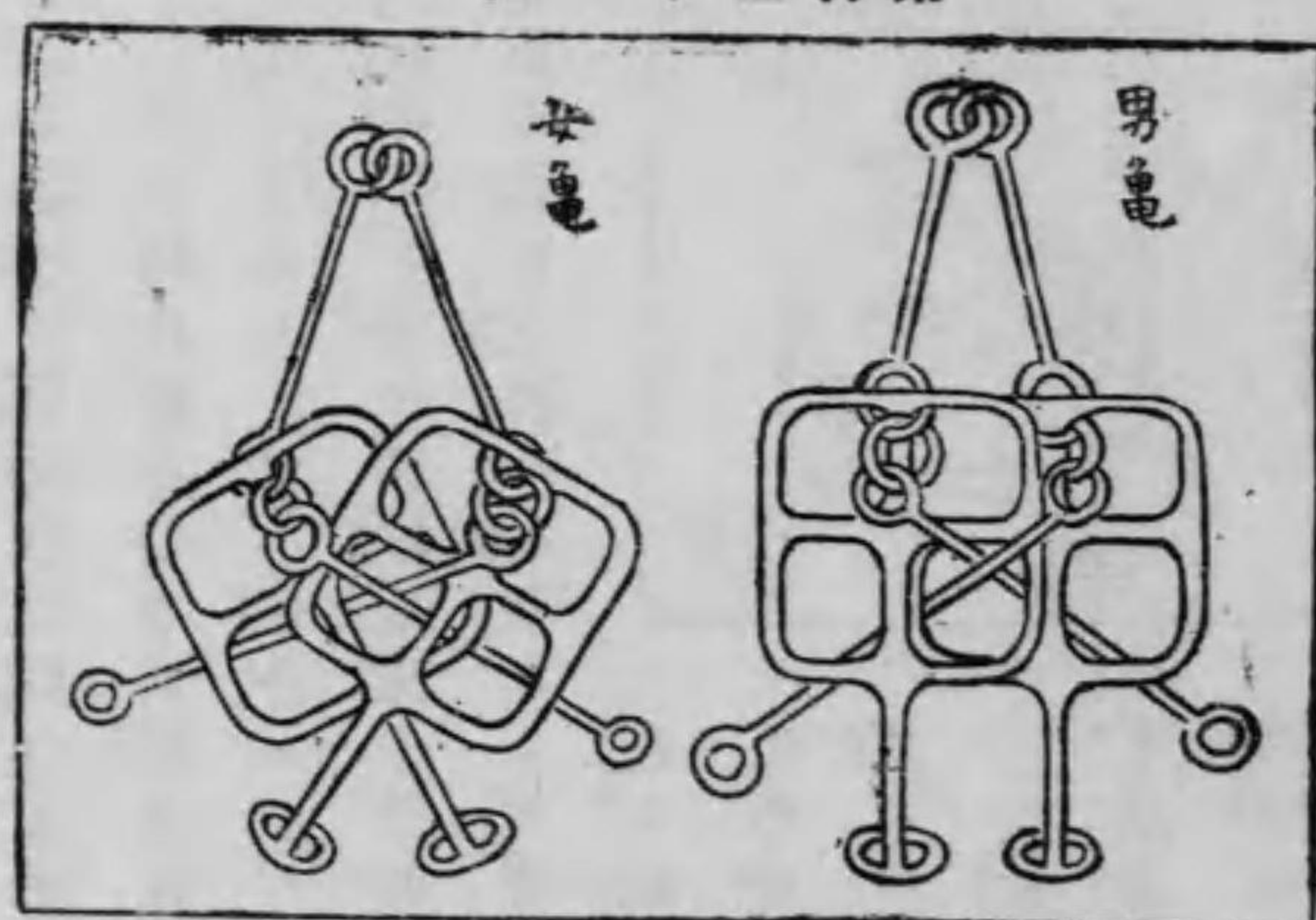
始りとも云ひ、又古田織部正が野掛の折柄これを以つて、蒲と剪春花を活け留めてより始まるとも云ひます。或は又小堀遠江守は、伏見の城の馬見所にて轡留を用ひたりといひ、片桐石見守は南都法隆寺に於いて之を用ひ、千利休もまた馬盟に製らへたる黒塗の花器に是を遣ふて蓮を活けたりと云ひ、是等の記録はいと多くあります。そはとまれ、轡はこれも一つの曲留とも見るべく、もと賤しき品なれば貴人請待の席、あるひは儀式の挿花等に用ふべき具ではありませぬ。平生とても決して床の間へは上げず、遠棚の下か椽側に下げて用ひ、會席にても尙下座の方にて遣ふべきもので

圖十五百第



蒲と剪春花を活け留

圖一十五百第



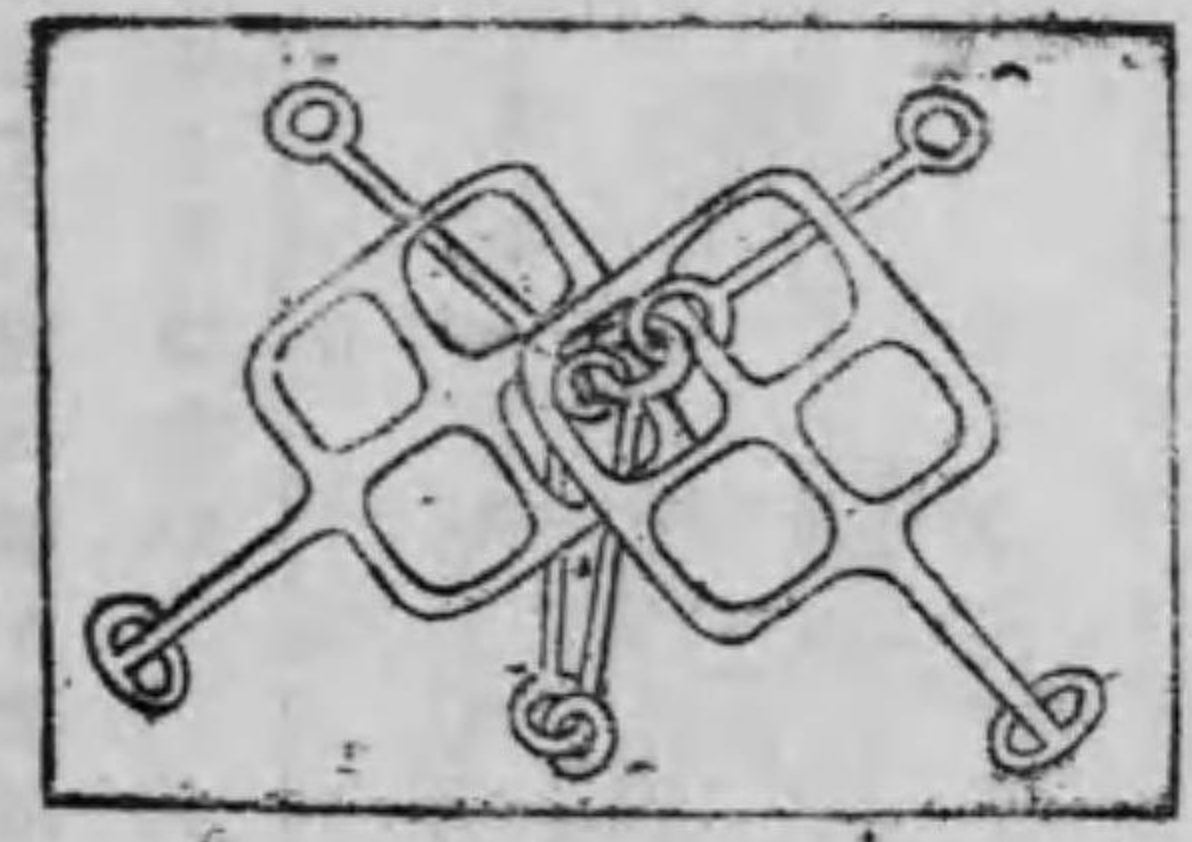
あります。轡は組んで用ひるもので、原來遠州家の秘儀なるが、後諸流共に用ひる事となつたので、もと四十八種の組方有りとは云へど、流儀によりて用ひると用ひざるものあり。又多少の相違もある様なれば、今は畧して名高きもの而已を茲に述べます。先づ、

一、龜の組方は、始め引手を鏡の裏の方へ抜きをき、鏡の裏を上にして紐付を前に揃へ、片羽を兩方打重ねて、双方内の方の穴を揃へ、紐付の方の中の穴へ二つ共引手を差し込み、行き違ひにして双方へ張つて止るので、舎は紐付とは反對の側に向はせ、これを龜の頭とするのであります。尤も是は男龜にて女龜の組方も又同じく、只鏡を

斜にして紐付を引違ひに重ねるばかりの違ひにて、これを圖に顯はして對照すれば第百五十一圖の通りであります。尙今一つ、

一、雙龜 と云ふは第百五十二圖のごとく、向ふに出る龜は己れの引手をもつて、後の龜の首、

圖三十五百第



則ち紐付に引きかけ、後の龜もまた己が横腹より一方の合金に掛けて留るのであります。

一、蟹 は第百五十三圖のごとく鏡の角を斜に重ね、手網掛けを正中の穴へ入れて合金を前に曲げ、この合金の穴へ引手の先を入れて留るので、此組方は甚だ堅くして木物など入れるに至つて都合がよろしい。

一、浮蛙 ははづしたる儘の轡を、鏡の表を下にし

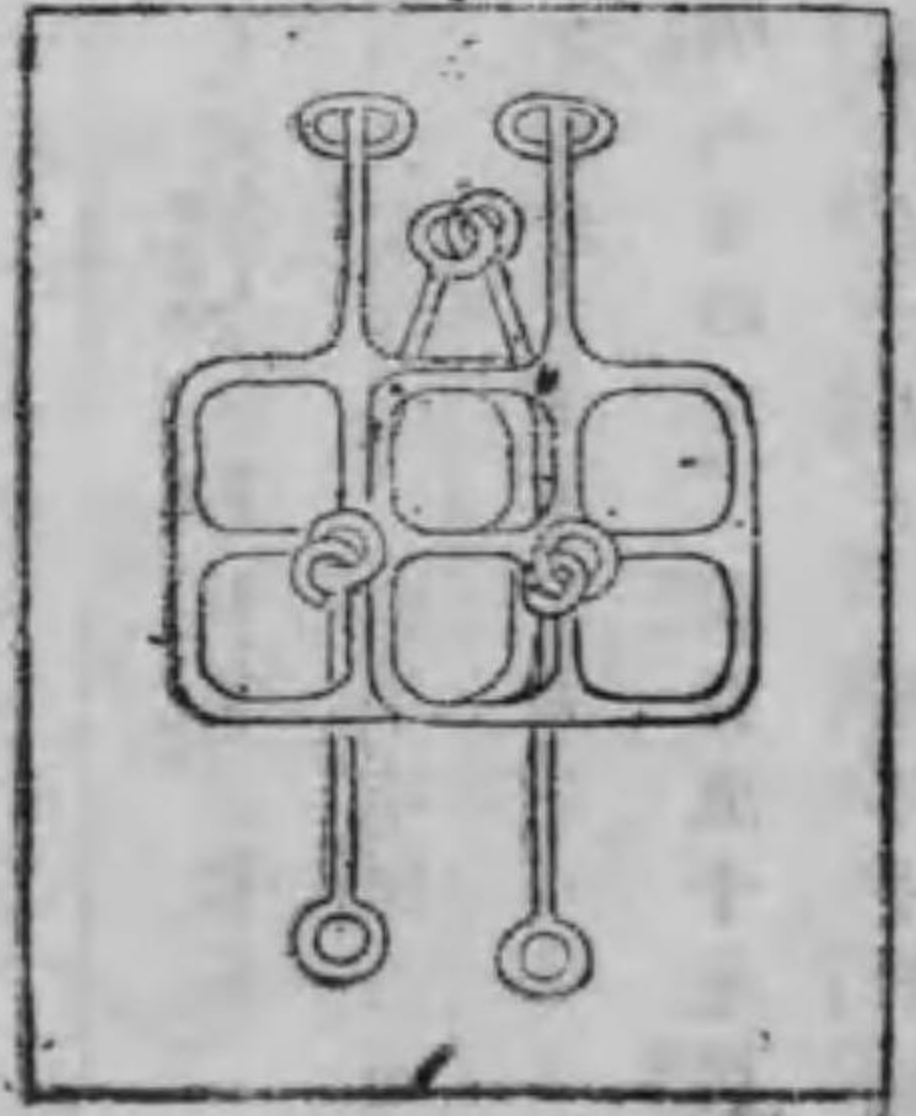
圖二十五百第



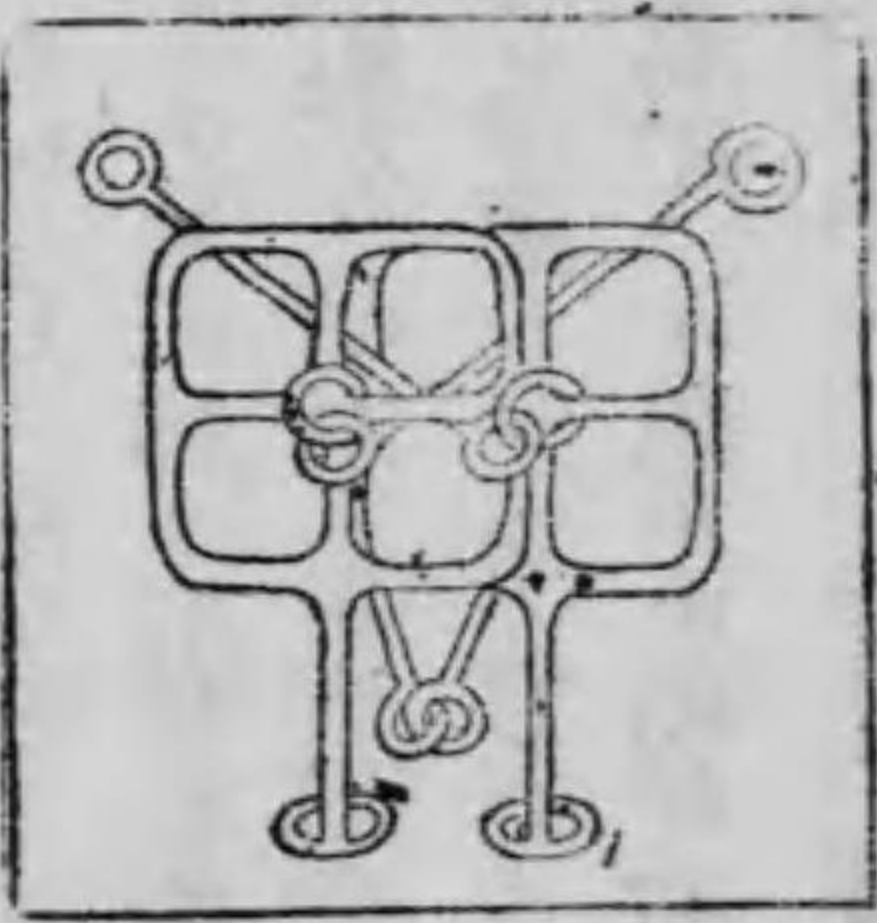
て第百五十四圖の如く片羽を重ね、含を紐付の方へ倒して頭とし、引手は後へ流して足とするのであります。

一、花車 は是もはづしたる儘の轡を兩方ともに鏡を横に立て、紐付の方の上の穴へ引手二つ共双方へ引き通し、含は車の向ふになるのであります。

圖四十五百第



圖五十五百第



同じく、含を前にかゞめて、手網掛けを後ろへ引くのであります。

一、蟬 と稱する組方は第百五十五圖のごとく、男龜に組みたる轡を其まゝに、合金を紐付の方へかゞめて前足とし、また引手を反對に其股より後ろへ引き廻すのであります。

一、蓑 と云ふは、女龜をそのまゝに蟬を組みと

一、海老 は第五百十六圖の如く鏡の尻を合せ、此の重ねたる一方の穴へ行達はせて引手を貫き透し、反對の側へ合金を出して足とするので、この組方は幅廣きゆる魚道を明けて花を挿けるに至つた都合がよろしい。

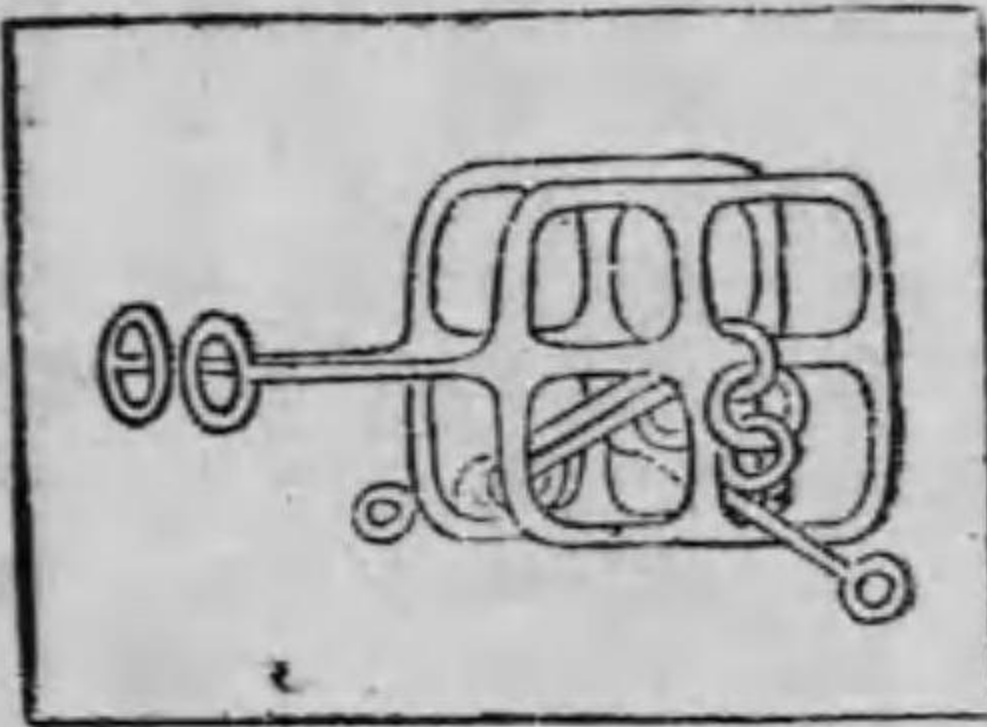
一、水鳥 の組方は鏡の表を下にして片羽を重

ねかけ、中の紐付の方の穴へ二つともに引手

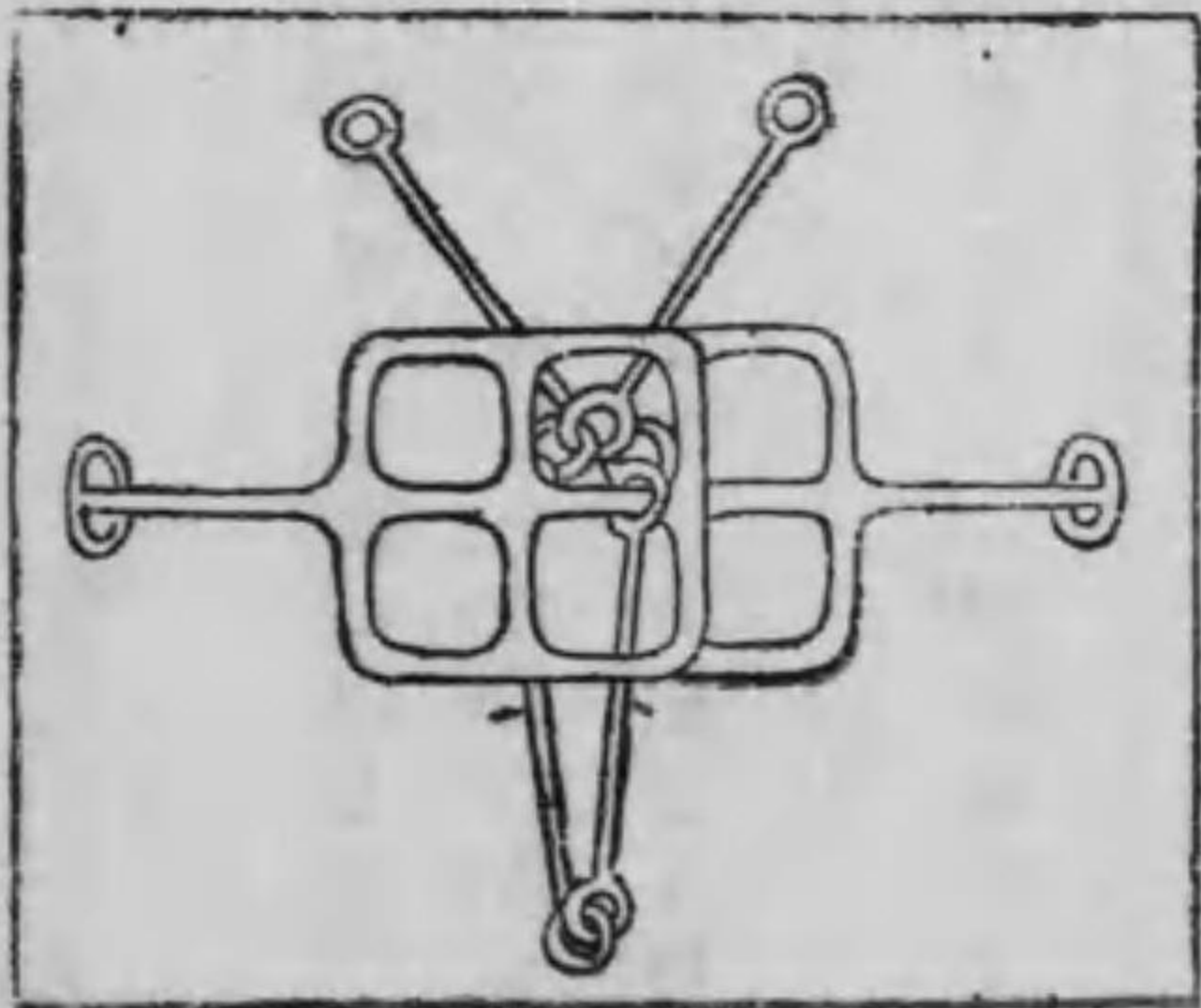
を入れて打ち違ひにするので、合金は鳥の頭となり、引手は兩方へ踏ん張りて足となるので、引手は豫じめ鏡の裏の方へ抜き透して置かねばなりません。

一、御所車 は又御幸とも唱へるので、第五百十七圖のごとく鏡の表を内にして横に立て合せ、引手を行達

圖七十五百第



圖六十五百第



ひに下の穴へさして合金を前に倒し、これを以つて引手を押へ堅めるのであります。

一、不二の影 は第五百十八圖のごとく、紐付を行達はせて鏡の角を少しく重ね、含を前に倒して一方の紐付をこの合金の間にに入れて堅めるので、引手は只轡の下へ打ちがへて敷くばかりであります。これは丈低ければ薄鉢などに入れるに、水中に漬りて都合よき組方であります。尤も轡は小形のものを用ひるがよろしい。

圖八十五百第



一、懸轡 は又片轡ともいふので、別に組方はありません。その遣ひ方は第五百十九圖のごとく、一方の鏡は花器のうちに挿して花を挿し、又一方の鏡は花器の外に出して其儘に置くのであります。すべて轡を組む時は、随分音をたてぬやうに取扱はねばなりません。ぎこちにて組み難き時は振りほどき、又鏡の左右を振り替へて組み直すがよろしい。

圖九十五百第



へぬやうに込みを入れて止めるがよろしい。或は又穴に詰りて多く入らぬ時は魚道をあけて、別の穴に入れるのであります。頭の重きものや、餘りに丈高き草木を活けるときは、花留より花の方が勝ちて傾き覆へるものなれば、左様

勿論他の花留の如く強からず、而かも縁側などにて、風當りの強き處にては花の保ち難きものなれば、成るべく確かりと組み、花も随分堅く活けねばなりません。花留の穴大きくして花止りに悪くければ、見

のときには重しをもつて押へて止めるも宜しけれども、兎角手輕な花を活けるがよいのであります。草物業物に活けるには、通例の如く一本宛入れる事は出来ませぬ。夫故に大抵花の振りをこしらへ、葉も順に重ねて一纏として穴に入れるので、然らざれば替が亂れて挿けられぬものであります。併し一塊まりにしては風流なる花は出来ぬものゆゑ、草物にせよ葉物にせよ、矢張り始めに用を入れ次に添を入れ、夫より受、体と過半を入れたる時替を確とかため、其上にて追々姿をつくらふが宜いのであります。

(十四) 飾石

廣口、砂鉢の類の花器に、砂留にして花を活けたるときは三歳の石を飾りて庭園の趣きを寫し、或は尙飛石を添へて景色を調ふる事などあります。飾り石は繪に見る山の如き形したる、格好よき石を以つて天の石とし、平らかなる形を備へたるを地の石とするので、天石は陽にて地石は陰であります。又人の石

は山の形を中分に持ちたるを遺ふので、則ち天地陰陽の形を兼ね備へたるをもつて、人石を定むるのであります。

此の三歳の石据え様は第六十圖のごとく、先づ天の石を花器の正面大株の處へ据え、夫より主位なれば、地の石を右の方へ離して些しく前に寄せて据え、人の石は天地の間に左の方へ横に離して置くので、客位なれば地の石を左右、これを反對に置くのであります。尤も飾り石は三歳の三つには限らず、二つ以上花器の大小に應じて、七つ九つ十一迄も飾るので、或はこれに二神、安居石、不動石、水門石、客殊、客挿石、土吐などの名稱を附するのであります。石二つ飾るときには

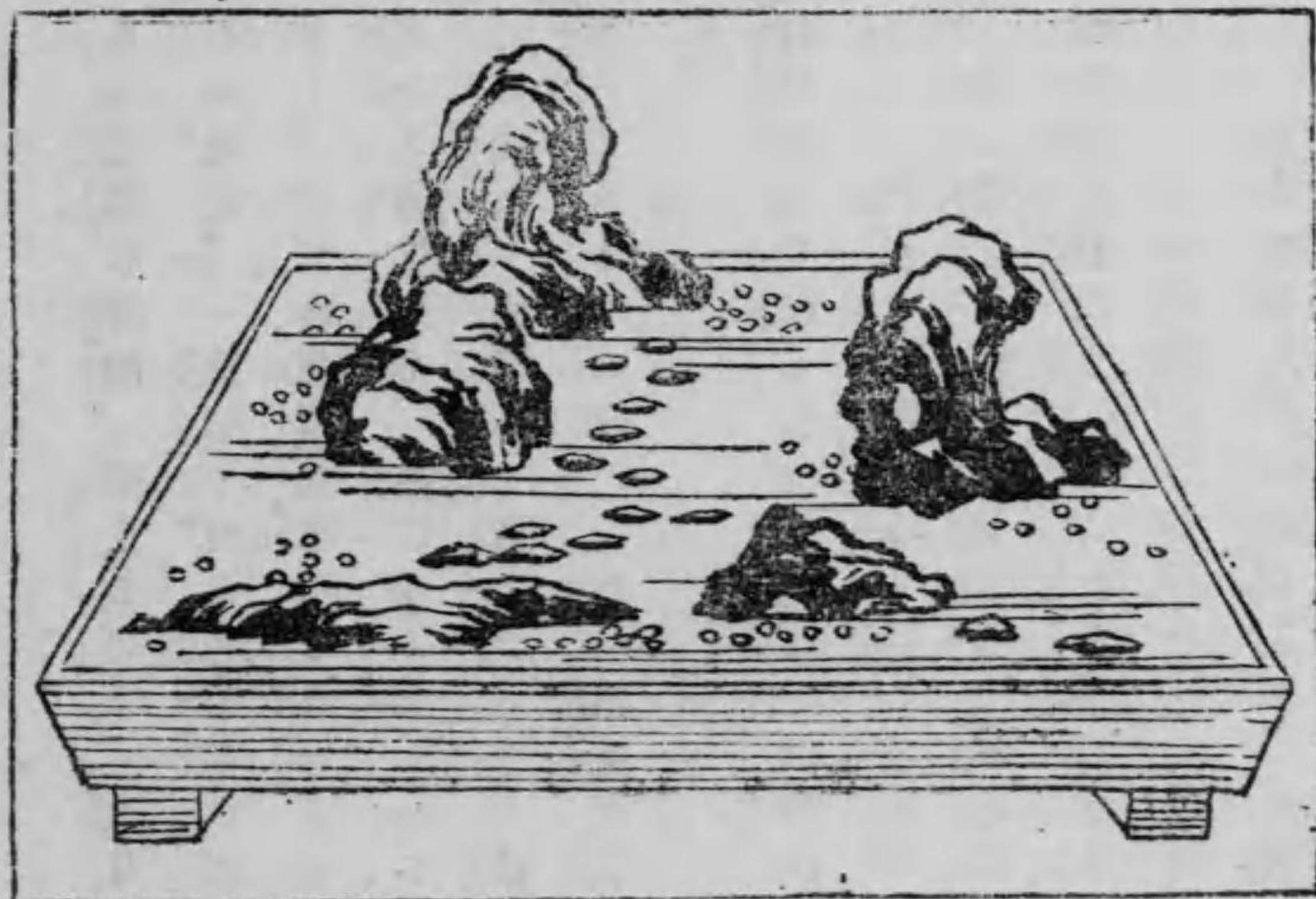
圖 十 六 百 第



小さな花器に陰陽と据えるので、大なる花器には花五種七種も活けて七つ九つも石を据え、一間餘も有る花器なれば、尙此上幾つも石数を増して遺ふ事もあります。いづれ花器相應なる大きさの石を用ひる事第一大切にて、大き過ぎても又小さ過ぎても、共にうつりよからぬものであります。花は石の前より出で、又後より出で、も苦しからず、或は都合によりては中心より先へ出でて、も差支へありませぬが、とかく其花と石の恰好を見て、景色よく飾らねばなりません。

飛石を添へて飾るには大廣口でなければなりません。踏出し踏返しは三歳の石のうち、何れより出で、も構ひませぬが、随分拙ながらぬやうに遺ふがよろしい。五石客位の飛石飾り方の一例を示せば凡そ第六十一圖のごとく、圖中黒は踏み返し石にて、又これを捨石とも云ふのであります。石の据え方は、始め飾り石より一寸離して小石を置くので、此石に陰陽の備へ方があります。夫より次の石は間を六歩明けて置き、又次の石は一寸明けて置き、又六歩又一寸

圖一十六百第



と、交互に一六の敷を以つて小石を据えるので、一寸開きの間に踏み返しの石を置くのであります。尤も石の敷は九つ十三其上は何程にても必ず半の敷にし、左右同じ姿にならぬやう悉く形を變へて、風流に石を据えるがよろしく、庭石の据え方等もこれと同様のものであります。

但し陰陽は石の容姿に依りて定めるので、丸き石は陽にて角なるは陰、長き石は陽にて平なる石は陰とし、是等をもて飛石の景色を備へるのであります。尙又砂石を遣ふときは白

きは陽にして花ある所に用ひ、黒きは陰にして花なき所に用ひるので、是をもつて水陸を分つときは、白きを陸とし黒きを水に象るのであります。

(十五) 垂撥

垂撥は東山義政の好みより始まりたるものにて、其形は第百六十二圖の如きものであります。もと琵琶の撥に似せたる物ゆゑ、上の狭き方を厚くし下の廣き方を薄く作られ、而して上より一尺五寸五分下に、

圖二十六百第



常盤山とことはいはすいはずじ、春くれぬまに來てもまたとへの歌を二行に書きたるよしにて、この歌の中にすいはつの四文字を詠み入れたのであります。此の歌異本には、

常盤山とはにはさかすいはつじ、春の日敷を又も來てとへ

と有り、義政の作とも持明院とも、或は園中納言基衡が書かれしとも云ひ、其説區々にして眞偽の程は詳らかでありませぬ。

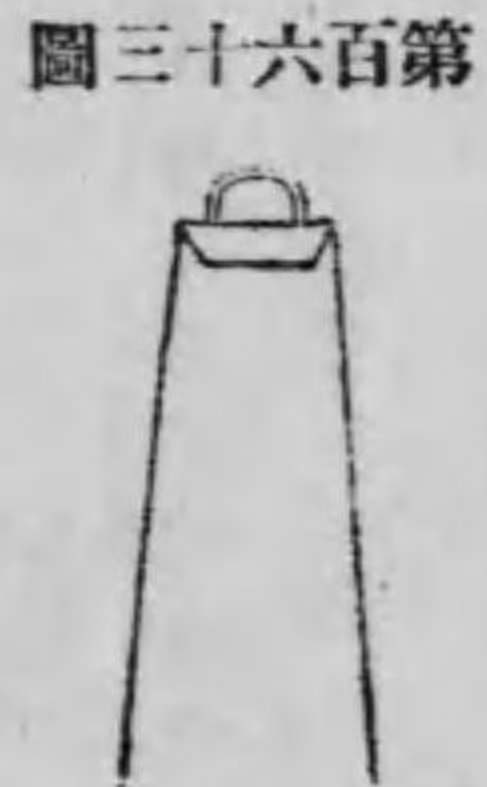
總長さは四尺九寸にて、上の幅一寸九分厚三分、下の幅四寸九分厚一分、強、其の中央に附けたる筋貫は長さ一尺三寸七分幅は一分半強、上なる掛穴は堅六分幅四分、穴の上の明き六分、筋貫の下切り残りは四寸九分明きであります。

或は又總丈四尺八寸、上の幅一寸六分下の幅四寸八分、板厚さ上下共に二分

四厘均一とし、筋貫より上の明き九寸下の明き同じく九

寸、筋貫の幅一分二厘、而して掛穴を穿たず、第六十

三圖の如く拵らへたるもあります。



尤も寸法は一樣ならず、流義々々に依りて、各々自家の好みを加ふるが故に異同を生じたので、東山頃の寸法は、總丈三尺八寸又は四尺八寸、上の幅二寸下の幅四寸五分、筋貫の長さ一尺五寸自至一尺六寸幅は一分、掛穴は堅一寸

二分幅六分、上より掛穴迄の間六分、夫より筋貫迄は一尺八寸又は二尺二寸五分であつたのであります。此外尙多くあれど、要するに大同小異にして一々擧

ぐるの類に堪えず、たゞ織田有樂齋好みの垂撥は稍々趣きを異にする所あれば、参考の爲めに次いでに記述致します。

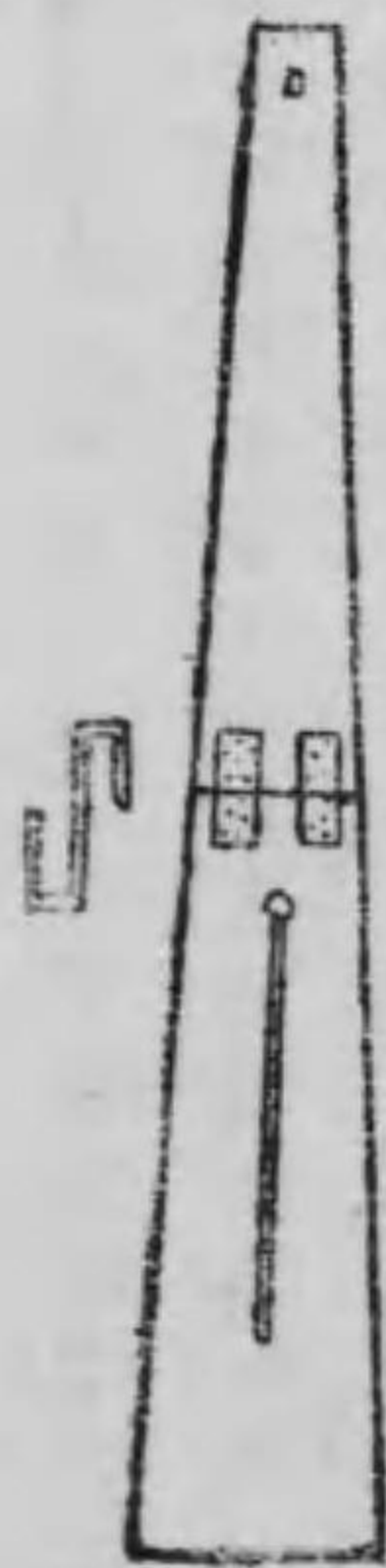
此の有樂齋好みに二通りあります。總丈は共に五尺五寸三分にて、上の幅一寸七分厚三分、下の幅五寸二分厚一分強、掛穴は常の如くにして上の明き六分、而して筋貫に換へるに上下に二箇の穴を穿ち、これに前圖の如き折釘を嵌めるので、下の穴は下より七寸四分のぼりて堅一寸三分幅四分を明け、上の穴は夫より一尺七寸七分のぼりて同様に明けるのであります。されば之には二箇の花器を掛けるので、僅かに一寸三分内に於て上下を爲し得るのみ、もつとも花活けるには二重切同様に心得てよろしい。今一つの作りは第六十四圖の如く、裏に蝶番を附けて二つに疊む様にしたる外、總て前者と異なる所はないので、之は屏風若くは長押などに、二細折の釘を以つて自由に引き掛け用ひる

によりしく、廣間にも相應するのであります。

さて垂撥は床の間又は床の外柱など、掛花を活けるに折釘のなき處に用ひ、筋貫に簾めたる折釘に花器を掛け、上下自由に位置を定めるので、

屏風、襖などには二重折の釘又は総緒をもつて長押などに掛けるのであります、

第百六十四圖



であります、原來之は張付の床ならでは用ひぬ事となつてゐたので、壁床には其中央に折釘を打つのであります、もし壁に中釘のなきときは、罷むを得ず用ひる事もあります。茶室小座敷などにはよろしけれど、廣間には裾をからげたる様にて、花も高く見ゆるゆゑに寫りよろしくありませぬ。軸物の代りに挿花を掛ける事は、軸物が季節なきものなる時に挿花を以て季節に應じ合すので二幅對の掛物なれば、中央に垂撥を掛けて季節の花を活け、三幅對なれば中央の一幅をはずして前の如くすることもあり、一幅なれば左右に一對垂撥を掛け

て各々時候の花を活けるのであります。尤も花は掛物に調和せしめる事が第一大切にて、一例を擧ぐれば龍虎の二幅對の中に竹の生花を掛け、或は松の掛物の左右に竹と梅の花を掛ける如く、掛物の繪と時候に應じて夫々工風せねばなりません。

垂撥に二重切の花器を掛けて花を活ける時は、上下の花を等分に振り違へるを禁するので、上の花大きければ下の花は小さく、下大きければ上を小さく活けるのであります。通常上に木物を入れ、下には閑靜なる草花を入れるが定法であります、時には下に木物を入れて上に草花を入れる事もあり、併し是は好ましき事ではありませぬ。尤も主客の位は上の花に依つて定むるのであります。

此の垂撥に似寄りたるものに、掛板と云ふがあります。總丈け四尺九寸五分、幅は上下共に三寸五分、上より九分の所に堅六分幅三分の掛穴を穿ち、筋貫なしに上より二尺三分下りて折釘を附けるので、之は自由に折釘を上下する事は

出来ませぬ。尤もこれも上下小口の切り方、掛穴の模様寸法など様々あれどいづれ大差はなく、其の取扱ひ方はすべて垂撥と更る事はありませぬ。

又千利休の作り始めたる下竹と云ふものがあります。太やかなる竹を二つに割り、長さ五尺許りに切りて上に掛穴を穿ち、下は竹の中程見合せに折釘を打つので、第百六十五圖の如きものであります。之も又床其他いづれへなりとも

第百六十五圖



勝手に掛け得る、極めて便利なるものであります。花器は竹、籠共に重複の嫌ひあればこれを避け

るがよろしく、鑄たる土器の類ひ最もうつりよく、且つ面白く感せられます。

又互寶軒好みの下竹と云ふは、太くして趣きある鑄竹を二つに割り、普通の垂撥の如く、其中央に筋穴を穿ち、折釘を之に嵌めて上下すること件のごとく、掛穴には二重折釘をかけ、又は總糸にても下ること、するのであります。長さは四尺九寸にて筋貫の長さ一尺三寸幅一分半、筋貫より下の明きは五寸であり

11
3
489

終

